松本市文化財調査報告No.30

松本市前田木下遺跡

――緊急発掘調査報告書――

1984.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

松本市前田木下遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1984.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

序

この前田遺跡は、昭和55年度に着工しました県営ほ場整備事業小赤地区にあり、当地区には、数多くの遺跡が散在し、当初より埋蔵文化財の存在が、確認されている遺跡であります。

昭和58年度の区画整理工事の着工にあたり、県・市教育委員会の皆様と事前打合せにより、調査方法・調査期間・費用負担等について、再三、御検討をいただき、発掘調査による記録保存の方針を決定しました。

調査の実施は、松本市教育委員会に全面的に委託を受けていただくことになりました。その結果、縄文時代から中世にわたる住居址をはじめ、土器・石器等数多くの出土品が発掘され、寿地区の歴史を探るうえで、貴重な資料となることと思います。

このように、発掘調査が、計画どおり完了できますことは、県・市教育委員会の適切な御指導と、お忙しい中、調査団に参画され、発掘調査にあたられた皆様の御尽力のたまものと感謝しております。

なお、遺跡発掘にあたり、寿土地改良区の役員・地元関係者の御協力と御理解により、支障なく調査が行われましたことに対して、あわせて謝意を申し上げます。

昭和59年３月

長野県中信土地改良事務所長　丸　山　仁　志

序

前田遺跡は寿地区の南端に位置し隣接する木下遺跡とともに以前から縄文時代の遺物を多量に出土しており、その重要性が注目されていた遺跡であります。ところが昭和55年度から進められている小赤地区の県営ほ場整備事業がいよいよ本遺跡の周辺にも及び、遺跡の破壊が懸念される事態となりました。このためほ場整備の工事に先だつ、遺跡の記録保存の実施が、中信土地改良事務所から松本市教育委員会に依頼され、今回の発掘を行うはこびとなった訳です。

発掘調査は、市教委職員を中心に地元考古学研究者の先生方等で組織した調査団により、10月3日から31日まで約1ヶ月間にわたって実施し、地元の皆様や寿史談会、土地改良区の御協力により、多大な成果をおさめて無事終了することができました。調査内容は本文で詳述してあるとおりでありますが、縄文時代から平安時代にかけての住居跡やそれに伴う多量の土器や石器が発見され、この地で古くから人々の生活が営まれていたことを証明する好資料となりました。

近年はさまざまな工事・開発に伴う事前の発掘調査が日本全国で急増していると聞きます。松本市もその例外ではなく、本年度の事前発掘は5件にのぼり、今回の前田遺跡の発掘もその1つでありました。埋蔵文化財を含む各種の文化財はひとたび破壊されてしまえば取り返しのつかないものであり、また現代に生きる私達だけのものではない、永く子孫に伝えられるべき性格をもつものであることは明らかなところでありましよう。特に埋蔵文化財は学術的な目的以外では発掘は行わず、現状のまま地中に眠らせておくことが最良の方法であるという説明の理由はここにあるのです。しかしその一方で私達の生活をより豊かにする開発・工事が必要なことも確かで、その兼ね合いの結果として行われているのが、記録保存と呼ばれる今回のような発掘調査なのです。これらの諸事情を御理解して頂くとともに、今回の調査の成果が活用され地域の歴史を解明していく一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査にあたりまして多大な御協力、御理解を下さいました関係各位に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和59年3月

松本市教育長　中　島　俊　彦

例　言

1　本書は昭和58年10月1日より10月31日にわたって行われた、松本市大字寿に所在する前田・木下遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。

2　本書作成のための作業は昭和58年10月2日より昭和59年2月29日にわたって行われた。

3　本調査の性格上、すべての作業は昭和59年3月31日までに終了しなければならず、従って本書もその条件内で作成したものであって、すべての遺構・遺物について充分な提示と検討がなされていない。御寛恕と御了解を願いたい。

4　発掘現場での遺構の測量・実測は、次の者が行った。

西沢寿晃・三村肇・平林彰・石上周蔵・高野昌英・関沢聡・高桑俊雄・直井雅尚

5　写真撮影は、現場作業については直井雅尚が行い、遺物については林宰男氏の協力を賜った。

6　本書の執筆は調査員等が分担して行い、文末に文責を記した。

7　本書作成のための遺物整理・挿図作成に関する作業は次の者が行った。

遺構図製図・トレース：柴田尚子・直井雅尚　　遺物実測：平林彰（縄文土器）・吉田浩明（弥生土器）・直井雅尚（土師器・須恵器）・高桑俊雄（石器・鉄器）・関沢聡（石器）　　遺物トレース：平林彰（縄文土器）・直井雅尚（土師器・須恵器）・高桑俊雄（石器・鉄器）・関沢聡（石器）　　拓影：滝沢智恵子　　土器復元：神沢昌二郎・滝沢智恵子・伊那史彦

8　図類の縮尺は次の通りである。例外となるものはその都度表示した。

各遺構図	1：60	縄文土器実測図	1：6
土器拓影	1：3	土師器須恵器実測図	1：4
石器（小形品）	1：2	石器（中・大形品）	1：4
鉄器	1：2		

9　本書の編集は事務局が行い、直井雅尚が中心となった。

10　出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目　次

第1章　調査経過

第1節　調査に至るまでの経緯……5

第2節　業務委託契約の概要……5

第3節　調査体制……6

第4節　調査地の位置……6

第5節　作業日誌……9

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡及び遺跡周辺の自然環境……13

第2節　周辺遺跡……17

第3章　調査結果

第1節　調査の概要……21

第2節　遺構……22

1　住居址

(1)　第1号住居址……22　(2)　第2号住居址……22

(3)　第3号住居址……25　(4)　第4号住居址……26

(5)　第5号住居址……26　(6)　第6号住居址……29

(7)　第7号住居址……29　(8)　第8号住居址……32

(9)　第9号住居址……32　(10)　第10号住居址……33

(11)　第11号住居址……34　(12)　第12号住居址……36

(13)　第13号住居址……36　(14)　第14号住居址……40

2　竪穴状遺構

(1)　竪穴状遺構1……40　(2)　竪穴状遺構2……42

3　土壙……42

4　集石……47

第3節　遺物……48

1　土器……48

2　石器……55

3　鉄製品……57

第4章　調査のまとめ……58

挿図目次

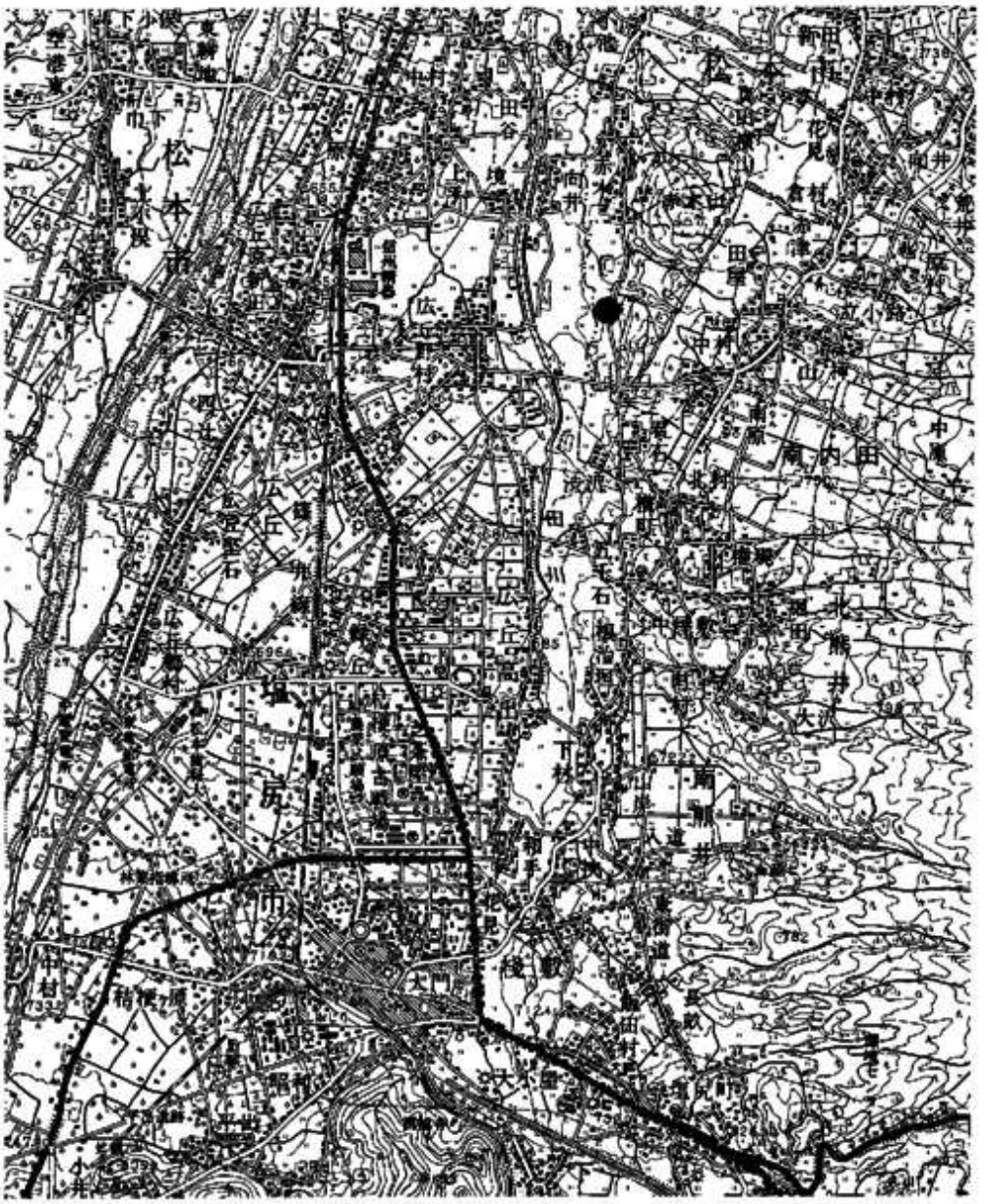
第1図　調査地の位置　(1)……4
第2図　調査地の位置　(2)……7
第3図　調査地の位置　(3)……8
第4図　南洞川浸食谷北壁の断面……15
第5図　赤木山丘陵南部東側の地層断面……15
第6図　遺跡トレンチ堆積概念図……15
第7図　周辺遺跡……18
第8図　前三遺跡遺構配置図……19
第9図　第1号住居址……23
第10図　第2号住居址……24
第11図　第3号住居址……25
第12図　第4・5号住居址……27
第13図　第6号住居址……28
第14図　第7号住居址……30
第15図　第8号住居址……31
第16図　第9・10号住居址……33
第17図　第11号住居址……35
第18図　ピット群(1)……37
第19図　ピット群(2)……39
第20図　竪穴状遺構1・2……41
第21図　土壙(1)……43
第22図　土壙(2)……44
第23図　土壙(3)……45
第24図　土壙(4)……46
第25図　集石……47
第26図　中期主要土器形態模式図……50
第27図　縄文土器実測図(1)……61
第28図　縄文土器実測図(2)……62
第29図　縄文土器実測図(3)……63
第30図　縄文土器実測図(4)……64
第31図　縄文土器実測図(5)……65
第32図　縄文土器実測図(6)……66
第33図　縄文土器拓影(1)……67
第34図　縄文土器拓影(2)……68
第35図　縄文土器拓影(3)……69
第36図　縄文土器拓影(4)……70
第37図　縄文土器拓影(5)……71
第38図　縄文土器拓影(6)……72
第39図　縄文土器拓影(7)……73
第40図　縄文土器拓影(8)……74
第41図　縄文土器拓影(9)……75
第42図　縄文土器拓影(10)……76
第43図　縄文土器拓影(11)……77
第44図　縄文土器拓影(12)……78
第45図　縄文土器拓影(13)……79
第46図　縄文土器拓影(14)……80
第47図　縄文土器拓影(15)……81
第48図　縄文土器拓影(16)……82
第49図　平安時代土器実測図……83
第50図　石器実測図(1)……84
第51図　石器実測図(2)……85
第52図　石器実測図(3)……86
第53図　石器実測図(4)……87
第54図　石器実測図(5)……88
第55図　石器実測図(6)……89
第56図　鉄器・鉄製品・銭……90

表 目 次

第1表　土壙一覧表……91
第2表　実測土器一覧表……93
第3表　石器一覧表……95
第4表　鉄製品一覧表……97

図版目次

第1図版　調査地近景……99
第2図版　調査地全景……100
第3図版　第1・2号住居址……101
第4図版　第4・5号住居址……102
第5図版　第6・7号住居址……103
第6図版　第8号住居址……104
第7図版　第11号住居址と竪穴状遺構1……105
第8図版　遺構細部……106
第9図版　遺物出土状態……107
第10図版　出土土器……108
第11図版　出土土器……109
第12図版　出土土器……110
第13図版　出土石器……111
第14図版　出土石器……112
第15図版　出土石器・鉄製品……113



第1図　調査地の位置（1）　1：50000

第1章　調　査　経　過

第1節　　調査に至るまでの経緯

昭和57年7月26日付、県教育長より昭和58年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財の保護協議実施について依頼があり、その中の対象遺跡に、初めて前田・木下遺跡の名が現れる。次いで8月3日松本市役所及び現地で協議が行われた。出席者は県教委文化課郷道指導主事、中信土地改良事務所清水係長他2名、市耕地課（横内）、市教委（神沢）。さらに8月12日付で県教育長より、前田及び木下遺跡の発掘を中信土地改良事務所より委託された場合受託に御配意頂きたい旨の通知があった。昭和58年5月6日付で中信土地改良事務所長より前田・木下遺跡の発掘調査依頼があり、9月1日に委託契約が締結された。これをうけて市教委では9月17日に「埋蔵文化財包蔵地前田木下遺跡の発掘調査について」の通知を文化庁に提出、10月1日より現場作業に着手した。

第2節　　業務委託契約の概要

委託者　　長野県中信土地改良事務所長　丸山仁志

受託者　　松本市長　和合正治

委託事業名

昭和58年度県営ほ場整備事業小赤地区　前田・木下遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託

発掘調査の目的

県営ほ場整備事業に先立ち250㎡以上を発掘調査し記録保存をはかる

調査団の構成

松本市教育委員会

発掘調査費

総額1,600,000円　うち発掘調査委託費1,160,000円

調査報告書

作成部数300部　　昭和59年3月31日までに刊行するものとする

第3節　調査体制

団長：中島俊彦（教育長）　　担当者：神沢昌二郎

調査員・調査員補助：倉科明正、大久保知己、山田瑞穂、西沢寿晃、青沼博之、三村肇、山越正義、横田作重、太田守夫、森義直、百瀬新治、降旗俊行、山本紀之、石上周蔵、平林彰、関沢聡、高桑俊雄、瀬川長広、吉沢酉巳、大出六郎、三沢元太郎

事務局：田堂明（社会教育課長）、神沢昌二郎（文化係長）、百瀬清（主事）、熊谷康治（主事）、直井雅尚（事務員）

協力者：高野健介、古屋人兄、荘秀也、甕恵以子、今福君子、高野昌英、佐々木謙司、百瀬洗三、戸田大学、市川二三夫、鶴川登、堀内いくみ、高桑弘子、直井スガ子、松本とよ子、伊那史彦、三村竜一、山田真一、山下泰永、滝沢智恵子、石合英子、柴田尚子、小口妙子、吉田浩明

第4節　調査地の位置

調査地は傾斜地にあり、ほ場整備事業の工事終了後は地形が大幅に変わり、景観が一変してしまうことが予想される。この為、工事終了後にも調査地の位置がわかる様に第2図を示した。その他、調査地の位置の記録は次の様である。

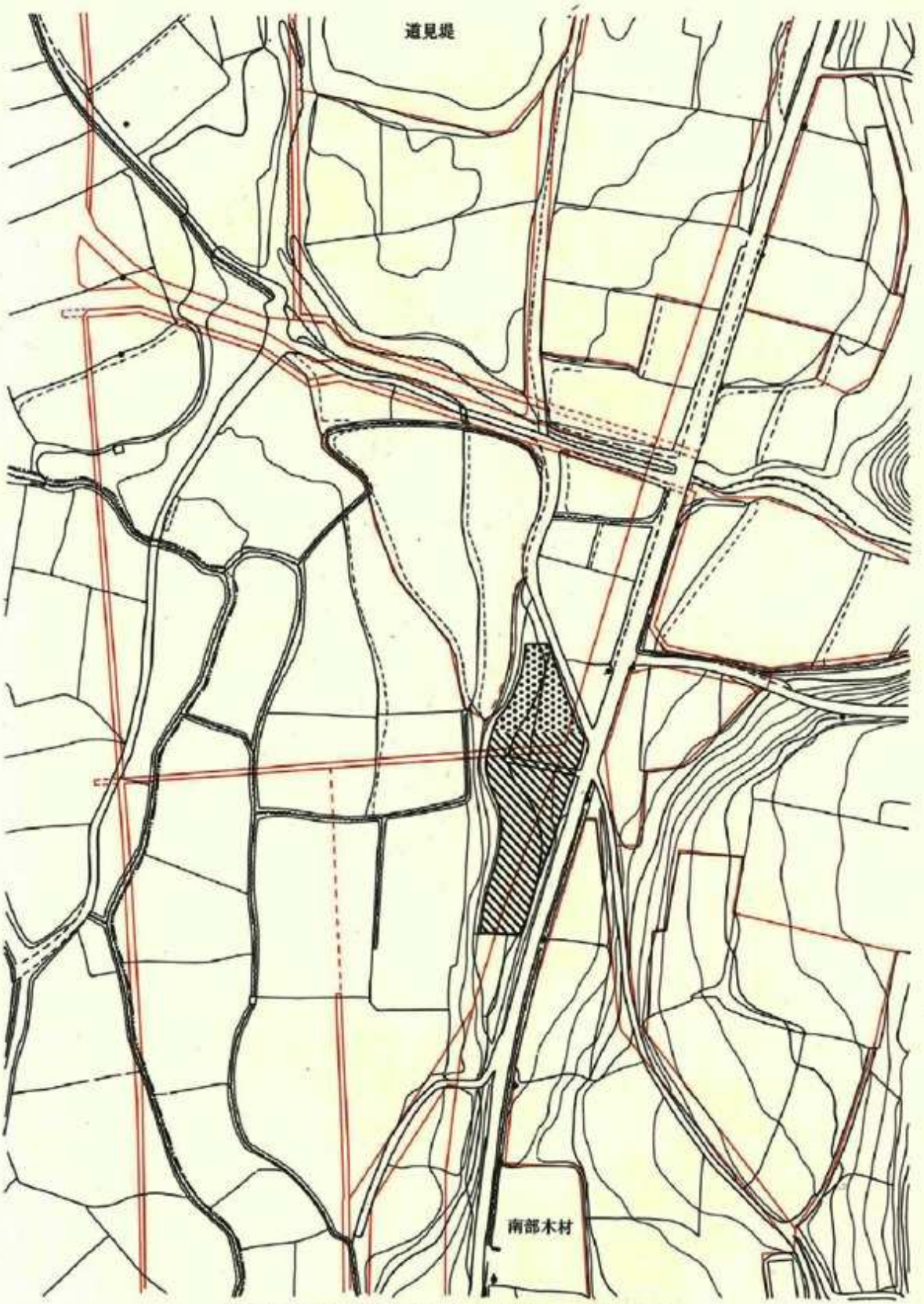
・松本市大字寿1567番地。県道新茶屋塩尻線の西側に面し、道見堤の南150～230m、南部木材（私有地）の北70～150m、中央自動車道長野線ＳＴＡ146＋80・ＳＴＡ147＋0の東140～160mの一帯。

・中央自動車道長野線のセンター杭を基準にして導きだした、調査地中央杭（ＮＳＯ・ＥＷＯ、第3区調査地中央の＋印）の座標：Ｘ＝16670.484　Ｙ＝－47419.582。

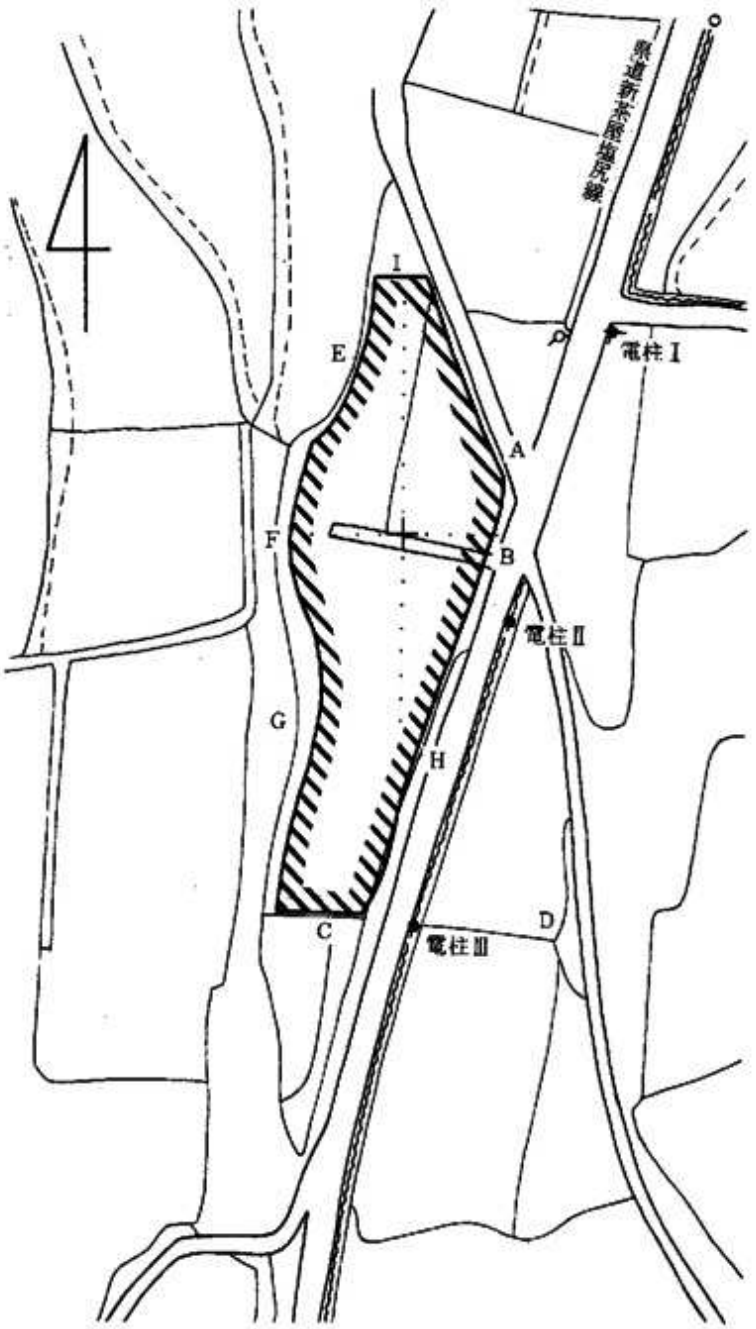
・調査地の近隣に、今後、撤去移動されないであろう標識は得られなかった。周辺の電柱、私有地の隅などと調査地中央杭との距離及び、調査地中央杭を通る真北のラインとそれらのなす角度（真北を視準して右回りに測定）を記すと、電柱Ｉ（$\begin{smallmatrix}5\\9\\7\end{smallmatrix}$511^{昭}）：37.4m・44°、電柱II（$\begin{smallmatrix}5\\9\\7\end{smallmatrix}512\begin{smallmatrix}昭\\56\\2\end{smallmatrix}$）：17.6m・129°、電柱III（$\begin{smallmatrix}5\\9\\7\end{smallmatrix}413\begin{smallmatrix}昭\\56\\2\end{smallmatrix}$）：50.6m・178°、南部木材敷地北西隅：115.3m・185°。

・原地形における標高は海抜659～661m、調査時の測量用Ｂ.Ｍ.は海抜660.775m。

なお、調査地の位置及び作業進行状態を記録した写真は第3図Ａ～Ｈの各地点に立って撮影したもので、作業日誌の写真のカッコ内の説明が撮影場所と撮影方向である。また、調査地の背景は、作業日誌写真3・9・12等の遠方の森が丘中学校、2・15の後方中央、5・12の左後方が南部木材、1の後方中央の白い建物がエプソン広丘事業所である。



第2図　調査地の位置　(2)　1：2000　　赤はほ場整備後



第3図　調査地の位置（3） 周辺の標識と写真撮影方向

第5節　作業日誌

昭和58年10月1日（土）　晴

下神遺跡にいっている発掘器材の整理と本遺跡への搬入。

作業員：堀内いくみ　　調査員・調査員補助：瀬川長広、三沢元太郎

市教委：直井雅尚、高桑俊雄

10月3日（月）　晴

トマトのマルチはぎ。試掘、重機による表土はぎ。テント設営。

作業員：古屋人兄、堀内　　調査員・調査員補助：瀬川、三沢　　市教委：直井、高桑

10月4日（火）　曇

下神より2回目の器材搬入。重機による表土はぎ。遺構検出。

作業員：古屋、堀内、荘秀也　　調査員・調査員補助：瀬川、三沢

市教委：百瀬清

10月5日（水）　曇のち晴

遺構検出・第1号～第4号住居址確認。

作業員：古屋、堀内、荘、憂恵以子、今福君子　　調査員・調査員補助：石上周蔵　　市教委：直井

10月6日（木）　晴

第2号住居址掘り下げ。土器多数出土。第2号住居址のセクション図作成、その後遺構写真撮影。遣り方測量の準備を行う。

作業員：古屋、堀内、憂　　調査員・調査員補助：石上、瀬川、三沢

市教委：直井

10月7日（金）　晴時々曇

第2号住居址セクション図作成。ベルトを外し土器とりあげてのち測図。第1号住居址掘り下げ。第6号住居址検出後掘り下げる。

作業員：古屋、堀内、荘、憂、今福、高野昌英、佐々木謙可　　調査員・調査員補助：石上、太田守夫　　市教委：直井、高桑

1．10月3日　テント設営
（DからC・G方面 遠景）

2．10月3日　調査地
（IからC・H方向 近景）

3．10月3日　調査地
（AからC・G方向 遠・近景）

4．10月5日　調査地
（DからE・F方向遠景）

10月8日（土）　曇のち雨

第1号住居址及び第6号住居址掘り下げ。雨の為午前中で中止。

作業員：古屋、堀内、荘、甕、今福、高野、佐々木　　調査員・調査員補助：瀬川、三沢　　市教委：直井、高桑

10月11日（火）　雨　雨の為発掘中止。現場で出土品の整理を行う。

作業員：堀内　　市教委：直井

10月12日（水）　晴

第1号住居址掘り下げセクション図及び遺物出土図作成。ベルト取り外し。第4号住居址掘り下げセクション図作成。弥生時代の住居址と確認。第5号住居址掘り下げ。土壙を1つ検出後断面図作成。第6号住居址セクション図及び遺物出土図作成。第7号住居址掘り下げ後セクション図作成。

作業員：古屋、堀内、荘、甕、高野、佐々木、百瀬洗三、戸田大学、市川二三夫　　調査員・調査員補助：瀬川、三沢　　市教委：直井、高桑

10月13日（木）　曇

第7号住居址掘り下げ後写真撮影。土壙3～6を掘り下げその後セクション図作成。第6号住居址柱穴の断面図作成。第6号住居址周辺の落ち込みらしき黒色土の部分にトレンチを入れる。

作業員：古屋、堀内、荘、甕、今福、佐々木、百瀬、戸田、市川、高野鍵介、鶴川登　　調査員・調査員補助：平林彰、大出六郎、瀬川　　市教委：直井、高桑

10月14日（金）　晴のち曇

第3号～5号住居址測図。第6号住居址の柱穴掘り上げ。土壙3～6の掘り上げ。土壙12～14、16、17のセクション図作成。第9号住居址周辺及び第3号～5号住居址北の柱穴掘り下げ。

作業員：古屋、堀内、荘、甕、高野(昌)、佐々木、百瀬、戸田、市川　調査員・調査員補助：平林、瀬川　　市教委：直井、高桑

10月15日（土）　晴

第3号～5号住居址北の柱穴掘り下げ。第1号、第2号住居址間の

5．10月3日　表土はぎ
（AからC・H方向 近景）

6．10月3日　表土はぎ
（AからC・G方向 近景）

7．10月3日　表土はぎ
（GからI方向 近景）

8．10月3日　表土はぎ，試掘
（BからC方向 近景）

柱穴、土壙掘り下げ。第1号住居址内の柱穴掘り下げ。第2号、第4号、第5号住居址の遺構写真撮影。第9号、第11号住居址掘り下げ。土壙3～11掘り下げ後測図。土壙12、13及びそれらの西側柱穴の測図。
作業員：古屋、堀内、荘、甕、今福、高野(昌)、佐々木、百瀬、市川、鶴川、高野(健)　調査員・調査員補助：三村肇、瀬川、大出　市教委：直井、高桑

10月17日（月）　曇のち晴

第5号住居址測図。第8号～11号住居址掘り下げ。土壙3～19測図柱穴群掘り下げ後測図。
作業員：鶴川、荘、今福、佐々木、百瀬、戸田、市川、堀内　調査員・調査員補助：三沢　市教委：直井、高桑

10月18日（火）　曇時々晴

第8号、第10号、第11号住居址の掘り下げ続行。柱穴群のセクション図作成。集石土壙である土壙32の断面図作成及び測図。
作業員：鶴川、佐々木、百瀬、戸田、堀内　調査員・調査員補助：横田作重、西沢寿晃、三村、瀬川、三沢　市教委：直井、高桑

10月19日（水）　曇時々雨

第8号住居址の床面検出。第10号、第11号住居址掘り下げ続行。柱穴のセクション図作成及び掘り下げ。雨の為午前中で作業中止。
作業員：荘、佐々木、百瀬、戸田、鶴川　市教委：直井

10月20日（木）　雨

雨の為発掘中止。現場にて出土品の整理を行う。
作業員：堀内　市教委：直井

10月21日（金）　晴

第8号住居址柱穴掘り下げ。土壙31、ピット80～83掘り下げ。
作業員：鶴川、古屋、荘、高野(昌)、佐々木、市川、堀内　調査員調査員補助：瀬川、三沢　市教委：直井、高桑

10月22日（土）　晴一時曇

第8号住居址写真撮影。ピットのエレベーションを行う。
作業員：堀内　市教委：直井、高桑、関沢聡

9．10月5日　遺構検出終了部分
（AからF方向 近景）

10．10月7日 第1号住居址掘り下げ
（IからC・G・H方向）

11．10月15日　第1・2号住居址間の土壙（FからB方向）

12．10月15日　各作業風景
（AからC方向）

10月24日（月）　雨のち晴

第1号、第2号、第9号、第10号住居址測図。

作業員：堀内　　市教委：直井、高桑

10月25日（火）　晴

第4号、第8号住居址測図。

作業員：堀内　　市教委：直井、高桑

10月26日（水）　曇一時晴

柱穴、土壙測図。基準杭の海抜高度を出す。

作業員：堀内　　市教委：直井、高桑

10月27日（木）　雨のち晴

第4号住居址埋甕炉、第8号住居址埋甕2ヶ、第9号住居址西の伏甕、土壙50出土土器の測図及び取り上げ。第1号、第2号住居址の炉址断面図作成。

作業員：堀内　　市教委：直井、高桑

10月28日（金）　晴

第6号住居址カマドの断ち割り。柱穴断面図作成。レベル記入。

作業員：堀内　　市教委：直井、高桑

10月29日（土）　晴

第11号住居址検出。第6号住居址カマドの断ち割り。

作業員：堀内　　市教委：直井、高桑

10月31日（月）　晴

第6号住居址のカマド測図。テントを片付け　島内・島立遺跡へ器材の搬出。

作業員：堀内　　市教委：直井、高桑

遺物整理作業は、発掘作業に平行して行うと共に発掘終了後も行った。10月1日～昭和59年2月29日現在で次の者が携わっている。

調査員・調査員補助：平林彰　　作業員：伊那史彦、石合英子、小口妙子、柴田尚子、滝沢智恵子、松本とよ子、三村竜一、山下泰永、山田真一、吉田浩明　　（事務局）

13．10月14日　第5号住居址測図
（BからF方向）

14．10月12日　第7号住居址断面図
（CからA・I方向）

15．10月13日　第6・7号住居址周辺
（FからC・H方向）

16．10月26日　調査終了部分
（AからF・G・C方向）

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡及び遺跡周辺の自然環境

1　位置と地形

本遺跡は寿赤木集落の南およそ600m、南北に走る県道新茶屋塩尻線沿いに広がっている。地形上から見ると海抜660～665m、赤木山の丘陵の西南端に位置し、南洞川の扇状地性の堆積物による傾斜面上に展開している。赤木山から離れた平坦面にある寿小赤遺跡に比べ、がいすい性や扇状地性の堆積物の傾斜面にあるのは対照的である。このような傾斜面は丘陵面に次いで遺物の出土が指摘されてきた。

さて遺跡の地形面と堆積層に最も関係をもつのは南洞川であるが、周辺地形として赤木山丘陵と小田川は見過すことはできない。そこでまず南洞川、赤木山丘陵、小田川について概観する。

南洞川：南洞川は赤木山の丘陵を浸食し、その堆積層を下流に運んで扇状地性の小地形をつくっている。その上流はとうね沢といい、鉢伏山地に発して、塩尻市南内田地籍に浸食堆積をくりかえした末、赤木山の丘陵を切って深い浸食谷(比高3～10m)をつくっている。このため南洞川の堆積物には、赤木山の堆積層のほかに、南内田に広がるローム層や、山ろくの二次堆積物が混在していると考えられる。

赤木山丘陵：赤木山丘陵の南部は、西側の比高25m、東側の比高5m以下で、南端を小田川によって切られている。西側は田川沿いからみると、丘陵のふもとに台地とも、段丘地形ともみえる地形面があり、塩尻市君石の扇状地性堆積物へ連続している。東側は西側とは対照的で、北部からN30°E、ほぼ直線的に1mほどの落差をもって、水田地域に対していた(現在は、ほ場整備により落差は更に大きくなっている)。この落差は地形異常と考えられ、赤木山を切る河川や谷の先行性などとあわせ、断層活動(地塁)を想定されたところである。水田地域は耕土深度20cm(1部40cm)その下部は遺跡面と同じ、角れきを含む褐色ローム質粘土質土壌で、また湿地性である。赤木山丘陵面では、多くの遺物が発見されているが、水田地域は、ほ場整備に当っても、なにも発見できなかったという。

現在、赤木山は電探の結果、内部に石英せん緑岩や、ひん岩の存在は予想されていない。赤木山の堆積層の上部層はマトリックスは火山灰質あるいは粗粒砂(珪質)、ところにより泥炭質のシルトや風成ローム層が介在、下部層は赤木山れき層と呼ばれる、とうた不良の亜角れき層による、扇状地性、がいすい性の堆積層である。(第4図、第5図)

小田川：小田川は扇状地性堆積物をもって、赤木山の南部周辺の地形面をつくったが、遺跡まで及んでいない。遺跡面との関係は、西側の段丘がいをつくった側方浸食の営力（田川も含む）が考えられている。小田川沿いは、現在休耕田になっているが、湿田であり、段丘上にも、ゆう水をみる。恐らく小田川など山ろくを流下した、諸河流の影響であろう。

遺跡の地形面

以上周辺の地形の概観から、遺跡の地形面に限定してみると、次のように考察できる。

まず傾斜面の上（東）は丘陵面（東側N30°E。比高30m内外）、下（西）は田川・小田川の沖積面、南は丘陵の末端やがいすい性の堆積物の面に続く。北は遺跡の傾斜面をつくったと考えられる南洞川の現河流（N60°W。傾斜1000分の40）と浸食谷に接している。遺跡の面は畑地（一部最近、湯水開田）として整地、原形が変更されているが、北～北西へ1000分の10のゆるい傾斜をもって、赤木山集落に達している。しかし発掘地域は、西へ平均1000分の80の傾斜を示し、その末端を120m西を流れる小田川（N－S1000分の7）の沖積面で切られ、落差は1～2mとなっている。南洞川の現河流の西北西流に対し、この傾斜面が西傾斜であることは、南洞川の乱流を物語るもので、発掘地域にその堆積状況がみられる。従ってこの堆積面は古いもので、現河流はその先へ新しい地形面をつくっている。

傾斜面の性格については、赤木山丘陵の西側が、田川（奈良井川）による浸食面なのか、断層活動による地塁なのか、未解決の点が多い現在断定は難しい。しかし傾斜面の堆積物の状況、発掘地以南の田川沿いの地形をみると、小扇状地性の堆積物を田川が浸食し、段丘状の地形をつくったとする方が説明がつく。この段丘状の地形を、多くの小河流が浸食し、その運搬物質を更にその前面に広げたのが、現在の地形と考えられる。なお遺跡の傾斜面の扇状地性堆積物の下層に当然がいすい性の堆積物や丘陵の末端が存在するものと考えられるが、現状では発見できない。

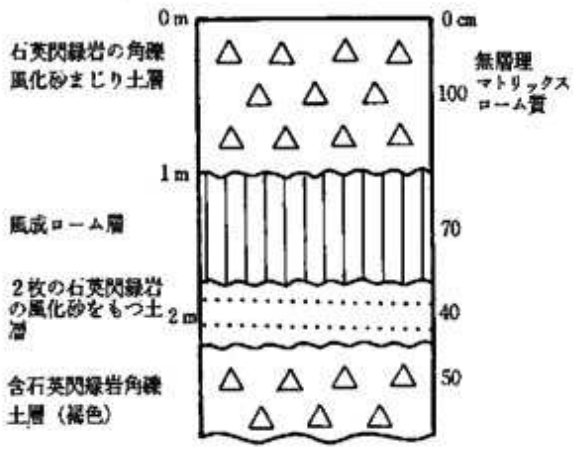
2　遺跡の堆積層とれき

遺跡の堆積層は発掘地でみる限り、第一層（30～50cm）と第二層（50～70cm）からなっている。各層ともがいすい性の堆積の性格が強いが、層内を細部観察すると、南洞川によるはん濫原状の堆積が指摘できる。（第6図）

第一層は黒灰色腐植土で、上流の土壌の影響を強く受け、ローム質土と珪質の砂および角れきまじりの土壌で、作土として利用されている（耕土深度20～40cm）。

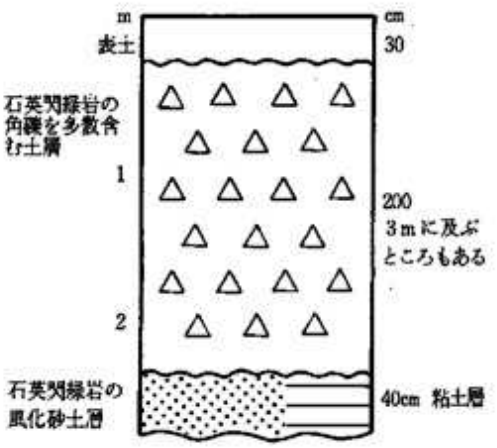
第二層は層内の変化が多く、発掘地においても、北、中央、南それぞれ対照的な堆積をもって第一層に接している。

北のトレンチは、黄褐色ローム質粘土質の土壌に、角れき・亜角れき（10×5cm大、5×6cm多数）をまじえた土質の堆積が主で、最北端近くに明らかに流れの跡を示すれき層が、また中央トレンチと接する部分の上層に、中央の延長と思われる角れきを、多数含む無層理の層と砂の層が重なっている。

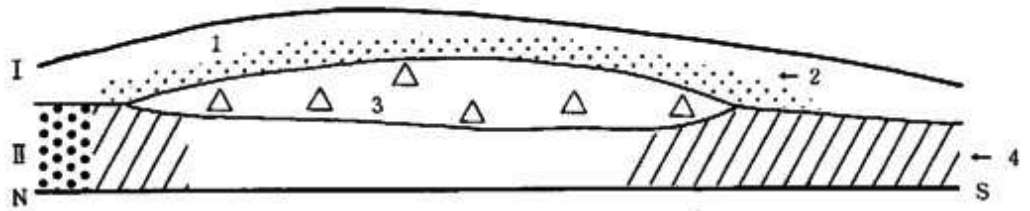


かつての調査ではこの下部に青い粘土に
亜円礫や流木を含んだ層があった
上面とは不整合

第4図　南洞川浸食谷北壁の断面



第5図　赤木山丘陵南部東側の地層断面



I　第I層耕土　　II　第II層

1　耕土腐蝕土　　2　珪質砂土　　3　含角礫無層理土

4　黄褐色ローム質粘土質土壌

第6図　遺跡トレンチ堆積概念図

中央のトレンチでは、40cmをこえる角れきや亜角れき（10×5cm多数）を多数含む、押し出し無層理のローム質粘土質土壌と、これを覆う30～40cmの珪質の砂土の層が広がっている。これらの分布の方向はN70°Eを示し、流れあるいは押し出しの方向と考えられる。

南のトレンチは一変して、黄褐色ローム質粘土質土壌となる。この土壌は中央の堆積物との接触点で、含角れき無層理層や珪質の砂土層に覆われている。しかしそれ以南に黄褐色土壌である。中央の含角れき無層理の下部は調査できなかったが、恐らく黄褐色土壌と思われる。遺跡の住居跡や柱穴は、これらの土層を切って掘下げたものと考えられる。

以上の土壌はいずれも南洞川の上流より運ばれたもので、南洞川の浸食谷の北壁の露頭でみられるように、ローム層とこれをはさんだ黄褐色土層に起源している。先にも述べたように黄褐色土層中には、風化した石英せん緑石やその崩壊した珪質の砂が多量に含まれていて、これが下流に運ばれ堆積したものである。更に上流の片丘地籍の堆積物（ローム層（初生・二次）と鉢伏山地起源の岩石）を再堆積あるいは再さい堆積したものである。

従って土壌中に入っている角れき、亜角れきは、いずれも鉢伏山起源の石英せん緑岩、ひん岩、緑色ぎょう灰岩とこれらのホルンフェルス（接触変質岩）、第三紀層の砂岩や泥岩のホルンフェルス（白っぽい）である。また珪質の砂は、石英せん緑岩の崩壊による石英粒が多い。

トレンチ内に運びこまれた岩石や石器類（石斧、砥石、石棒）のれき種は、砂岩が圧倒的に多く、粘板岩（砂質を含む）のほか、塩嶺産の安山岩、鉢伏山地産とみられる緑色火山岩や石英せん緑岩である。いずれも円れき、亜円れきであることは、田川などの川筋で得たものであろう。磨製石斧の蛇紋岩は他所よりの移入物である。

3　遺跡の立地

西～北西傾斜面にある前田・木下遺跡は、丘陵東側の豊富な出土品をもつ台地面の各遺跡に比べ、地形・日照など立地条件は劣るが、背後の丘陵との比高も小さく、まず恵まれた条件にあるといえる。風向は春夏はS風が卓越し、秋冬はN～NW風が卓越するが、年間ほぼS・Nより風が平均し、特に強風帯となっていない。現在の状況と当時が大差ないものとすれば、平たん地と変りがなく、むしろ、がいすい性、扇状地性の高燥地で、近くにゆう水・河流水が得られ、住居地の条件を満たしているであろう。

遺跡と堆積層との前後関係は、住居跡が第二層に切りこんでいることから、堆積層の形成は集落の成立以前、沖積世の初めとみるべきであろう。　（太田守夫）

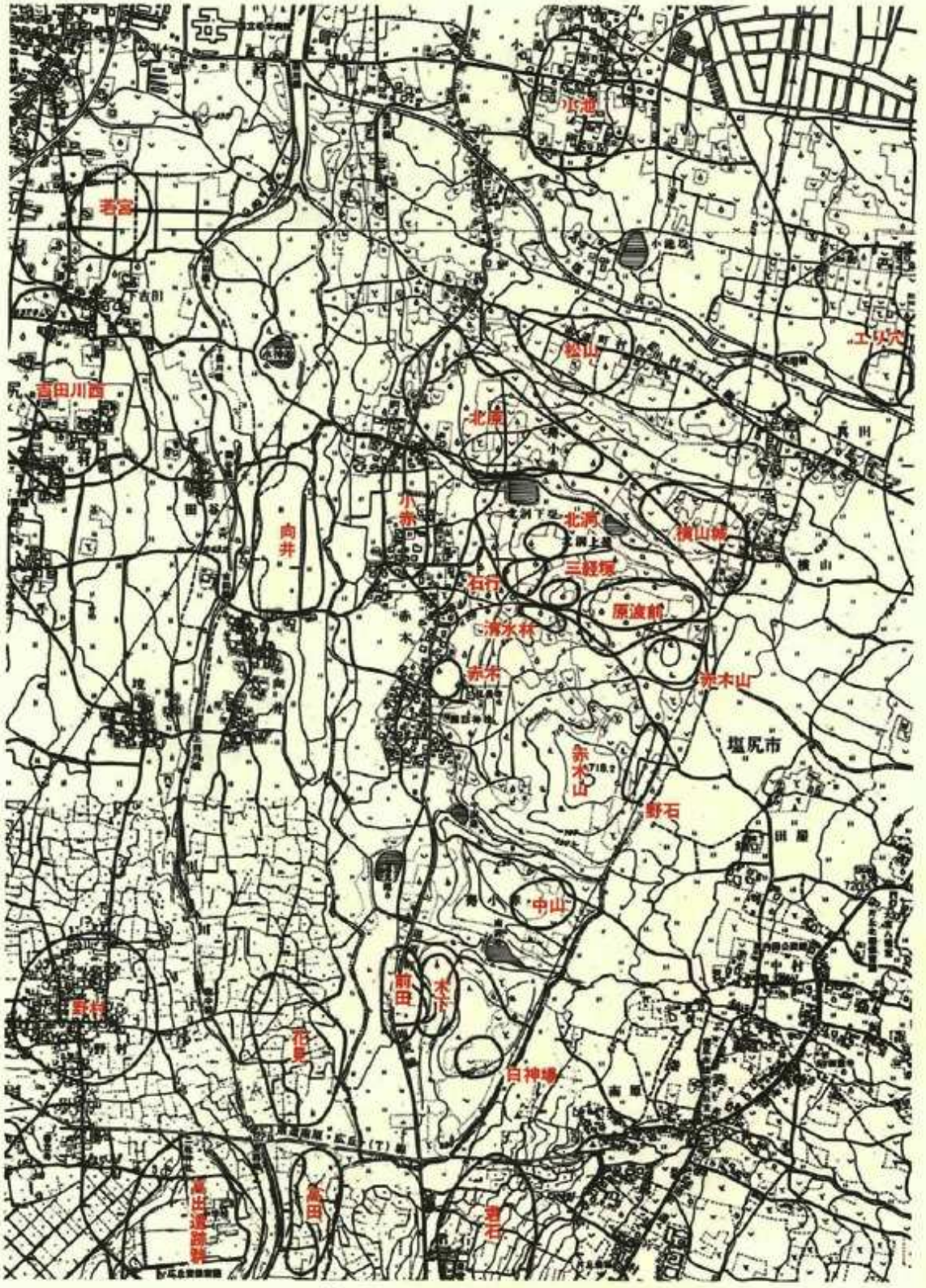
第2節　周辺遺跡

松本市寿区赤木に所在する赤木山は、標高690～720mの丘陵が南北約2kmにわたって細長く続く独立した山で、山中の至る所から遺物の出土をみている。遺物の時期は縄文時代中期を主体として縄文時代前期から後・晩期、弥生時代中期、古墳時代、平安時代の各時代にわたる(1)。現在、この赤木山中に16ヶ所の遺跡が確認されており、赤木山遺跡群と総称されている。遺跡名を南側から列挙すると、白神場(2)前田、木下、中山、野石、赤木、赤木山、原度前、清水林、三経塚、石行、北洞、横山城、小赤、北原、松山、となる。これらの遺跡のうちで、特記されるべきことは、前田・木下向遺跡で採集されている多量の縄文時代中期の土器と石器、原度前遺跡の縄文時代中期初頭の土器や石製品(石冠)、清水林遺跡の独鈷石、北原遺跡採集の有孔玉器などである。また石行遺跡では多量の縄文時代晩期の土器が出土し、注目されている(3)。横山城遺跡は昭和41年に藤沢宗平氏と松本深志高校地歴会により発掘調査が行われ、弥生時代中期の住居址が検出された(4)。小赤遺跡は昭和57年に県営ほ場整備に伴う緊急発掘が松本市教育委員会により実施され、近世から現代にわたる暗渠排水溝址、中世の鍛冶屋場遺構が発見されている(5)。

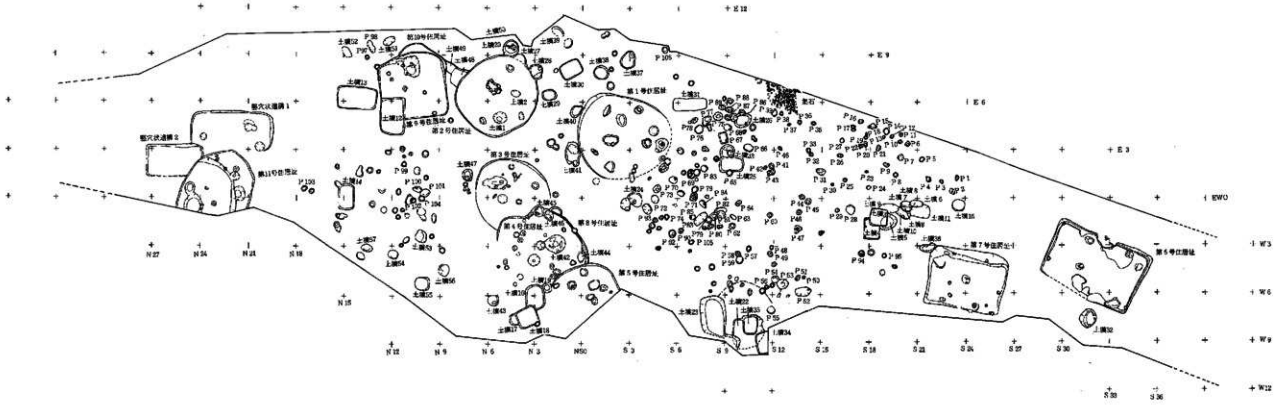
赤木山西方を北へ流れる田川の流域では、いずれも塩尻市に含まれるが、右岸に花見遺跡、向井遺跡、左岸に野村、川西、若宮遺跡と続き、縄文中期、弥生後期、平安期の遺物が出土している。このうち、向井遺跡は昭和57年に塩尻市教育委員会により緊急発掘が行われ、平安時代全般にわたる85軒もの竪穴住居址が検出されて、当地域における該期研究に好資料を提供することになった(6)。

赤木山東方の筑摩山地西麓緩斜面には、標高800m付近まで、縄文時代中期を中心とする遺跡が点在するが、縄文時代早期の押型文土器を出土した五斗林遺跡(7)、縄文時代中期の住居址19軒と多数の小竪穴が検出された雨堀遺跡(8)、縄文時代後・晩期の土器・土製品を多量に出土したエリ穴遺跡(9)が著名である。　　(直井雅尚)

注(1)　赤木山遺跡群既出遺物については、松本市教育委員会『松本市寿小赤遺跡』1983に詳しい。
(2)　遺跡台帳には「白神」と記載されているが、小字名は「白神場」である。
(3)　赤木山遺跡群既出遺物は、古屋人兄氏（松本市寿小赤在住）の採集、保管されているものが殆どである。
(4)　藤沢宗平「長野県松本市横山城遺跡」(『信濃』Ⅲ・18－7）昭和41
(5)　松本市教育委員会『松本市寿小赤遺跡』1983
(6)　塩尻市教育委員会『市田向井』1983
(7)　松本深志高校地歴会考古班「信濃の押型文土器と五斗林遺跡発掘」(『あぜみち』9）昭和34
(8)　松本市教育委員会『松本市内田雨堀遺跡』1981（第1次）、1982（第2次）
(9)　藤沢宗平「松本市北内田エリ穴第2地点遺跡—耳飾りと土偶と集石址(1)・(2)」(『信濃』Ⅲ・19－9、11）昭和42



第7図　周辺遺跡　1：20000



第８図　遺構配置図　１：200

第3章　調　査　結　果

第1節　　調査の概要

今回の前日遺跡緊急発掘調査において、調査面積は排土置き場の部分を除いて実際に遺構検出を行った範囲で約924m²、検出した遺構は、竪穴住居址14（うち3つは削平されていて、炉址、柱穴、埋甕等から存在を推定したもの）、竪穴状遺構2、土壙57、ピット類約150、集石1、である。これらの遺構は表土上面から20～30cm下という比較的浅いところにあり、検出時までに既に各遺構の上層部にかなり破壊されていた。また各遺構とも本来の掘り込み面は表土である黒色土層と同等の高さにあったらしく、ほとんどの遺構があまり壁高がなく、特に竪穴住居址はせいぜい10cm程の壁を残すのみで、所によってはすべての壁と床が、撹乱や重機を用いた初期の表土剝ぎの不手際で削平されてしまったものもあった。

出土した遺物には、土器・石器・鉄器・古銭があり、各遺構・検出面及び包含層中から多量に出土した。土器は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器類がみられるが、大部分が縄文土器で、弥生土器は第4号住居址と第11号住居址から、土師器・須恵器は第6号住居址から、陶器類は第7号住居址から、いづれも少量出土しているにすぎない。縄文土器についてみると、縄文時代中期に比定されるものがほとんどで、早期・後期・晩期のものが数点伴なっている。石器には、器種として石鏃・石錐・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・横刃形石器・凹石・石剣・石皿・石庖丁等がある。これらのうち石庖丁の他は縄文時代に属するものであろう。鉄器は、主に第6号住居址及び中世の所産と推定している方形の土壙から出土している。器形の判別できるものでは、鎌・釘等がある。また同様の土壙から古銭が3点出土している。

以上が調査の概要であるが、この結果から本遺跡の性格を考えると、縄文時代中期の集落址を主体として、奈良平安時代の居住跡、中世のものと推定される方形の土壙がそれらに重複して存在するという様相で捉えられる。　　（直井雅尚）

第2節　遺　構

1　住居址

(1)　第1号住居址（第9・27・28・33～35図）

遺構　調査区のほぼ中央ＮＳＯ・Ｅ６グリット周辺に位置する。プランは5.8m×5.35mの円形を呈する。炉の長軸方向を主軸線とするとＮ－5°－Ｅを指す。北東に残る壁は高さ34cmでほぼ垂直に立ち上がる。床面は軟弱な砂質黄褐色土で形成されている。柱穴には$P_{2.3.4.7.8}$が該当し、P_3および$P_{7.8}$に対応する柱穴は検出されなかったが、それらを加え計8本柱により上屋が架けられたようである。平面形は$P_{2.3}$が楕円形他は円形を呈し、深さは概ね30ｃｍを測る。炉は住居址中央やや北寄りに位置し内径79cm×32cm深さ19cmの長方形石囲炉である。焼土は炉南辺の石の外に堆積しており炉内部にはみられない。ただし炉底部から骨片が出土する。P_5は58cm×60cm・－30cm、P_6は70cm×90cm・－47cmといずれもかなり堅緻なピットである。しかし炉内の位置から見て柱穴とするには躊躇せざるをえない。あるいは入口付近土壙として埋甕類似の機能も想定されよう。

遺物　炉址内から8が出土したほか、図上復元されたほとんどの土器が床面直上に位置している。石器は打製石斧5点、磨製石器1点出土している。

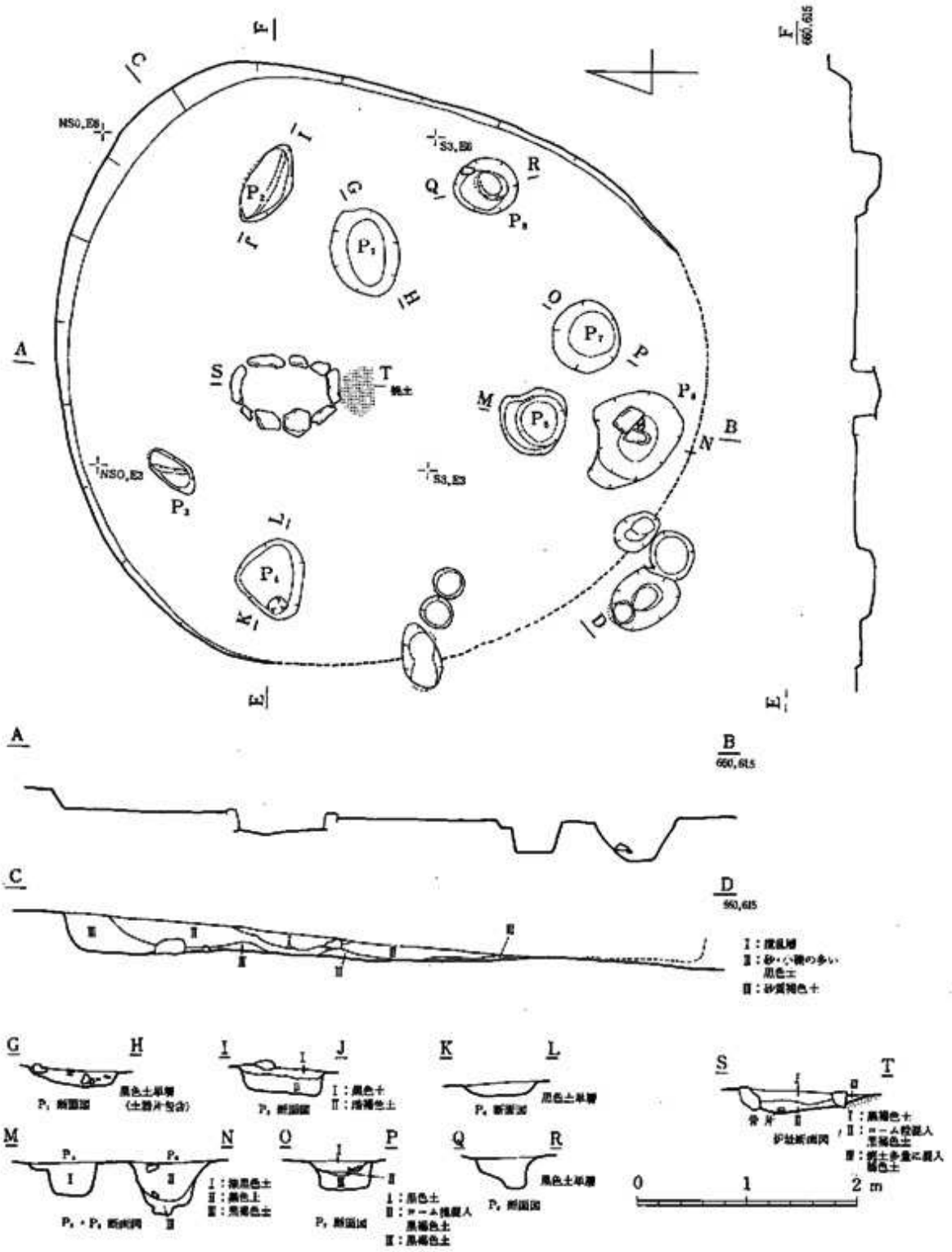
炉外にみられる焼土を炉の移動の結果とみるならば、2眼の埋甕類似土壙の存在とあわせて、本址が新旧2時期に細分される可能性も残されている。いちおう床面直上一括出土土器より、松本平IX期＝曽利Ⅰ式併行期に比定される。　（平林　彰）

(2)　第2号住居址（第10・28・29図）

遺構　第1号住居址の北北東Ｎ６・Ｅ９グリッド周辺に位置する。土壙20・27・28と近接しているが埋土および床面の状態が悪く先後関係は捉えられない。住居平面は4 m82cm×5m5cmのほぼ円形を呈し、主軸はＮ－48°－Ｅを指す。壁は土壙に接する部分を除き残存しており、北東部で20cm南西部で14ｃｍの壁高を有する。床面は砂利混り黄褐色土で南西部に向けて緩かな傾斜がみられる。柱穴は$P_{1.3}$しか検出されなかったが、主軸を中心にして対応する位置に6本ないしは8本の柱穴が設けられたものと考えたい。炉は住居中央やや奥壁よりで12個の礫により内径70cm×30cm深さ10cmの長方形炉が組まれている。炉内に焼土の堆積はみられない。土壙1・2は本址とは関わりをもたない。P_2は主軸上の出入口部と思われる地点に位置するがその性格は不明である。

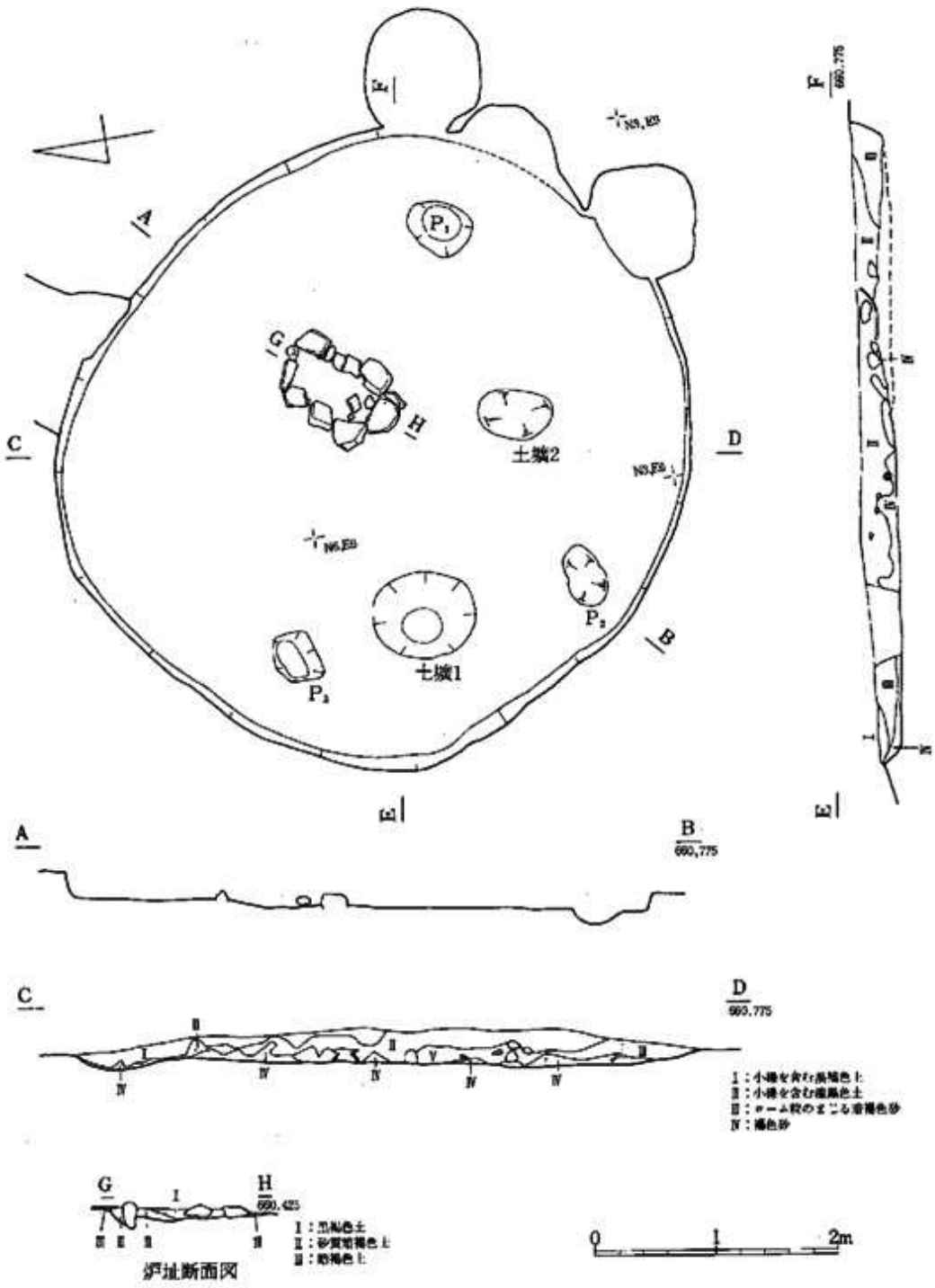
遺物　炉址東側床面上から口縁部を南西へ向けて倒れた状態で15が出土する。その他復元図化された土器のほとんどが床面一括として捉えられる。石器は打製石斧1点、石鏃3点、石錐1点が出土する。

出土土器に鑑みて松本平IX期＝曽利Ⅰ式併行期に概ね比定される。　（平林　彰）



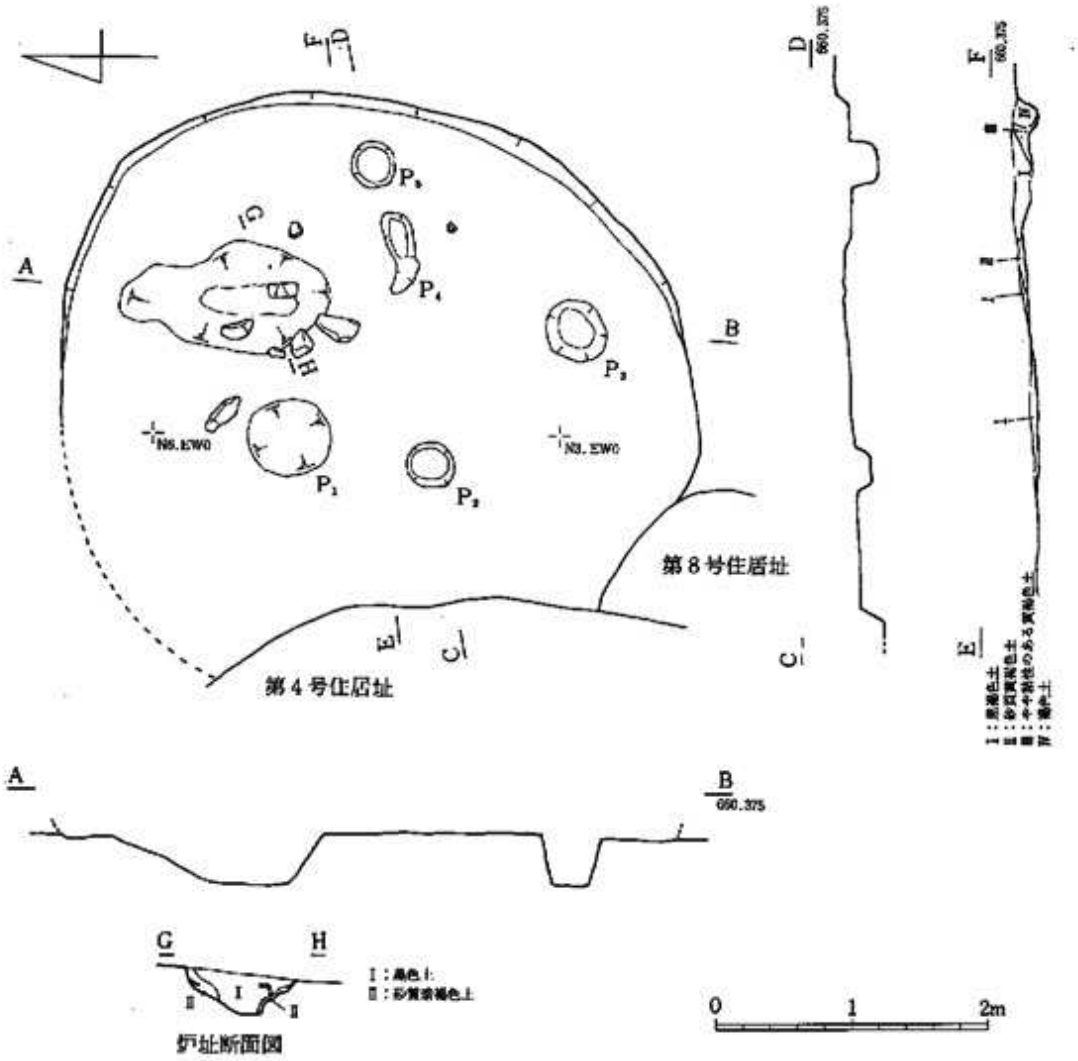
A
B
C
D
E
F
660,615
NS0,E8
S3,E6
NS0,E3
S3,E3
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
Q
R
S
T
M
N
O
P
G
H
I
J
K
L
0
1
2 m

第9図　第1号住居址



A
B
C
D
E
F
G
H
P1
P2
P3
土壙1
土壙2
N3,E3
N6,E3
660,775
660,425
I：小礫を含む黒褐色土
II：小礫を含む暗黒色土
III：ローム粒のまじる暗褐色砂
IV：褐色砂
I：黒褐色土
II：砂質暗褐色土
III：暗褐色土
炉址断面図
0
1
2m

第10図　第２号住居址



第11図　第3号住居址

(3)　第3号住居址（第11・30・36～38図）

遺構　第2号住居址の西側N6E3グリッド周辺に位置する。住居址西南部は第4・8号住居址によって切られている。平面形は径およそ4m80cmの円形を呈する。壁は住居址東側を中心に残存しており、壁高15cmでほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色砂質土層によって形成されているため軟弱だが、東半部はローム粒によって貼り床されており比較的踏み固められている。ピットは5本検出しているがこのうち$P_{3,5}$を柱穴と考えたい。炉は住居北東寄りに位置し、155cm×85cm深さ30cmのやや大形な楕円形を呈する。炉辺石は抜去されているが本来は石囲炉であったのだろう。

遺物　炉址北西端の床面直上から22が出土している。21はやはり床面上に散在していた。石器は打製石斧1点、横刃形石器3点が出土している。

出土遺物から考えて、本址は松本平X期＝曽利II式併行期に比定される。　（高桑俊雄）

(4) 第4号住居址 （第12・48図）

遺構 第3号住居址の西側N6W3グリッドを中心として位置する。住居址南3分の2程で第8号住居址を貼っている。平面形は北東および南東コーナーから方形と推定されるが、規模については正確に把握できない。壁は東側で明瞭に残存し、壁高14cmを測る。床面は西南部に向けてやや傾斜をもつ。柱穴は$P_{1,4,8}$を基準に4本柱を想定している。あるいは$P_{1,6}$を基に考えた方がよいかもしれない。炉は住居中央やや北寄りに位置し336が埋設されている。炉内には黒色土が充満しており、埋甕炉脇に焼土化した褐色土が堆積している。住居中央にも焼土化した褐色土に覆れた炉を検出した。先記埋甕炉と同時期併存したものか、あるいは炉の作り替え等の仕業か、現存資料からでは判断しかねる。

遺物 埋甕炉に用いられた336ほか弥生時代後期土器片が出土している。石器は石鏃、スクレイパー、ピエスエスキーユ、打製石斧が各1点、石匙丁、横刃形石器が各2点出土した。

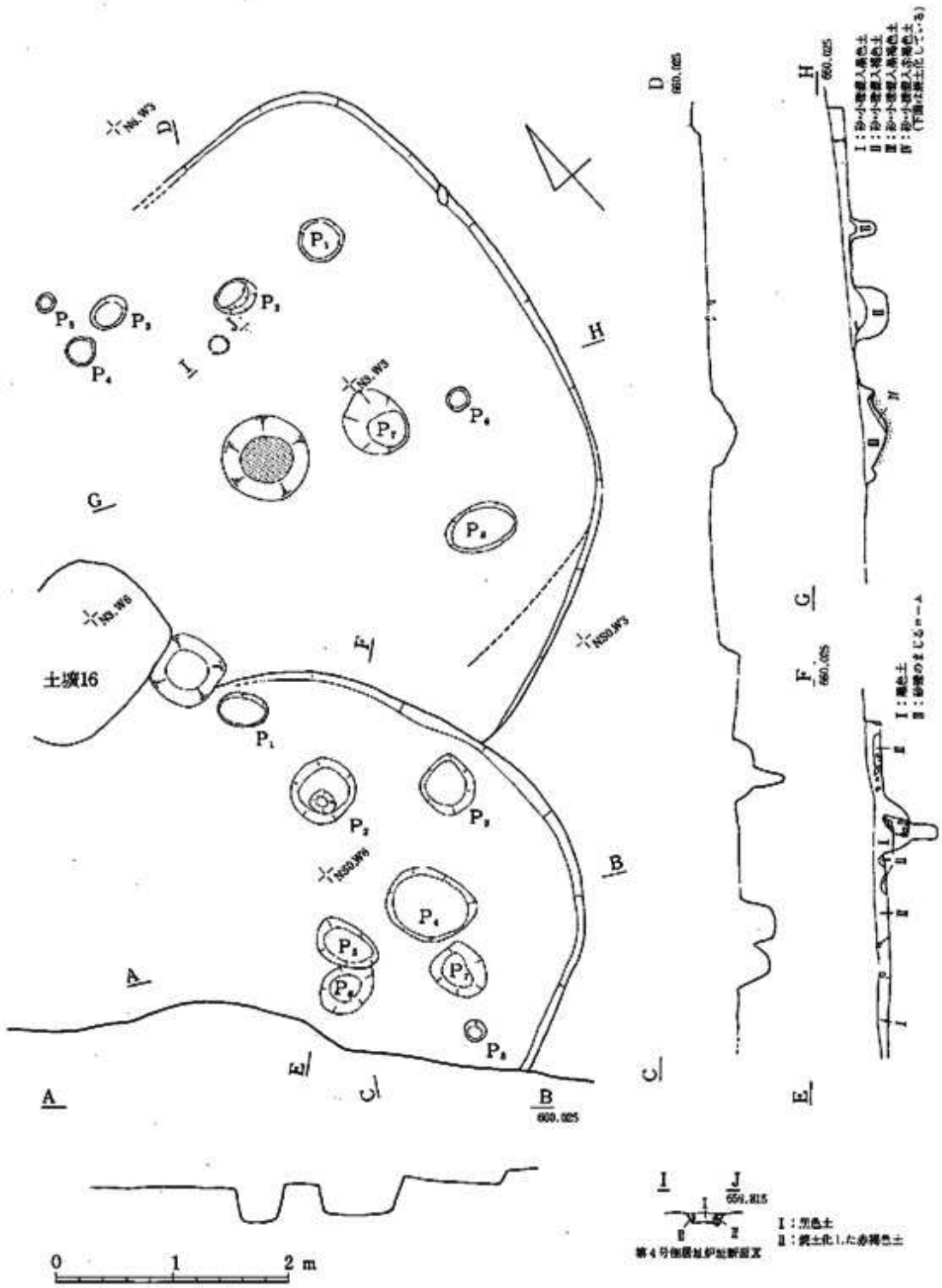
（高桑俊雄）

(5) 第5号生居址 （第12・38図）

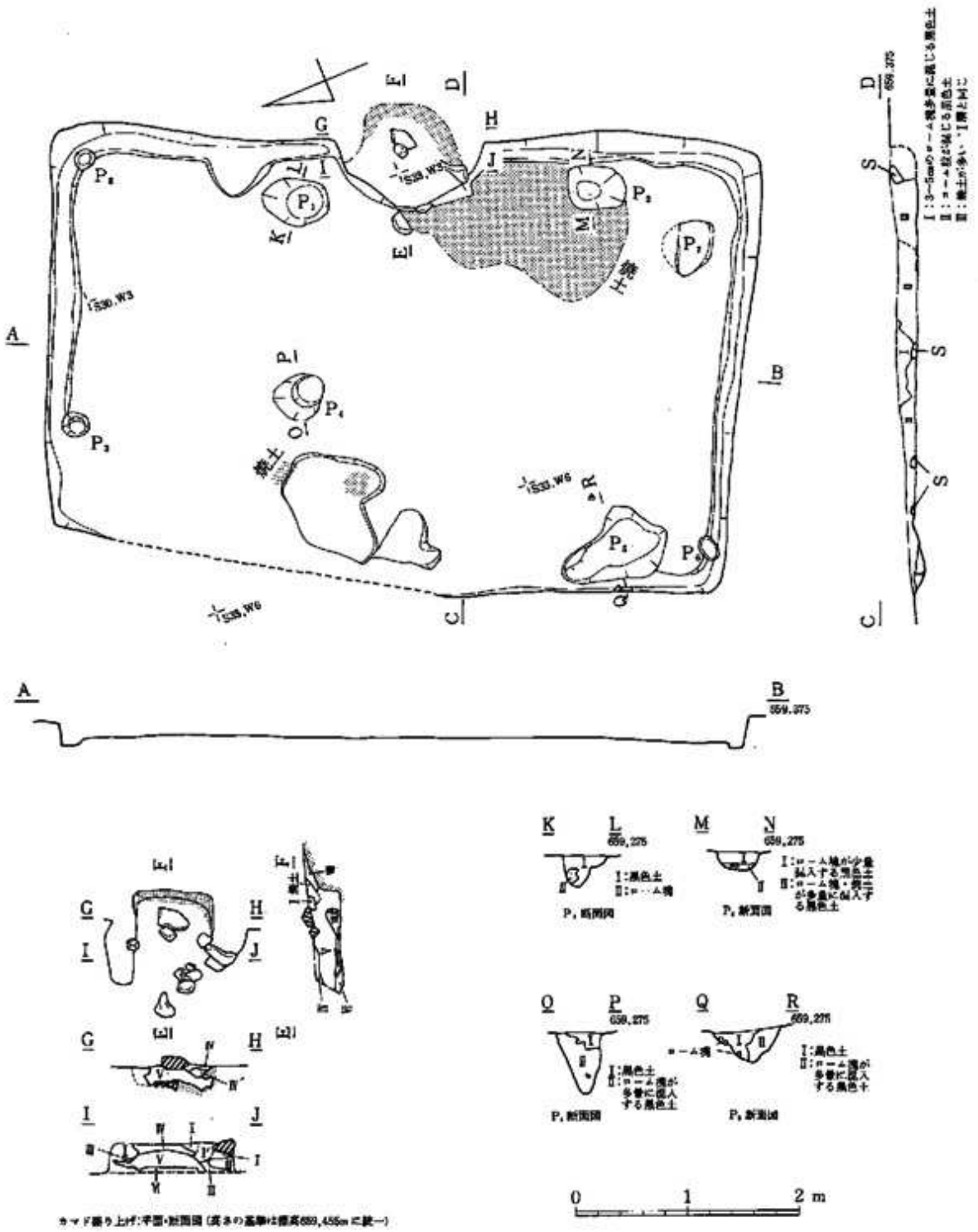
遺構 調査区中央西部端NSOW6グリッド周辺に位置し、住居址東部で第8号住居址を切っている。プランは推定円形で、規模は径およそ4m10cmを測る。壁は東部から南部にかけて残存し、ほぼ垂直に10cm立ち上がる。床面は黄褐色砂質土層のため軟弱で残存状態が悪い。ピットは8本検出されているが、P_2を除き他のどれが柱穴として利用されたか判別は難しい。炉またはそれに類する施設は確認できなかった。

遺物 土器片は127～129が出土しているがいずれも覆土中にあって本址と確実に伴なうものとは考えられない。石器はスクンイパー、ピエスエスキーユ、横刃形石器が各1点出土している。

（石上周蔵）



第12図　第4号（上）・第5号（下）住居址



カマド張り上げ：平面・断面図（高さの基準は標高659,455mに統一）

第13図　第6号住居址

(6) 第6号住居址 （第13図）

遺構 調査地の南端、S30～33・W3グリット一帯に位置する。平面形は約6×4mの長方形を呈し、カマドが長辺上に設けられているため、主軸方向はS－63°－Eを指している。壁は東側ほどよく残っており、壁高は東壁25～30cm、南壁8～20cm、北壁4～25cmを測り、西壁は削平されてほとんど残っていない。壁の傾斜はほぼ垂直である。削平された西壁部分を除いて、各壁直下には幅10～15cm、深さ5cmほどの周溝が全周している。床面はローム をたたき固めた堅緻なものが全面に広がっていた。ピットは大小あわせて8個あり、深さは、P_1：17cm、P_2：28cm、P_3：45cm、P_4：57cm、P_5：16cm、P_6：20cm、P_7：11cm、P_8：9cmを測る。カマドは長辺である東壁の中央部にあり、周囲に多量の焼土を伴っていた。石材を要所に用いた粘土製カマドであったと考えられるが、埋没覆土の色と似ていた上に破壊が進んでおり、はっきりしたプランは把握できなかった。カマド以外に床面に焼土が広がる部分が3ヶ所あった。1つはカマドに向って右側の東壁際で、南北1.5m、東西1mの広がりをもち、他の2つはP_4西方の不整形の窪みの北側及び南側に径20cmくらいで広がっていた。

遺物 覆土中、床面、ピット内及びカマド内から土器と石器が出土した。土器は、覆土中からは少量の縄文土器片もあったが、大部分は土師器と須恵器で、床面、ピット内と特にカマド内から多量に出土した。縄文土器と石器は混入品であろう。

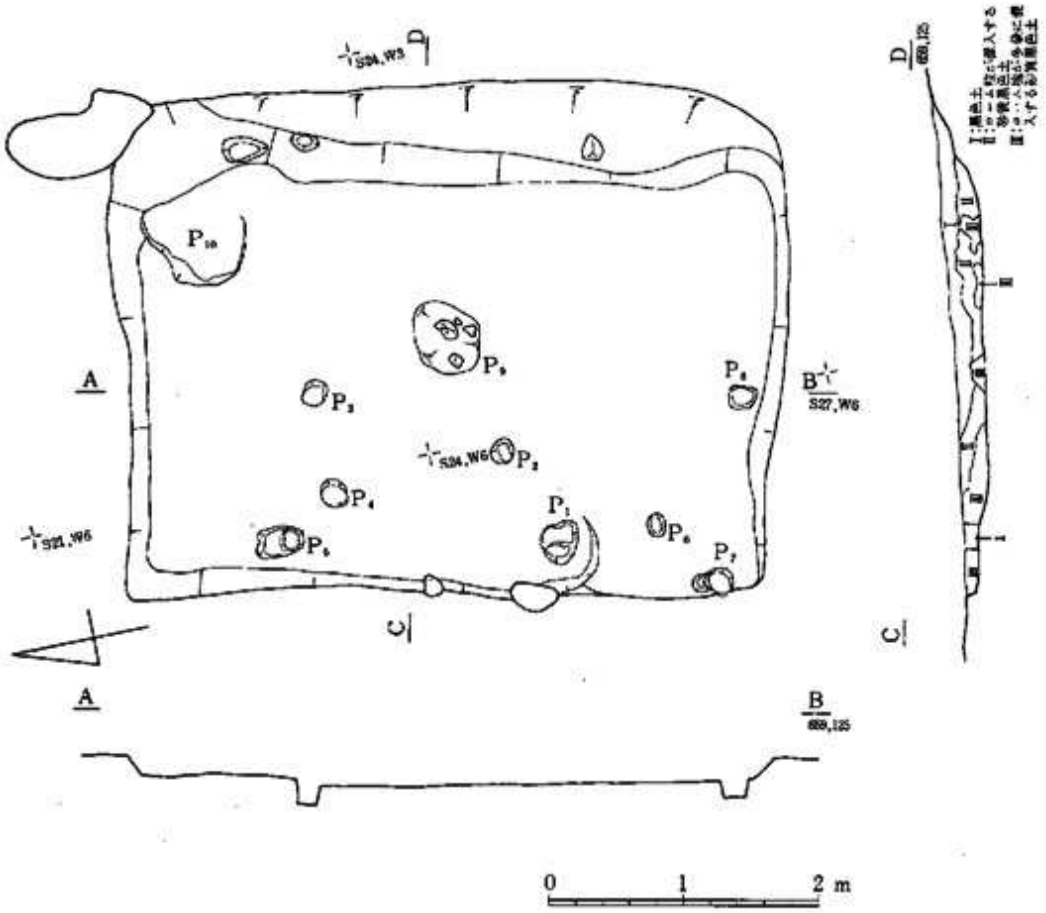
本址の時期は土師器、須恵器からみて8～9C代に属すると想定しているが、その時期の竪穴住居址は一般に方形を呈することが多いなかで、本址の平面形は特異である。また柱穴については、P_1とP_2、P_3とP_6が主軸線をはさんでほぼ対称の位置にあり、この4個のピットが相当するのではないかと推定している。 （関沢 聡）

(7) 第7号住居址 （第14図）

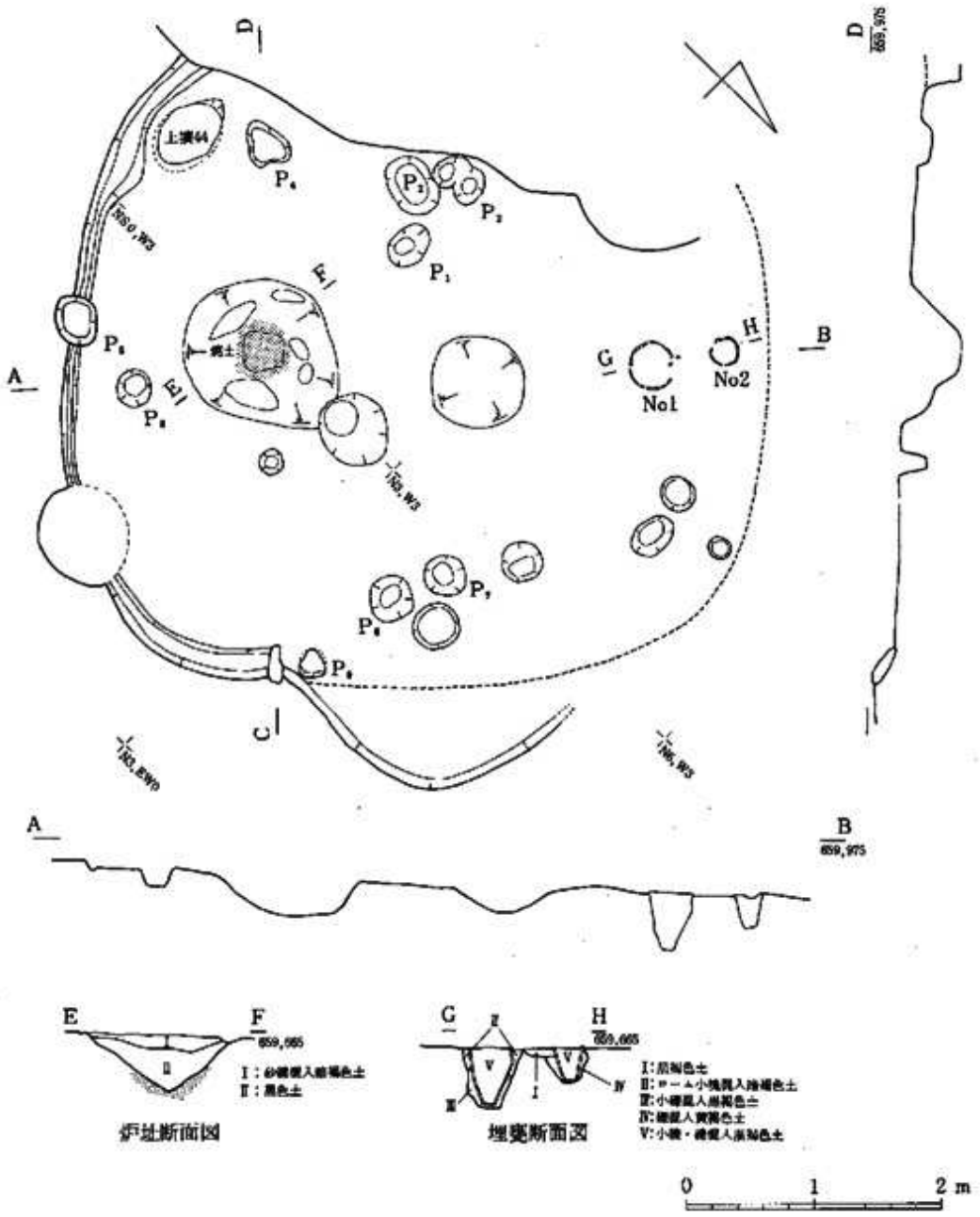
遺構 調査地南部、S24～27・W3～6グリットに位置し、北東隅を僅かに土壙15に切られている。南北4.7m×東西3.6mの長方形を呈す。長軸方向はほぼN－12°－Eを指す。壁は東側ほど良く残っており、東壁は段をもっている。壁高は東壁40cm、北壁20～30cm、南壁5～20cm、西壁0～20cmを測る。床面は地山のローム層を用いてあり、概ね堅緻で、中央部に向って僅かに窪み、西壁付近は細かい凹凸がある。ピットは径20cm内外のものが8個、中央より東側に偏してあり、それぞれの床面からの深さは、P_1：33cm、P_2：16cm、P_3：14cm、P_4：16cm、P_5：32cm、P_6：10cm、P_7：38cm、P_8：14cmを測る。このうちP_1とP_5は底面が2段になって、断面形が部分的に袋状を呈している。炉・カマド等を想定させる焼土はみあたらない。ただ、床面中央部のP_9は皿形の断面形や礫のあり方、遺構中の位置などからみて、炉址に相当する施設であった可能性も残されよう。

遺物 土師質土器、陶器の小破片が数点、釘と思われる鉄器片が1点、覆土中から出土しているにすぎない。土器は全く図示できなかった。縄文土器片も数点あるが混入品であろう。

本址の時期は少量の遺物から検討すると、大枠で中世に属するものと考えられる。上屋構造については検討を要する。また、覆土中にひときわローム ブロックが多かったことが特徴的で、本址の埋没、或いは本址そのものの性格に深く関連することかもしれない。　　（直井雅尚）



第14図　第7号住居址



上壌44
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
No1
No2
A
B
C
D
E
F
G
H
659,975
659,665
炉址断面図
埋甕断面図
0
1
2 m

第15図　第８号住居址

(8) 第8号住居址　(第15・30・38図)

遺構　調査区中央やや西寄りN3W3グリッド周辺に位置する。住居の大半が第4号住居址と重複しているためプランは明確さを欠くが南東壁の状態より推してほぼ隅丸方形を呈する。規模は東西径5m50cm、主軸はS－43°－Eを指す。壁は南東部でおよそ10cmの立ち上がりをみせる。床面は砂質褐色土の地山に生居西半ではロームによる貼り床がなされており、全体に西方へ向けて緩かに傾斜している。ピットは9本検出している。うち柱穴は$P_{2\sim8}$と考えられるが、P_4は平面が不定形にして深さも12cmと浅いため除外した方がいいかもしれない。炉は生居中央やや南東寄りに位置し、径135×115cm深さ45cmの楕円形を呈する。炉内には黒色土の厚い堆積があり、その下部に焼土がみられた。炉址西側の落ち込みは床面検出以前の段階ですでに確認されており、調査者の所見によると明かに本址に伴うものではない。南東壁に沿って周溝を検出している。幅深は平均8 cm－5 cmを測る。住居内西部では埋甕が2個体出土した。埋甕No.1は上面に貼り床がなされており、No.2よりも古い。No.1は正位完形、No.2は正位口縁部欠損である。

遺物　埋甕2個体が、本址の使用または廃棄時期を決定する資料である。埋甕No.1すなわち23は、唐草文系土器、24は加曽利E系土器である。石器は石鏃1点凹石2点が出土している。

埋甕から判断し、本址は松本平XI期＝曽利III式併行期に比定される。但し、埋甕設置状態より明らかに新旧2時期が存在していたことがわかる。系統の異なる土器が埋設された（No.2）状況から住居構成員の変動をも考慮すべきであろう。住居の2時期細分については、P_2とP_3・P_5とP_8およびP_6とP_7が近接しているため建て替え行為の存在も否定できない。　(平林　彰)

(9) 第9号住居址　(第16・39・40図)

遺構　第2号住居址の北隣、N12・E9グリットの一帯に位置する。第10号住居址の大部分を破壊し、土壙12に北西隅を切られている。主軸方向をN－87°－Eにとる一辺約4 mの隅丸方形を呈す。壁は垂直に近い傾斜で、東と南側でよく残っており、東壁30cm、南壁28cm、西壁6cm、北壁2～5 cmを測る。北東コーナーを中心に深さ5 cm程の周溝がみられ、その一端は炉址へ続いている。床面はきわめて軟弱で、南方へ僅かに傾斜している。ピットは5個検出され、いずれも径は25～30cm、深さはP_1：7 cm、P_2：34cm、P_3：20cm、P_4：10cm、P_5：20cmを測る。炉址は東壁寄りにあり、平面形は約1.3×1 mの不整な長方形を呈している。深さは30cmほどあり、ダラダラとした傾斜で底面へ達する掘り込みとなっている。内部に大礫もみられ、石囲い炉の炉石を抜かれた跡なのであろう。ただし焼土が全くみられないことが少々気懸りである。

遺物　覆土から縄文土器片と石鏃1点が出土している。縄文土器はいずれも小片のため拓影で提示した。中期後葉のものが多いようで、本址の時期もそこに求めたい。

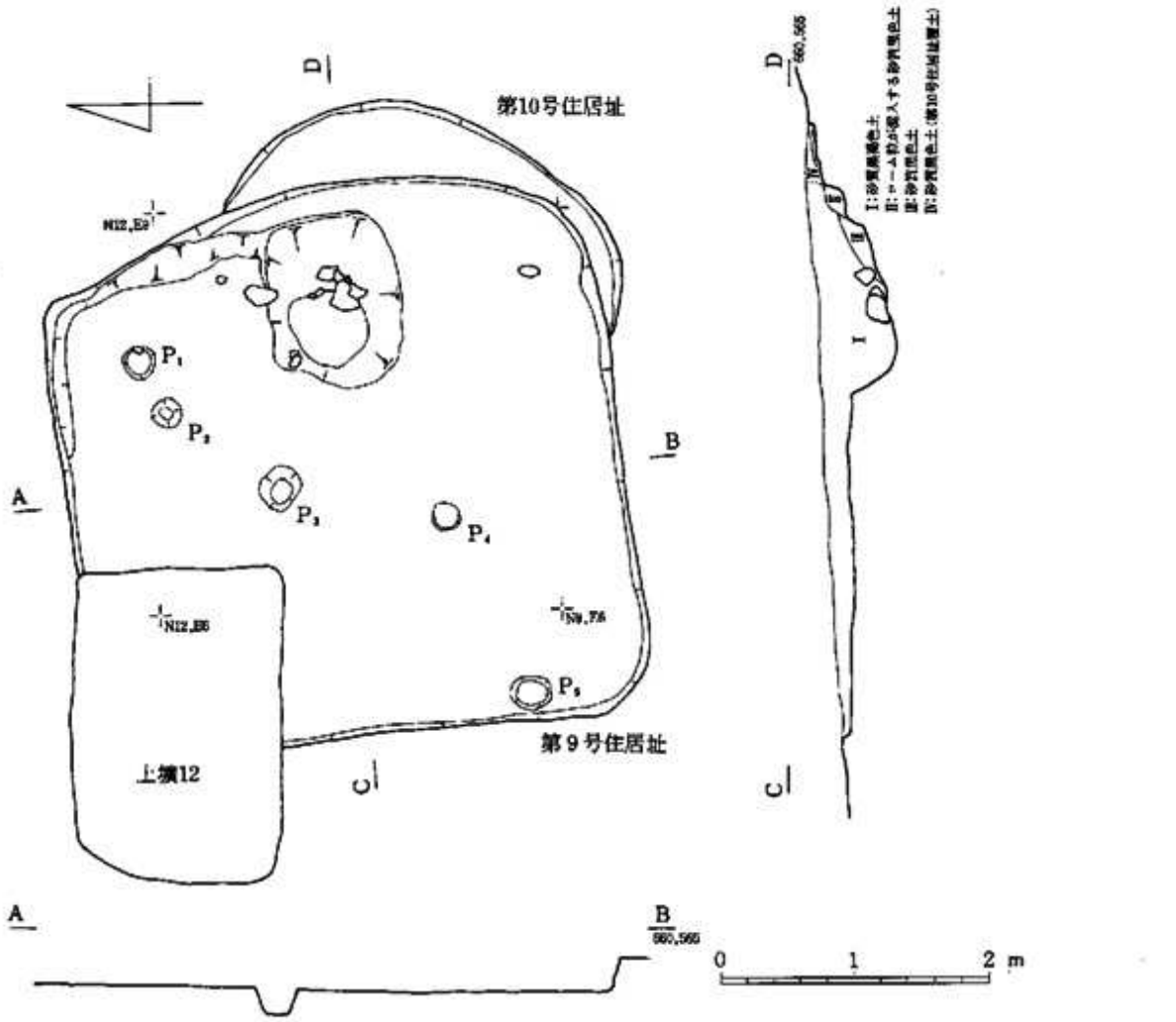
本址は平面形の掘り込みが非常に明瞭だった遺構であるが、ピットの配列が不規則で柱穴として捉えにくいこと、炉址の位置が奥へ偏しすぎている上に焼土がまったくないこと、床面が非常に軟

弱なことなど、疑問も多い。　（直井雅尚）

009　第10号住居址　（第16・40図）

遺構　第9号住居址にほとんどの部分を切られ、その東側に僅かに姿をのぞかせているにすぎない。平面形を推定すれば、径3m 程の円、または短辺が3m 位になる隅丸の長方形になるのであろう。残存部の壁も低く、3～10cm を測るのみである。床面はとりわけ軟弱で、西へ緩傾している。ピット・炉址に類するものはみあたらない。

遺物　覆土から少量の縄文土器片が出土している。4点を拓影で示し得たのみである。時期は概ね中期後葉のものとみられる。　（直井雅尚）



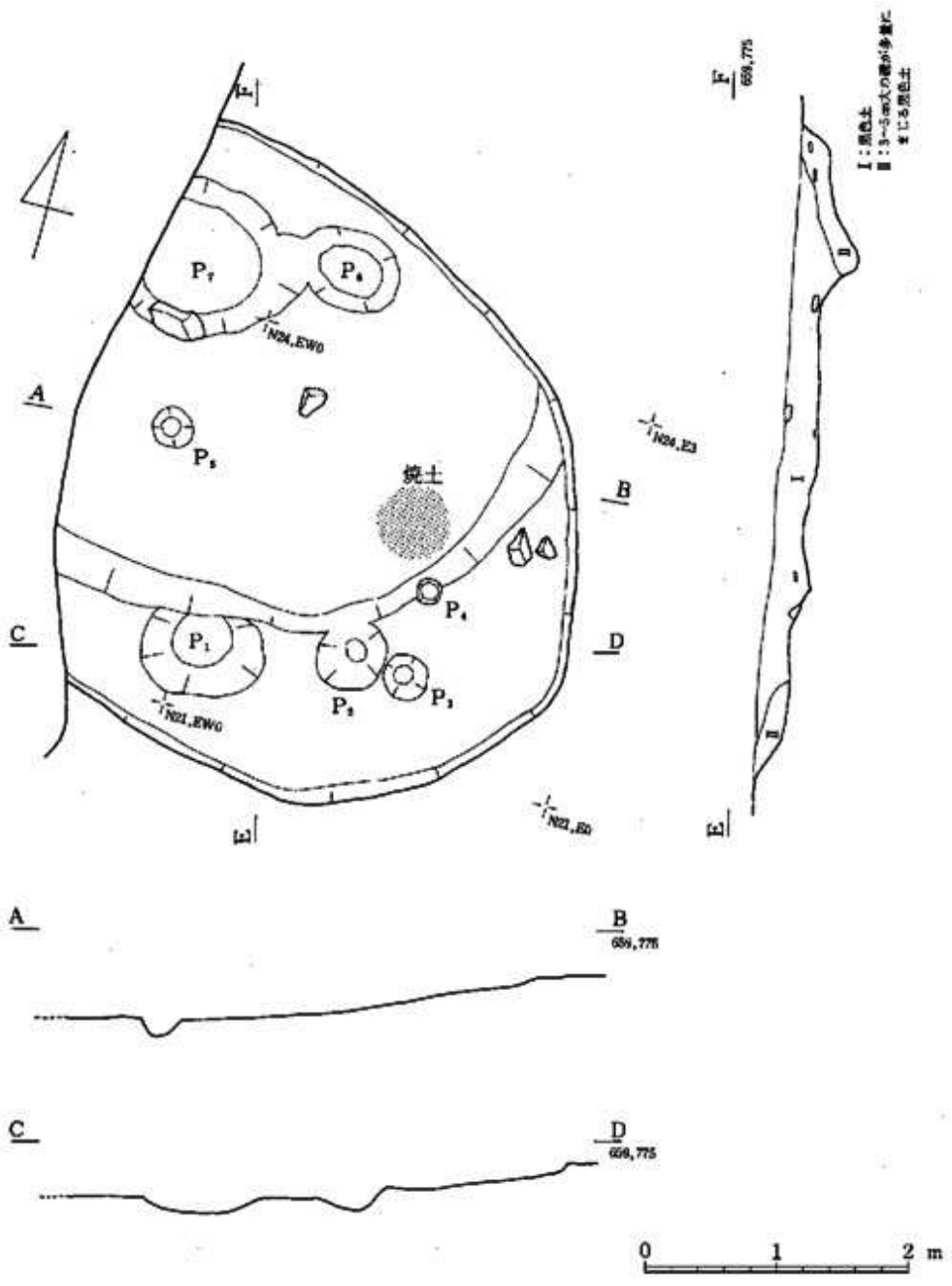
第16図　第9・10号住居址

(11) 第11号住居址 (第17・40～43図)

遺構 調査地北端部、N24・E 3グリット周辺に位置する。近接して竪穴状遺構1及び2があり、竪穴状遺構2の南西隅を切っている。西側部分が排土の下になってしまったため全形は捉えられないが、短径4.3m、推定される長径5～6 mの楕円形を呈する遺構であろう。長軸方向はほぼN－70°－Wを指している。本址は、平面・断面ともに土層的にはかなり明瞭な落ち込みであったが、他の遺構に較べ覆土中に砂礫が非常に多く、北側に至っては砂礫のみとなっていた。壁は傾斜が緩かで、全体的にダラダラと床面へ続いてしまう。壁高は北側で約30cm、東側で最も浅く3cm、南側で約10cmと、西へいくほど深くなっている。床は地山である砂礫混入黄褐色土をそのまま用いており、非常に軟弱で、しかも起伏に富んでいた。また床は、南から東側の壁の内側約1mで再び落ちこんでいた。ピットはP_1：95×60・－15cm、P_2：55×50・－10cm、P_3：35×30・－10cm、P_4：20×17・－14cm、P_5：30×30・－13cm、P_6：80×60・－15cm、P_7：120×(100)・－15cmの7個で、規模・配列ともに不揃いなものである。P_7はピットとするのは不適当かもしれない。炉址は、確実にそれに該当する施設はみとめられなかったが、中央部東寄りの段直下に径50cmばかりの範囲で僅かな焼土が認められ、一時、本址の炉として使用されていた痕跡とみることもできる。

遺物 覆土及び床面付近から多量の土器・石器が出土した。土器は9割以上が縄文土器である。縄文中期後葉のものを主体として、後期、晩期、弥生中期と、時期的にはかなり雑多なものがすべて小破片となって、覆土中からまんべんなく出土し、この状況は本址北半の砂礫質の強い土層中でも同じであった。石器類も土器片に混じって発見されており、器種に石鏃・スクレイパー・横刃形石器・打製石斧などがある。

本址は、出土した土器の時期が雑多な上にすべて破片で、更に遺構についても覆土がきわめて砂礫質で床も非常に軟弱という、特異な遺構であった。この原因としては、多量の遺物を伴った砂礫質土が本址の一部を破壊しながらかなり急速に本址を埋没させたためではないかと考えている。また、本址の時期としては、出土した石器の組成や土器片の出土量から縄文中期後葉をあてたい。しかし、少量ではあるが、それ以降の時期の遺物が存在することについて、単に攪乱の産物として扱うには問題が残るかもしれない。 (高桑俊雄)



第17図　第11号住居址

02　第12号住居址　（第18・30図）

遺構　第1号住居址の南西、S3～6・EWOグリッド周辺に存在したと推定される住居址で、壁・床面は耕作や表土剝ぎ時に削りとられており、炉址・柱穴の配列及び遺物の出土状況からおよその範囲を想定した。他遺構との重複関係は本址の正確な規模が把めない為、遺構の上からは全く不明である。平面形・規模についても、出土遺物の時期が近似する他遺跡の例から類推すればおそらく径5.5m前後の円形を呈すのであろうが、測り得ない。壁・床面に全く残存していない。柱穴は、土器埋設炉を円形に取り囲むピット群に対応するものがあると考えている。ただし、具体的にどのピットが相当するかは判然としないものが多く、形状及び出土遺物からほぼ確実に本址に伴うと考えられるものは、P_{69}（−33）・P_{70}（−26）・P_{72}（−8）・P_{73}（−25）・P_{79}（−20）・P_{90}（−20）・P_{92}（−20）である（カッコ内は検出面からの深さ、単位はcm）。これらのうち、P_{70}は覆土中層にローム を貼り固めた貼り床状の層があり、その上面から一括土器が出土している。炉址は中央部に埋設された土器（土器番号26、第8図版）をもってあてる。深鉢形土器の胴部を用いており、内部に焼土と炭化物を含んでいた。

遺物　炉址とピット内から遺物の出土をみている。$P_{69\sim73\cdot90\cdot92}$等から縄文土器の大小破片の出土があり、埋設炉の他に唯一区示できた25にP_{69}とP_{70}からの出土品が接合したものである。石器は$P_{71\cdot93}$から打製石斧・横刃形石器・凹石が出土している。

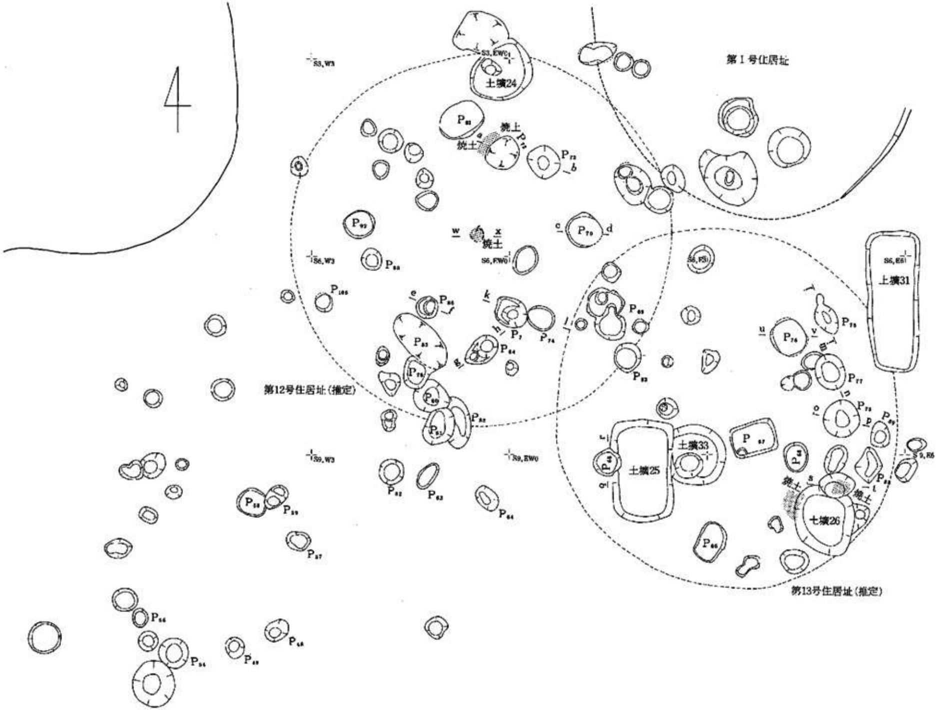
炉址埋設土器は松本平V期に比定され、周囲のピットからも概ね同時期のものを出土しており、本址の時期もそこに求められよう。　（直井雅尚）

03　第13号住居址　（第18図）

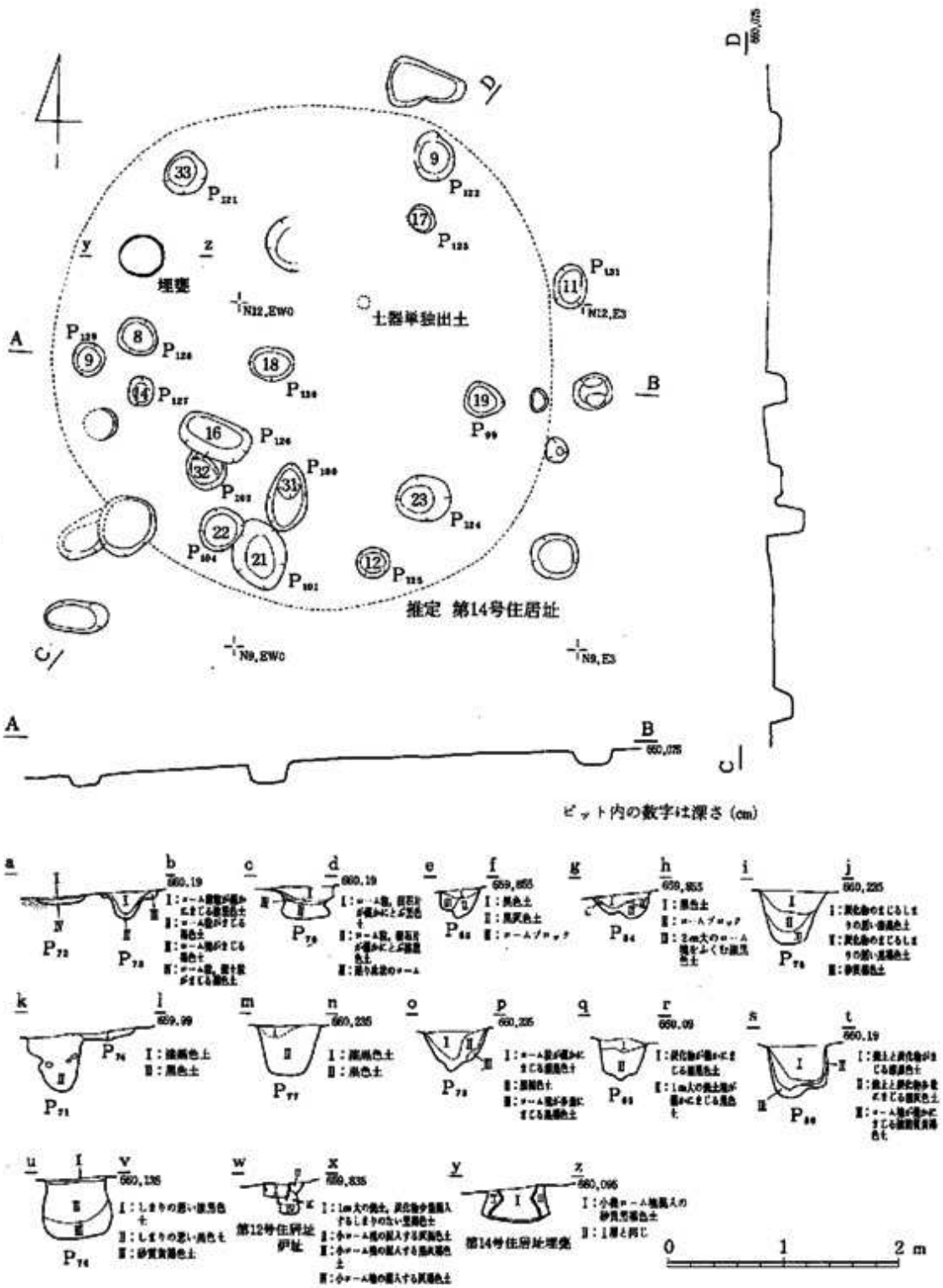
遺構　第1号住居址の南、S6～9・E6グリット周辺に存在したと推定している。壁・床等はすべて削平されており、住居址として推定した根拠は、土壙33・26、$P_{67\cdot86}$等焼土をもつ遺構があることと、その周辺のピット群の配置及び形状にある。規模・平面形は不明。柱穴とおぼしき規模をもつピットは、P_{65}（−40）・P_{66}（−30）・P_{68}（−40）・P_{76}（−50）・P_{110}（−25）・P_{83}（−35）が土壙33を円形に囲んでおり、更に$P_{76\cdot68}$の東側にP_{78}（−47）・P_{77}（−40）・P_{75}（−35）・P_{85}（−50）・P_{111}（−35）が東半分を取り巻くようにならんでいる（カッコ内は検出面からの深さ、単位cm）。炉址は土壙33をもってあてたいが、焼土をもつ土壙26の存在からみると、推定される柱穴の配列とともに若干の疑義が残る。土壙25・31は中世に属するものである。

遺物　本址推定範囲内の土壙・ピットから少量の土器・石器が出土している。土器は小破片が多く図化できたものは土壙26の覆土上層から一括出土した37のみ、他は拓影で提示した。概ね縄文中期に位置づけられる。石器にはスクレイパー・横刃形石器がある。

本址の明確な時期は決め難い。　（直井雅尚）



第18図　ピット群　(1)


埋甕
土器単独出土
推定 第14号住居址
ピット内の数字は深さ（cm）
第12号住居址炉址
第14号住居址埋甕
0
1
2 m

第19図　ピット群　(2)

(4) 第14号生居址 （第19・31図）

遺構 第9号住居址の西、N12・E3グリット周辺に存在したと推定している住居址である。上面検出時に既にすべての壁と床を失っており、埋甕及びそれに連なって円形にならぶピット群より範囲を想定した。平面形は径4.5~5m程の円形を呈したと考えている。柱穴と認められる可能性をもつピットの配置をみると、$P_{121}-P_{122}-P_{99}-P_{100}-P_{126}$の配列か、それよりひとまわり大きい$P_{121}-P_{122}-P_{131}-P_{124}-P_{104}-P_{129}$が想定され得る。深さに著しい差があるのは、この付近の削平が最もはなはだしく、かつ不規則だったことに起因する。炉址に相当するものは全くみられない。跡形もなく削りとられてしまったのであろう。埋甕は本址推定範囲の北西部、P_{121}とP_{126}の間に逆位に埋設されていた。

遺物 ごく少量の土器があるのみである。図化できたものは、埋甕（33）と中央部から単独出土した34のみで、他は小破片で拓影にもできなかった。埋甕は、胴部中位以下を欠く深鉢形土器であるが、検出時に削平により既に円形の断面を露呈していたため、埋設時本来の姿は胴部下半がどの程度あったのか全くわからない。

本址の時期は埋甕からみて、一応、松本平X期とすることができよう。 （直井雅尚）

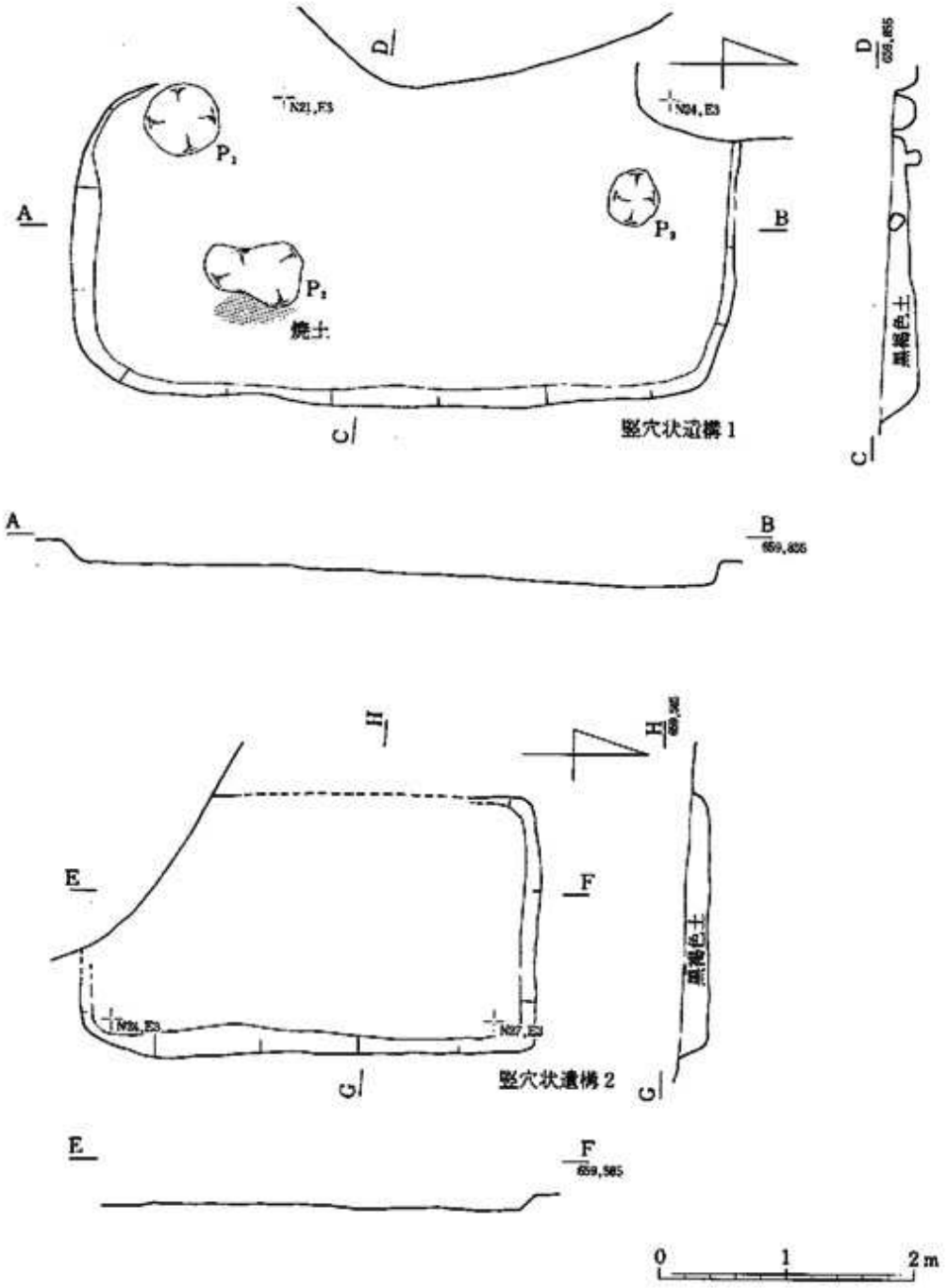
2 竪穴状遺構

(1) 竪穴状遺構1 （第20図）

遺構 調査地北端、第11号住居址の東に位置する。北西隅を竪穴状遺構2に切られている。平面形は、5.2×2.5mの南北に長い隅丸長方形を呈す。長軸方向はほぼ真北の線に一致する。壁は、緩かな傾斜で立ち上がり、北壁17cm、東壁20~25cm、南壁18cmの高さを測る。西壁は削平されてしまっている。床面は軟弱で、東から北東へ向って僅かに傾いている。ピットは$P_{1\sim3}$の3個を数えるが、ダラダラと底面に至る掘り込みで、深さはP_1：20cm、P_2：5cm、P_3：10cmを測る。炉址等に相当する施設はないが、P_2東側に焼土の散布がみられた。

遺物 縄文土器片、石器類が覆土から出土している。土器は縄文中期後葉のものが主体でそれ以降のものが雑多にみられる。石器は、石鏃・打製石斧・横刃形石器・磨製石斧などがある。

本址の覆土及び遺物の出土状態は、隣接する第11号住居址や竪穴状遺構2と似ており、埋没についても同様のことが考えられる。本址の性格はよくわからないが、或いは住居址的な使われ方をしたのかもしれない。 （直井雅尚）



第20図　竪穴状遺構1・2

(2) 竪穴状遺構２　（第20図）

遺構　調査地北端、第11号住居址の北東に位置する。今回の調査で検出された最北端の遺構である。竪穴状遺構１の北西隅を切り、第11号住居址に南西隅を切られている。平面形は3.6×2.0mの南北に長軸をもつ長方形となる。壁は、西側が削平されており、壁高は北壁：５～15cm、東壁：20cm、南壁：15cmを測る。床面は地山の砂礫質暗褐色土そのもので、きわめて軟弱である。ピットはない。また炉址に相当するものもみられない。

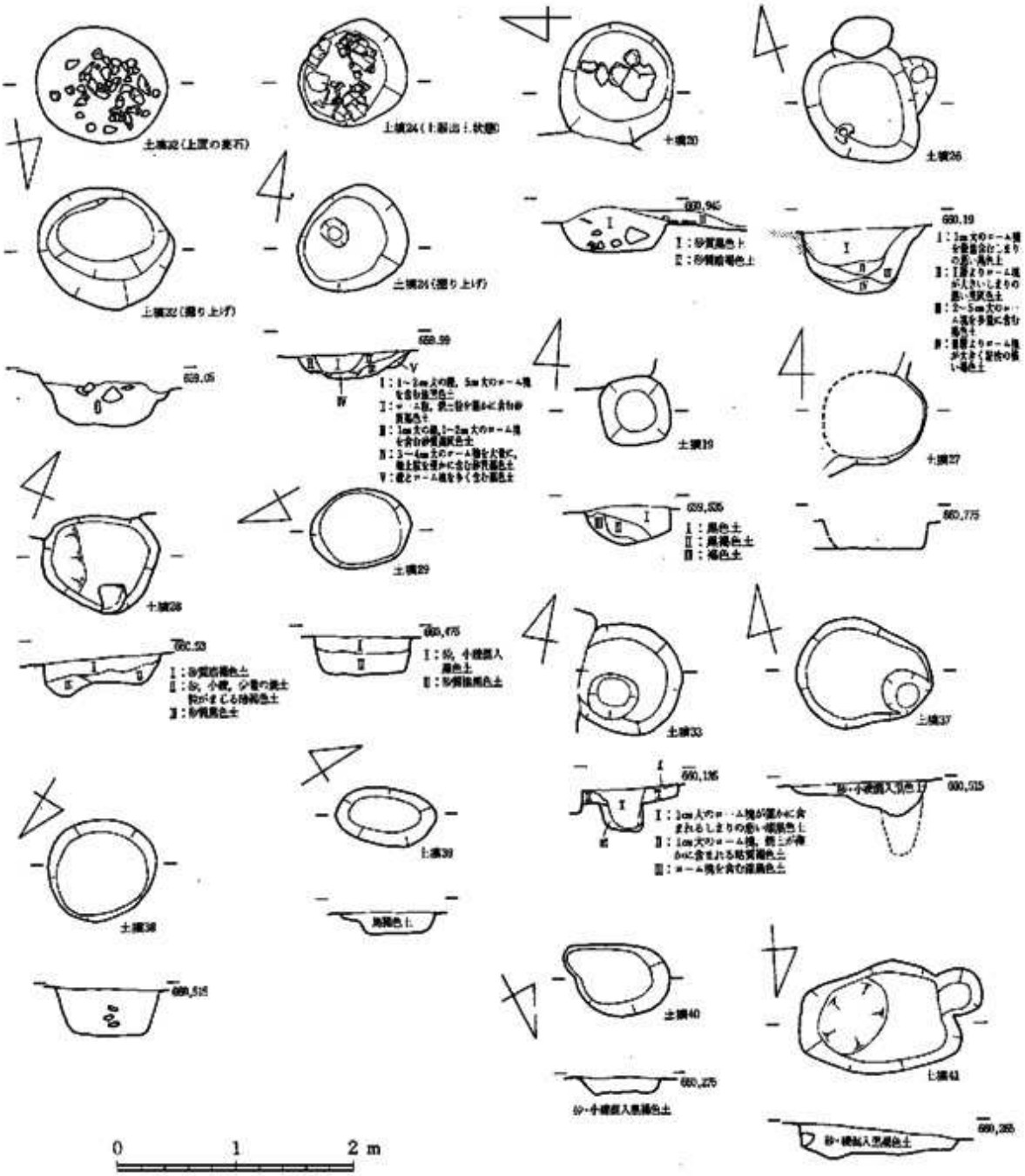
遺物　覆土中より土器・石器が出土している。土器はすべて小破片で、縄文中期のものが最も多い。石器には、打製石斧・横刃形石器がある。

覆土の埋没状態や遺物の出土状況は隣接する第11号住居址や竪穴状遺構１に似ている。本址の性格はよくわからないが、竪穴遺構１に似たものと考えられる。　（直井雅尚）

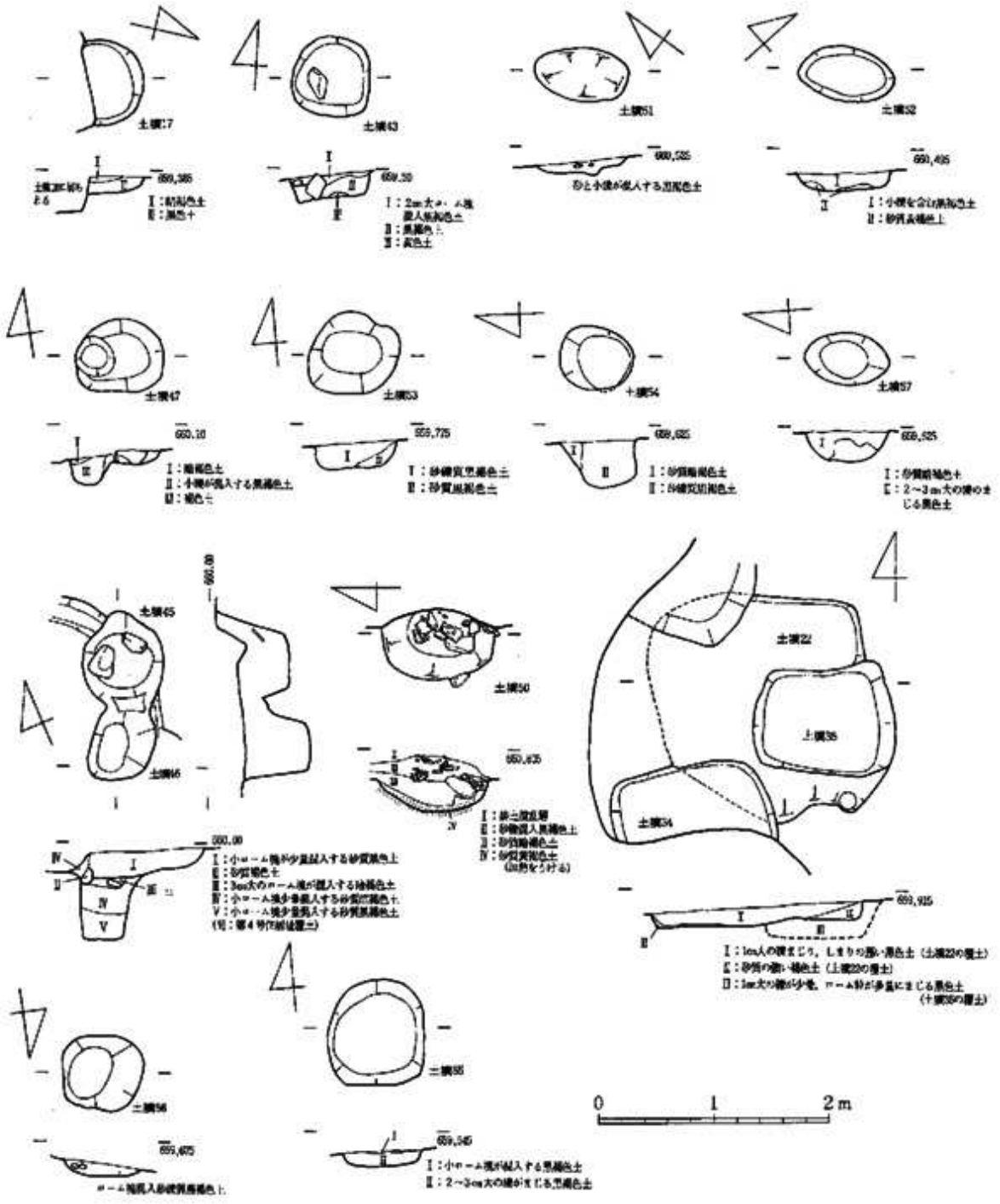
３　土　壙　（第21～24・31・32・44～47図）

今回の調査では、竪穴住居址の外に径20～30cmから2m近くに及ぶ大小の遺構が200個近く発見されたが、そのうち径50cm以上のものを土壙として扱った。

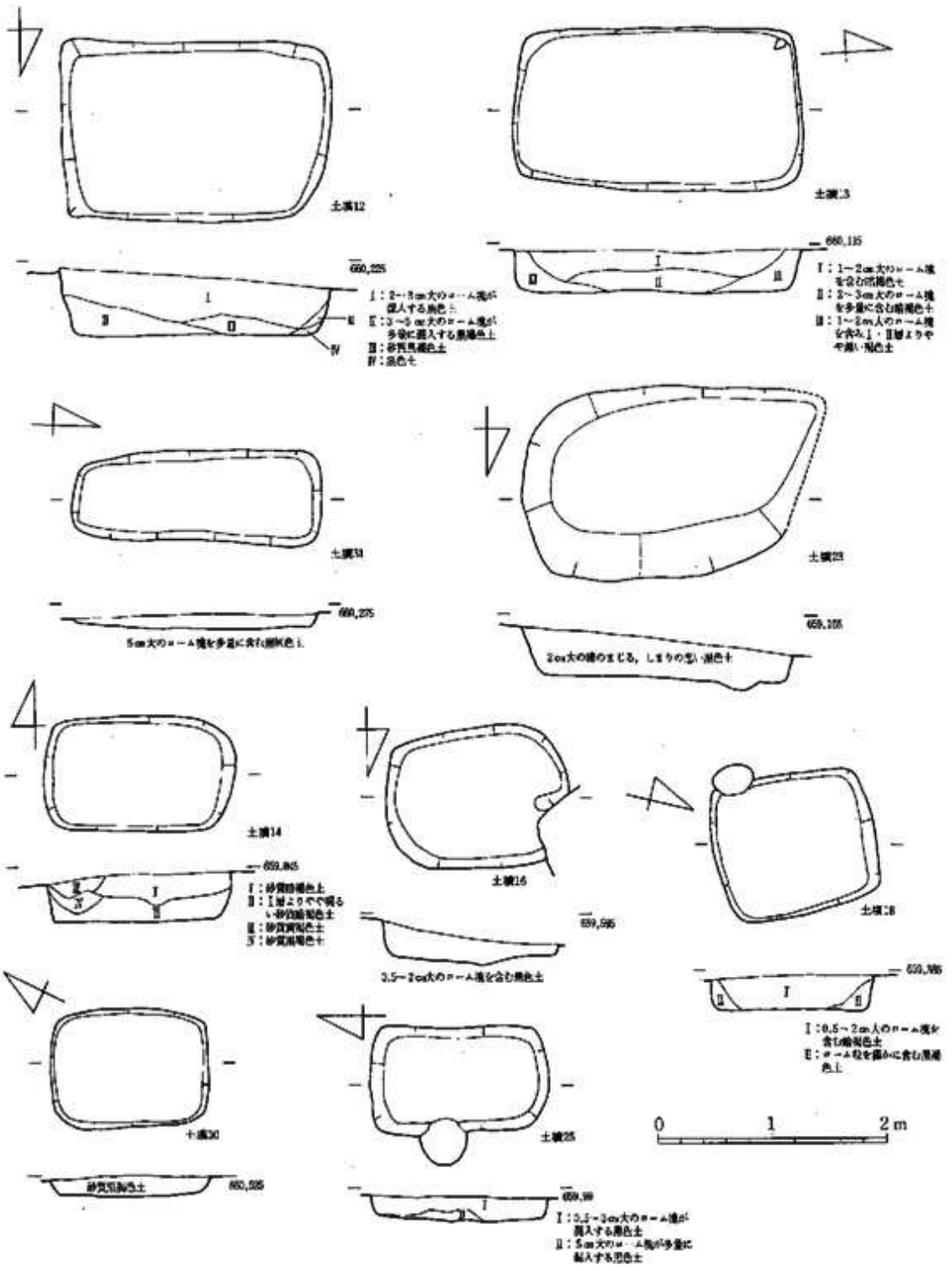
総計で57基検出された。平面形に円形が基調のものと長方形が基調のものの２種類がみられ、規模も円形のものは50cm～1m、長方形のものは50cm～2mという違いがある。詳細は一覧表に譲るが、特殊なものとして、上面に集石をもつ土壙32、底面から多量の一括土器を出土した土壙24などがある。各土壙の時期は、内部からの出土遺物が貧弱なものが多く、ほとんど不明である。ただ、全般的な傾向として、円形のものは概して覆土が黒く縄文時代に属するものが多いようであり、一方、長方形のものと一部の円形のものは単層の覆土に黄色土ブロックを多く含み古銭を出土したものもあるので、中世の墓壙に類する遺構と推定している。　（直井雅尚）


土壙32（上置の礫石）
土壙24（上層出土状態）
土壙20
土壙26
土壙32（掘り上げ）
土壙24（掘り上げ）
660.945
660.19
659.05
659.99
土壙19
土壙27
659.535
660.775
土壙28
土壙29
660.53
660.475
土壙33
土壙37
660.135
660.515
土壙39
土壙38
土壙40
土壙41
660.275
660.265
0
1
2 m

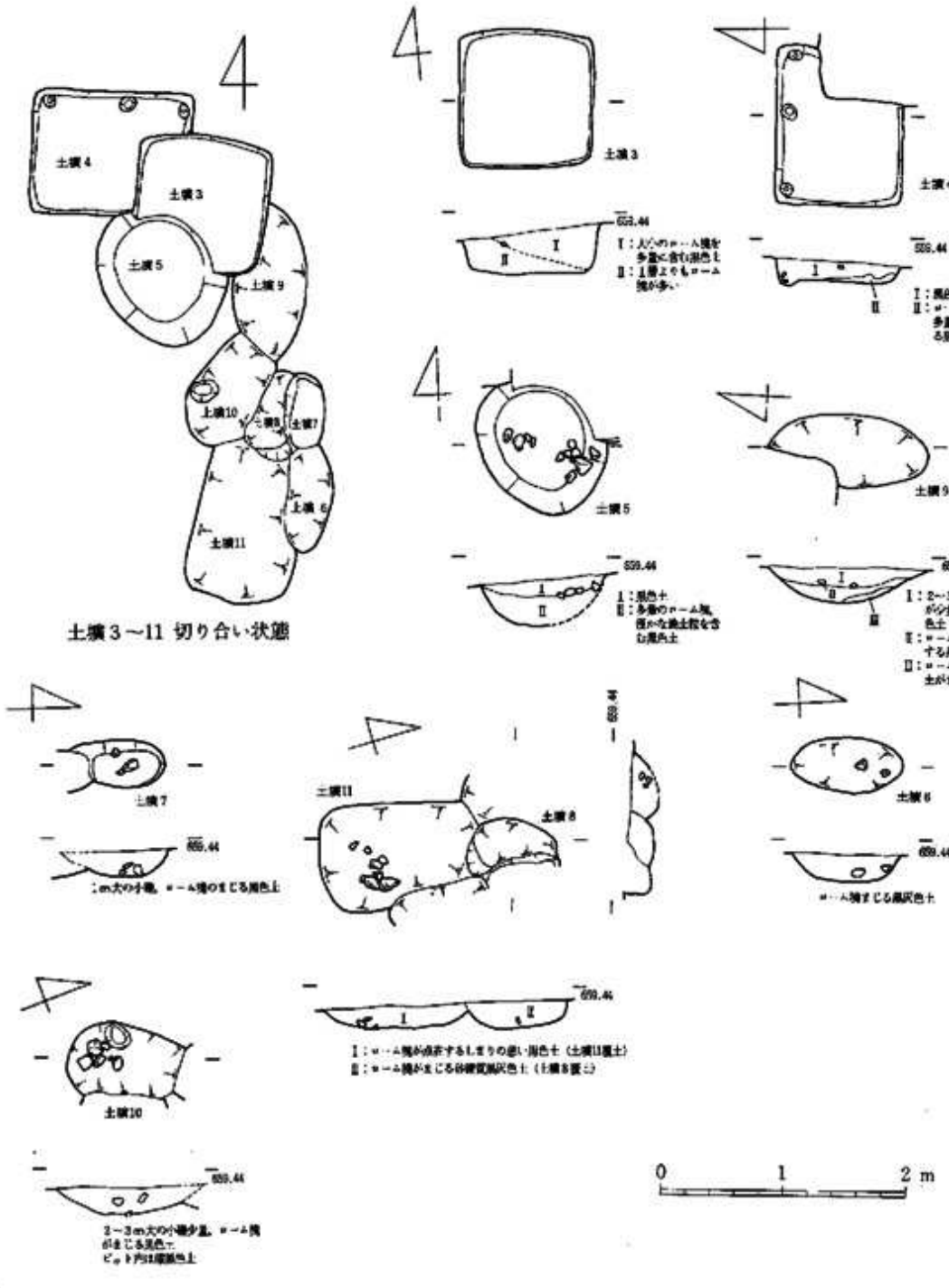
第21図　土　壙（1）


土壙17
土壙43
土壙51
土壙52
土壙47
土壙53
土壙54
土壙57
土壙45
土壙46
土壙50
土壙22
土壙36
土壙34
土壙55
土壙56
0
1
2m

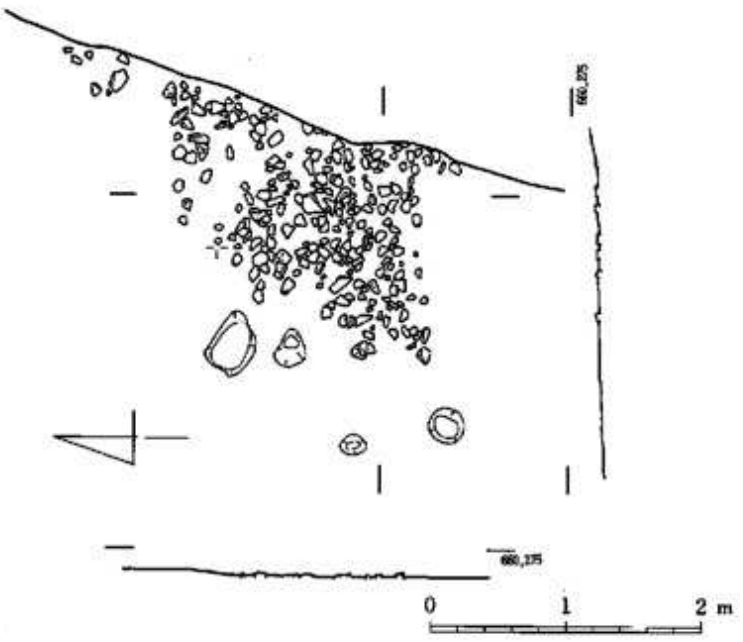
第22図　土　壙（2）


土壙12
660,225
Ⅰ：2～3cm大のローム塊が侵入する黒色土
Ⅱ：3～5cm大のローム塊が多量に混入する黒褐色土
Ⅲ：砂質黒褐色土
Ⅳ：黒色土
土壙3
660,135
Ⅰ：1～2cm大のローム塊を含む暗褐色土
Ⅱ：2～3cm大のローム塊を多量に含む暗褐色土
Ⅲ：1～2cm大のローム塊を含み，Ⅰ・Ⅱ層よりやや薄い褐色土
土壙31
660,225
5cm大のローム塊を多量に含む褐色土
土壙23
659,105
2cm大の礫のまじる，しまりの悪い黒色土
土壙14
659,865
Ⅰ：砂質暗褐色土
Ⅱ：Ⅰ層よりやや明るい砂質褐色土
Ⅲ：砂質黄褐色土
Ⅳ：砂質暗褐色土
土壙16
659,595
3.5～2cm大のローム塊を含む黒色土
土壙18
659,765
Ⅰ：0.5～2cm大のローム塊を含む暗褐色土
Ⅱ：ローム粒を僅かに含む黒褐色土
土壙30
砂質黒褐色土
660,025
土壙25
659,99
Ⅰ：0.5～3cm大のローム塊が混入する黒色土
Ⅱ：5cm大のローム塊が多量に混入する黒色土
0
1
2 m

第23図　土　壙 (3)


土壙3～11 切り合い状態
土壙3
土壙4
土壙5
土壙6
土壙7
土壙8
土壙9
土壙10
土壙11
I：大小のローム塊を多量に含む黒色土
II：I層よりもローム塊が多い
I：黒色土
II：ローム塊が多量にまじる黒色土
I：黒色土
II：多量のローム塊、微小な炭化粒を含む黒色土
I：2～3cm大の礫が少量まじる黒色土
II：ローム粒が点在する黒色土
III：ローム塊に黒色土がまじる
I：ローム塊が点在するしまりの悪い黒色土（土壙11覆土）
II：ローム塊がまじる砂礫質黒灰色土（土壙8覆土）
2～3cm大の小礫少量、ローム塊がまじる黒色土
ピット内は礫黒色土
0
1
2 m

第24図　土　壙（4）



第25図　集　石

4　集　石　（第25図）

調査地中央部、N12・E 9 グリットに位置し、調査区域外へ続いている。2×1.5m くらいの範囲内のローム上に、径 5 ~20cm の亜角礫を一重ないし二重になるように集めてあった。下部に掘り込みはなく、その他なんらの附随する遺構もみられなかった。

集石中及び周辺からの遺物の出土はなかった。　（直井雅尚）

第3節　遺　物

1　土　器

(1) 縄文時代の土器

本報告に掲載した縄文土器は、接合作業の結果復元図化されたもの39点、拓影または部分実測を行ったもの298点である。時期別にみると、早期2点・後期11点・晩期4点・不明3点を除き中期が大部分をしめる。松本平の縄文中期土器については、すでに島田哲男氏が13期区分を提示している(島田1982)ので、本報告でもこれを踏襲する。

松本平Ⅰ期…九兵衛尾根Ⅰ式期併行
〃　Ⅱ期…　〃　Ⅱ式期併行
〃　Ⅲ期…狢沢式期併行
〃　Ⅳ期…新道式期併行
〃　Ⅴ期…藤内Ⅰ式期併行
〃　Ⅵ期…〃　Ⅱ式期併行
〃　Ⅶ期…井戸尻Ⅰ式期併行
松本平Ⅷ期…井戸尻Ⅲ式期併行
〃　Ⅸ期…曽利Ⅰ式期併行
〃　Ⅹ期…〃　Ⅱ式期併行
〃　Ⅺ期…〃　Ⅲ式期併行
〃　Ⅻ期…〃　Ⅳ式期併行
〃　XIII期…〃　Ⅴ式期併行

巻末実測土器一覧表の表記方法は以下のとおりである。

出土地点）第1号住居址→1住、土壙→1土壙、1号ピット→1ピット

胎　土）混入されている鉱物は、石英→英、長石→長、黒雲母→黒、金雲母→金と略記し、鉱物名不明のものについては砂粒とした。混入物の大きさは、1 mm以下を微粒→微、1～3 mm程度を細粒→細、3 mm以上を粗粒→粗と略記し、混入量は少量、中量、多量の三段階に分けた。

成　形）手　法　輪積み5段→輪5、手づくね→手
器　形　後述する中期項で示す器形分類に基く。
計測値　不明のものは－、括弧内数値は現存計測値を示す。

整　形）内面調整を主体に記述する。その際、上段は口縁部付近下段は胴部～底部の状態をあらわす。外面調整についてはそのつど「胴部外面」と表記する。

施　文）表出されている文様を各々の要素に分解し、切り合い関係を基準にして施文過程を矢印で示す。

焼　成）焼成後の色調を示す。明かに内外面の色調が異なる場合、上段に外面、下段に内面の状

態を記載する。

備　考）その他土器製作上の技法（穿孔・塗彩）、使用時の付着物、欠損状態、所属時期を含む。

1）　早期の土器

第3号住居址、第5号住居址より各1点出土したが、いずれも他地区からの流込みによるものと考えられる。120は、横位山形押型文を施しており、胎土中には金雲母微粒子が中量混在されている。129は、粗大な縦位山形押型文で、金雲母微粒のほか石英細粒長石粗粒黒色微砂粒をそれぞれ中量胎土中に含んでいる。前者の方が器厚を減じ5.5mm程度であり、焼成も若干あまい。いずれも細久保式に比定されよう。

2）　中期の土器

中期土器317点を時期別に分類すると、中期後半IX期～XII期を中心として前半IV・V期が加わる。器種は、復元図化した土器から、深鉢・浅鉢・鉢・壺・台付土器・ミニチュア土器に分けられ、さらに深鉢・浅鉢については以下の各類型を設けることができる（第26図）。

深鉢A——くびれをもたない深鉢で、直線的に口縁に至るか口縁部でやや緩かに内湾するA_1、口縁直下で内折するA_2に分かれる。A_1は明瞭に文様帯を分けることはむずかしいが、A_2は三帯に区画できる。文様要素を加味した際に両者を類似型とするには抵抗があるがここでは特にその形態に着目した。

深鉢B——頸部から外反に開き口縁で直上するもの。

深鉢C——頸部を境に口縁に向かい外方に開くもの。直線的に口縁へ至るC_1、キャリパー状を呈するC_2に細分される。I帯は無文のものが多く、頸部(II a帯)をもつものもある。

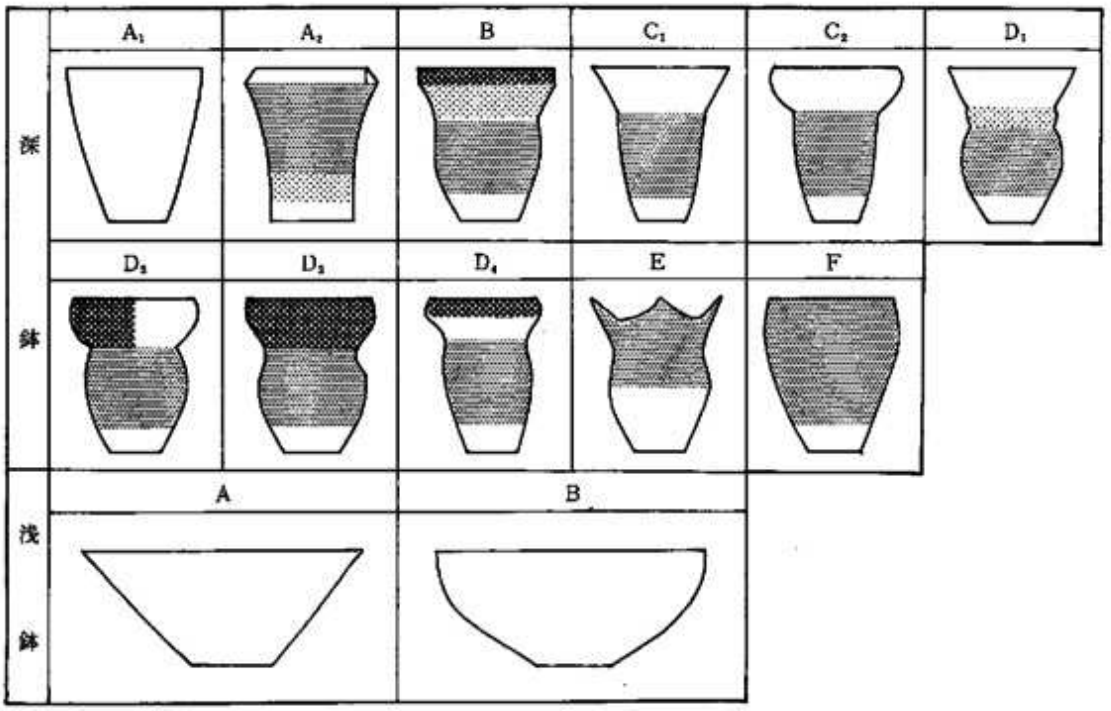
深鉢D——胴部が張り、頸部にくびれを有するもの。二段のくびれにより頸部に膨みをもたせ直線的に口縁へ向うD_1、くびれの強いD_2、くびれが緩かなD_3、くびれに無文部を有するD_4がある。D_2～D_4の口縁部はいずれもキャリパー状を呈する。

深鉢E——深鉢Dと同様の形態をなす。緩いくびれののち口縁に向って直線的に開き大波状を呈するもの。

深鉢F——底部から口縁部にかけて緩かに内湾しながら立上がるもの。いわゆる椀形とも称することができる。

浅鉢A——直線的に外方へ開くもの。平縁のものと波状縁のものとに分かれる。

浅鉢B——やや内湾気味に立ち上がるもの。



第26図　中期主要土器形態模式図

松本平IV期

土壙24壙底から一括出土している。27・29の形態は深鉢Bで、指頭圧痕をもつ隆線で区画された文様帯内部へ多截竹管により縦横あるいは蛇行する沈線を施している。28・30・31は深鉢A_1に充当する。31の突起部には、多截竹管の角押文とともにいわゆるキャタピラ状の幅広い押引文がみられる。27によって代表される平出第三類Aは、中期初頭末から中葉前半にかけて4段階程度の変遷が辿れるようである(鶴飼　1977)。それによると本土壙一括土器は、第二段階前半すなわち「狢沢式を含む新道前半」(鶴飼　1977)に比定されよう。28も平出第三類Aの一類型として把握されるのであろうか。ほかに第11号住居址173～175や、土壙およびピットから出土した267・271・332も該期に比定できる。

松本平V期

第12号住居址から出土している。住居址の項でも触れたとおり床面状態によって住居範囲を推定したために、確実に一括出土しているとは断言できない。25は深鉢A_2で、胴部文様帯は刻目をもつ隆線を基調に半截竹管の腹面を利用した半隆起で縦区画文を構成している。胴部文様帯下部には隆線で横区画文をなし、隆線に沿って細い爪形文を施している。26は口縁部を欠損しているがおそら

く深鉢A_1になろう。刻目をもつ隆線の脇に連続爪形文を配し、全体に抽象文を創出している。第11号住居址出土176～178、さらに261・297・320・321なども該期に比定される。

松本平IX期

第1号住居址および第2号住居址より一括出土している。器種形態は、深鉢C_1・C_2・D_1・D_2・D_4・E、浅鉢A・B、鉢、壺・台付土器、ミニチュア土器がある。深鉢C_1とD_2は文様帯の系統からみると、頸部文様帯を強調させた1・2から15を介して11への変遷が看取される。このことは例えば2の文様構成がやや古手の様相を帯びている点からも裏づけられよう。3・4・12～14は該期において一般的な曾利系土器である。鉢Eの6・17は胴部を欠くため全体像が把握できないが、居沢尾根1住(9)や22住(182)30土壙(285)(小池・島田1981)などの類似資料から判断すると、胴部中位でくびれ下半部に楕形文をもつ。隆線沿に押引文を有することから、いわゆる「梨久保B式」＝唐草文系第I段階に比定されよう(米田 1980)。5・16は加曾利E系として捉えられる。16は頸部に無文帯を有し、口縁部文様もS字状あるいはクランク状から発展してすでに楕円区画文形成段階へ入っているためX期とした方がいいかもしれない。5とともに胴部文様構成に北関東の該期土器との関連が指摘できる。19・20はそれぞれ浅鉢A・Bにあたり、該期の一般的特徴を備えている。8は第1号住居址炉内から出土した。底部から肩部にかけて外反しながら大きく開きいったん頸部に向って内折したのち再び直線的に開いて口縁に至る鉢形土器である。内折部のみに4単位の文様を配し、口縁外面上半部には赤色塗彩がなされている。類似資料が麻神遺跡2次2住(神沢 1973)から出土している。9は肩部で稜をなし頸部でくびれる壺形土器である。一括出土資料との関連から該期に比定したが、類似資料については御教示を仰ぎたい。あるいは復元図にやや問題があるかもしれない。第1号住居址と第2号住居址とでは、前者の1・2の存在そして後者の15・11さらに16の存在から推して、若干後者が新しい様相を帯びていると考えられる。但し、IX期内に明瞭な一線を画するほどの細分は避けた方がよかろう。ほかに、土壙21・28・42、275～292も該期に比定されよう。

松本平X期

第14号住居址から埋甕が出土している。形態は深鉢D_3で、IX期の深鉢D_2に比べ頸部のくびれが緩かになり重弧文が沈線化している点に特徴がある。ほかにも21・22・87～100・118・121・122・124～126など第3号住居址出土土器は該期に比定される。

松本平XI期

第8号住居址の埋甕2個体および130～137、第11号住居址の180～190・202～214などが出土している。23は深鉢F形態を呈する唐草文系土器である。松本平ではこれを埋甕に使用する例が多いという論考もみられるが(金井 1980)、本址の場合深鉢D_4も口縁を欠損させて埋甕として利用されてい

る。D_4は該期に入ると頸部無文帯を喪失し、D_3の胴部をスマートにした形態に類似するようになる。沈線化した懸垂文間を磨消す手法は加曾利E３式期に現出する。その他土壙21・50出土の35・36をはじめ土壙47、298～304・土壙51、310～317が該期に比定されよう。

松本平Ⅻ期

第11号住居址191～201が出土する。隆線による区画内に綾杉文やハの字文を充填したもの(191～199)、沈線間に綾杉文を施したもの(200・201)が看取される。ほかに土壙47・51出土土器にも該期に比定されるものがある。

松本平XIII期

第９号住居址142～146および第11号住居址215～224が出土している。いずれも櫛状工具などにより縦位の沈線あるいは蛇行沈線が描かれている。

出土土器からみるかぎり、前田遺跡には松本平Ⅳ・Ⅴ並とIX～XI期にピークが認められる。

３)　後期の土器

第９号住居址140、第11号住居址226～232・238、第４号住居址341・342が出土している。いずれも当該住居址に帰属するものではない。228・232は直線的な太沈線内に縄文を施し、226・341は列点文を配している。称名寺式に比定される。229・239は称名寺式の伝統を残しながらも、口縁端部に一条の沈線を配する点に堀之内式期への変移が窺える。238は該期の突起部である。

４)　晩期の土器

第11号住居址から240・246～248が出土している。240は隆線上に櫛状工具により刺突を有する。器厚はやや薄手で内面に丁寧なヘラケズリ痕をとどめる。246・247は浅い沈線により創出した微隆起線をもついわゆる粗製土器である。時期比定は難しいが、晩期中葉までの段階内と捉えておきたい(当願　1982)。

５)　その他の土器

241は縄文($\frac{L}{R}$)地に刺突文が施され器内面には横位平状の条痕がみられる。242は内外面に不規則な条痕がヘラ状工具によって描かれている。口縁をやや肥厚させた243には縦位の押引文がめぐっている。以上はいずれも極めて特徴的な土器であるが、時期決定については御教示願いたい。

(平林彰)

参考文献

鶴飼幸雄「平出第三類A上器の編年的位置付けとその社会的背景」(『信濃』第29巻4号) 1977
金井安子「埋甕の一視角—中部・関東地方における土着土器と非土着土器I(『考古学ノート』8) 1980
神沢昌二郎ほか『東筑摩郡波田村麻神遺跡第2次緊急発掘調査報告書』1973
小池孝・島田哲男ほか「居沢尾根」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一原村その4』1981
島立哲男「縄文時代中期における松本平」『松本市内出丸洞遺跡第2次緊急発掘調査報告書』1982
百瀬長秀ほか「御社宮司」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5—』1982
米出昭訓「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」(『甲斐考古』17の1) 1980

(2) 弥生時代の土器

第4号住居址及び第11号住居址覆土から少量出土している。第4号住居址の埋甕炉(336)以外は小破片で、拓影で提示できたものは第4号住居址345～348、第11号住居址249～254の10点にすぎない。

第11号住居址出土品は、幅の太い櫛目文ないしは条痕状の斜行沈線文をもち、249・250は甕の口縁部、他は胴部に相当すると考えられる。文様等から時期的には中期前半に比定されるものとみているが、いかがであろうか。第11号住居址は縄文時代中・後・晩期にわたる雑多な遺物を出土しており、本資料が第11号住居址の時期を決定するものである可能性にうすい。

第4号住居址出土の弥生土器は埋甕炉につかわれた336に代表され、本址の時期を決定するものである。336は胴部下半を欠く甕で、器形の特徴としては、胴部中位に最大径をもち、口縁端部が僅かに受け口状につまみ上げられる。文様は頸部外面に3～4段の櫛描波状文が重ねられるのみで、その波状文は土器正位で器面に対して右回りで施文されているらしく、また各段の切り合いのためにはっきりと読みとれないが1段につき3～5回ほど断絶があるようだ。文様部以外の外面はミガキが施され、内面は部分的に輪積み痕の平滑化が不完全で、横位にケズリ状の調整がなされているように観察できる。拓影の345～348は甕の胴部及び頸部片と推定される。描かれる文様はすべて横の櫛描波状文で、336の如く上下に切り合うことがない。また個々の波状も336に比して振幅・周期ともに小さく、全般的に細かい印象をうける。これら第4号住居址出土品は、時期的に、大まかにいって後期に属するのであろうが、地域的な時期の細分の中でどの様に捉えられるのかは今のところ不明である。

(直井雅尚)

(3) 奈良・平安時代の土器

今回の調査で出土した土師器・須恵器は縄文土器に比して相対的に少量で、出土地点も第6号生居址に限られている。器形として、土師器に甕、須恵器に蓋・坏・甕がみられる。図化できたものは349～358の10点、そのうち349～355が須恵器、356～358が土師器である。器形別に概観してみる。

〔須恵器〕

蓋：349・350の2点のみ出土している。計測値は、349は口径16.2cm、350は口径15.8cm、器高1.8cm（ただし歪みが著しい）を示す。屈曲する端部外面の稜が明瞭で、ゆるやかにふくらむ天井部は回転ヘラケズリが施されている。350は焼成時の歪みが激しく自然釉が厚いので観察は困難である。

坏：無台のもの（351～354）、有台のもの（355）の2種がある。さらに無台のものは、形態上より、ロクロからの切り離し痕をもつ底面からすぐに外開する体部につづくもの（354）と体部と切り離し痕をもつ底面（基面的底面）との間に「2次的底面」とも言える部分をもつもの（351～353）に分けられ、また底面の切り離し痕より、回転糸切り痕のもの（351・354）と回転ヘラ切り痕のもの（352・353）に分けられる。有台の355は僅かに残る底面に回転ヘラケズリ痕が観察できる。

甕：小破片ばかりで図化できたものはない。肩部が大きく張り、頸部が「く」の字状にくびれたのち外開し、口縁端部は面取りされる形態を呈す1種類のみがみられる。肩部以下に平行タタキ目が施されている。

〔土師器〕

甕：出土した土師器の中では甕類の破片が最も多い。図化できたものは356～358の3点だけだが、その他の破片からみると形態の上で大小があり、調整でも外面ないしは内外面にハケメをもつ比較的薄手のものと、ナデだけのやや厚手のものがあるようだ。

大形のものは図化した3点に代表され、最大径の割に器高の大きい典型的な長胴甕で、最大径が口縁端にくるもの（356）と、胴部上半にあるもの（358）がみられる。これらの調整は、外面は基本的には縦のハケメだが、体部上半に回転を用いて施したと思われる非常に細かいカキ目状のハケメをもつもの（356）も、稀にある。内面調整は、外面と同様のハケメがほぼ全面に横位に施されるものと、ハケメとは異る板状工具ないしはヘラ等でのナデがあるものが多い。356の内面は、外面上半の細かいカキ目状の調整痕と同様の横位の短いハケメが上半部に、下半部には幅1cm程の浅く長い縦方向の溝状調整痕がみられる。

小形のもので図化できたものはない。形態上では、最大径が口縁端か胴部上半にあり、「く」の字形の頸部から外反気味に開く口縁部をもつ。成形・調整では内外面ともナデ調整されるが、部分的に輪積みまたは巻き上げ痕が窺え、外面にヘラケズリをもつものもある。

358の器外面には二次的に粘土をぬりつけて器壁を厚くした跡があり、1～2mmの厚さで塗りつけられた粘土が落剝した下から、縦のハケメをもった本来の器面が顔を出している。このような、一度調整された器面の上に二次的に粘土を塗りつける手法は珍しく、近接した時期では長野県内に限ってみると、善光寺平での報告例を知り得るのみである。

これら第6号住居址出土の土器群の総体としての特徴は、第1に器形の種類が少いことであり、

第2に供膳形態である坏類に土師器がみられないことが挙げられる。所産時期については、今回の資料だけでは何とも言い難いが、他遺跡での編年ないしは年代比定を参考にすると、8世紀後半から9世紀代に位置づけられると推定している(2)。（直井雅尚）

注(1)長野市塩崎遺跡群塩崎小学校地点遺跡第33号住居址、同市三輪小学校地点遺跡第14号住居址出土の長胴形の甕に同様の手法があり、塩崎遺跡群のものは、報告者は古墳時代後期とみている。また、この手法に関して矢口忠良氏の若干の考察(矢口1980)がある。

矢口忠良他『塩崎遺跡群　塩崎小学校地点遺跡第2次調査報告書』　長野市教育委員会　1979

小林学・矢口忠良『三輪遺跡』　長野市教育委員会　1980

矢口忠良他『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』　長野市教育委員会　1980

(2)諏訪市十二ノ后遺跡で笹沢浩氏が行った編年に従えば、須恵器無台坏の底匠に回転糸切り痕をもつ351・354は坏Cに、回転ヘラ切り痕の352・353は坏Aにあたると思われ、両者の混在は、十二ノ后遺跡奈良・平安時代IV・V期（「IV期は奈良時代末から9世紀代前半」「V期は9世紀代中葉を前後する時期」）とされている。塩尻市向井遺跡で島田哲男氏が行った時期区分によれば須恵器坏の底部に回転糸切り・回転ヘラ切り、回転ヘラケズリの3手法が混在する時期を向井I期とし、9世紀代を考えておられる。

藤口孝一・笹沢浩他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書…諏訪市その4』長野県教育委員会　昭和50年

小林康男・島田哲男他『吉田向井――長野県塩尻市吉田向井遺跡発掘調査報告書――』　塩尻市教育委員会　1983

2　石　　器

今回出土した石器には別表の如く多種多様なものがみられる。ただし4号住居址については時期が弥生時代に属するため器種別分類の最後尾に一括して捉え記載した。

1）　石鏃（1～9）

9点である。そのうちチャート製が2点あり、共に側縁が鋸歯状を呈し、他の黒曜石にはみられないものである。

2）　石錐（10）

錐部の形状からして小さなつまみ部を作出したものであったと思われる。先端は鈍い。

3）　スクレイパー（11～15）

5点出土した。11は小型石匙であろう。抉りは浅いが、つまみ部にも調整を加えている。刃部は両面加工である。他の4点は、刃部両面加工―1、片面加工―3点であるが、比較的刃部として作り出した範囲が器長に比べ短い。総じて粗雑なものである。

4）　楔形石器（16～20）

両極打法のみられるもので平面四角形、断面紡錘形を呈するもの(16～19)、片面は平坦をなすもの（20）を挙げた。楔、ないし、割りのみとして用いるならば、むしろこの20が使用にふさわしい形と考えられる。

5） 石核（21～24）

4点図示した。22、23は断面四角形を呈し、比較的丁寧な打面調整等も行っているのがうかがえる。上、下端に主な打面があり、剥離面は3面にわたる。残る1面は90度打面を変えており、大きさからして残核であろうか。

6） 打製石斧（25～43）

19点である。撥形の偏刃タイプが10点と半数を占める。又、唯1点の直刃（25）は打製石斧の中で一番器厚の薄いものであった。

7） 横刃型石器（44～70）

28点を図示した。器種の中では一番多数を占める。このなかでは外湾刃のものが約半数を占める。顕著な使用痕を見せている44等の直刃タイプは、横長でプロポーションの良いものが多い。なかでも49は小型で非常に薄く、刃、背部が丁寧に加工され、両者の区別がつかない程である。又、53は抉りを設けた大型石匙とも言うべきものである。

なお、図示してはいないが、鋭いエッジをもった大型剥片が多数あり、詳細にみれば本種に含まれるものもかなりあろうと思われる。

8） 石鏃（71）

この1点は、先端の部分が敲打され、ゆるやかな抉りを呈する。着柄の為のつぶしが行われたものである。刃部への剥離は浅く、しかも粗雑であり、使用の痕跡は見る事ができない。

9） 磨製石斧（72～74）

3点とも定角式石斧であるが、73は極端な片刃となっている。縄文時代に属するならば、やや特異なものであり、弥生時代の片刃石斧かもしれない。

10） 石剣（75）

特に人為的な痕跡等は見当らないが、大きさ、材質、やや楕円形の断面からして、頭、先端部を欠いた石剣の一部と考えている。

11） 凹石・敲打器（76～88）

凹部（⟷）を持った石は、敲打痕（←……→）、あるいは、磨滅痕、又はその両者を持つ場合が非常に多い。しかし、本資料の場合は、磨石としての使用は、76の1点のみが石鹸状を呈した良好なスリ痕を見せている他には見る事ができない。又、凹についてみても、12点中7点が、断面に表現できない程浅く、器形のプロポーションも良くはない。

凹部をもっていても敲き石として明瞭な痕跡を有するものは「敲打器」として表に載せた。その痕跡は2つに分ける事ができる。鈍な面をつぶれ状に呈するもの（83～85）と、鋭いエッジを、使用或いは使用の結果、残しているもの（86・87）である。対象物の違いによる結果ではないかと考える。

12)　石皿（89）

完形で1点出土した。比較的薄く、皿部は非常に滑らかなままである。

第4号住居址出土石器

住居址内出土遺物は図示した5点である。打製石斧は、前の25～43に比べると、小型なものに属する。又、磨製石庖丁は2点あり、共に紐穴は1ケである。他に、横刃石器が2点ある。93は、刃、背部の片側に使用痕を残しており、穂摘み具として使用した痕跡と考える。　　（高桑俊雄）

3　鉄　製　品

今回の調査による鉄製品の出土は少ない。

鎌（1）は茎付鎌で、刃部の大半を欠している。目釘穴1ケをもち、茎尻が内側に曲げられている。釘（2、3）はいずれも角釘で、共に一方の端を叩き延し、皿部をつくり、それを直角に曲げたものである。4は、断面がやや楕円形ないし円形を呈し、一方が細る棒状のものである。松本市笹賀くまのかわ遺跡（松本市教委　1982）出土に同様のものが見られる。鍛造用の芯鉄ではないかと思われる。5は一方が丸く止まり、もう一方がねじれの状態を見せている。錐（もじり）というものがあるが、本資料は、ねじれ部分が破損している為全容は分らない。6は、断面四角形で、先端は鋭く尖っている。角釘にしては急激な細り方である。7は腐食がはげしく、詳しくは分らない。折り返し部を設けた鎌の一部ではないかと考える。他には銭の出土がある。3点で、いずれも北宋銭である。　　（高桑俊雄）

第4章　調査のまとめ

今回の調査は、遺構検出を実際に行った1000m²弱の調査地内において、縄文・弥生・平安各時代の竪穴住居址11軒、土壙57基、それらに伴う多数の土器・石器の発見という、多大な成果をあげることができた。2～3の問題点を指摘して調査のまとめとしたい。

1　縄文中期の遺構と遺物について

検出された縄文中期に属する生居址、土壙の数からみて本遺跡が該期の集落であることは明らかであろう。住居址は調査地の中央部から北寄りの部分に集中しており、集落は予想としては調査地東隣の県道を越えて東方及び東南方へ続いているものと考えられる。すぐ東の一段高い所に位置する木下地籍との関連が興味のもたれるところであろう。

個々の住居址では、柱穴・炉のあり方に問題がある。確定される柱穴のない住居址や、炉の推定地に焼土を伴っていないものについては、遺構確認面がローム層ではなく極めて砂性の強い黄褐色土のため初期的な埋没や崩落の痕跡が検出し難く、焼土も残りにくかったためと理解している。ただ第3号・第9号住居址は、炉石のぬかれたものとして捉えたが、焼土が存在していない点は、先の理解をふまえても、問題を残した。また、焼土の存在に関しては、見事な石囲炉であった第1号・第2号住居址の炉の内部にも焼土がみられなかったが、これもどの様に捉えたらよいのであろうか。削平され、柱穴・炉や埋甕しか残存していない住居址として第12～14号住居址の3軒を想定したが、炉址と埋甕を手懸りにした第12号住居址と第14号住居址は確かなものであるとしても、第13号住居址については焼土をもつ土壙とピットがいくつかあり、範囲、プラン等に不確定なものを残した。また以上の3軒の他にも、ピットが円形を描いて配列している様にみえる部分が何ケ所かあり、それらはピットの配列以外に、焼土・埋甕等の手懸りを欠いていたため取り上げなかったが、実際には住居址だったものもあるかもしれない。

遺物については、それぞれの項で詳述した通りであるが、住居址間で遺物の出土量に著しい差がみられる。特に、炉址を良好な形で残していた第1号・第2号住居址に遺物が多く、炉石が抜かれ破壊されていた様な炉をもっていた第3号・第8号・第9号住居址等に少いという現象が顕著で、この現象は、住居廃棄、遺物廃棄の問題に係わっていくものなのであろう。

土壙24から一括出土した土器については、松本平IV期に比定されているが、その出土状態について触れたい。土壙24の底面周囲に、中央部に空白をつくって横たわっていたのが27～32の6個体である。31はほぼ完形で他はかなりの部分を欠損しているが、これらの土器を埋めていた土層には撹乱による乱れはなく、各土器の欠損部は埋没以前からのものであることがわかる。この土壙24の周辺には、松本平V期に比定されている第12号住居址の存在が想定されているが、土壙24はそれに先

行して単独で存在したものとみられる。

2　弥生時代の遺構と遺物について

第4号住居址は今回の調査で1軒のみ発見された弥生後期の住居址で、この発見は調査前の予想には全くなかった成果であった。松本平においては、弥生時代の遺跡面の把握が不充分で、該期の遺構がまとまって発見された例は珍しい。近年の松本市内の発掘調査で弥生時代住居址が発見された例は、昭和55年調査のあがた遺跡以来である。

土器埋設の炉址は松本平の弥生後期住居址の一般的な様相とみられ、昭和54年度に調査された塩尻市中島遺跡では発見された5軒の弥生後期住居址はすべて埋甕炉を設けていた。天竜川水系の弥生後期住居址のあり方と通ずるものがある。ただし、埋設された甕は器形・文様等からみて、千曲川水系の弥生後期土器の影響も考えられる。この天竜川水系と千曲川水系の該期の要素の混在については、土器に関して強くみられるようで、第4号住居址覆土から得られた2点の石庖丁の形態は天竜川水系の弥生後期の様相に等しい。

第4号住居址の居住者は、本遺跡の載っている段より一段低い、小田川の氾濫原を生産地としていたと考えられ、本址の他に遺跡内に同期の住居址が点在するものと予想される。

3　平安時代の遺構と遺物について

遺構として第6号住居址の1軒のみ発見されている。この時期の住居址平面形は方形を呈すのが常で、本址のように主軸の直交方向が長い長方形は特異である。元来、方形であったのが、西半分を削平されてしまったためと見るより、傾斜地の地形的制約により当初から長方形につくられたと考えたい。

遺物については、須恵器の供膳形態である坏の無台のものに、底面に回転ヘラ切り痕をもつものと回転糸切り痕をもつものの2者がみられるのが特徴的である。この2者に、更に底面を回転ヘラケズリ調整される有台の坏が伴い、須恵器供膳形態の8世紀代から9世紀代にかけての時期の良好なセットが捉えられたと言えよう。

4　中世の遺構について

第7号住居址及び覆土が特異な土壙類を考えている。第7号住居址は生活痕の稀薄さやピットの配置から、傾斜地を利用した小屋掛のようなものだったのではないかと考えている。土壙類については、土壙3・4・18に代表される方形のもの、土壙12・13・23などに代表される長方形のもの、土壙5・16のように円形に近いものがあり、覆土が多くは単層でローム・ブロック、地山の土のブロック状混入が顕著なものである。覆土の特異さは、掘って間もなく埋められたためと解釈し、墓壙の可能性を考えているが、古銭を出土したのが2ヶ所（土壙5・22）、鉄器を出土したものが3ヶ所あることもそれを傍証するものであろう。

5　調査全般について

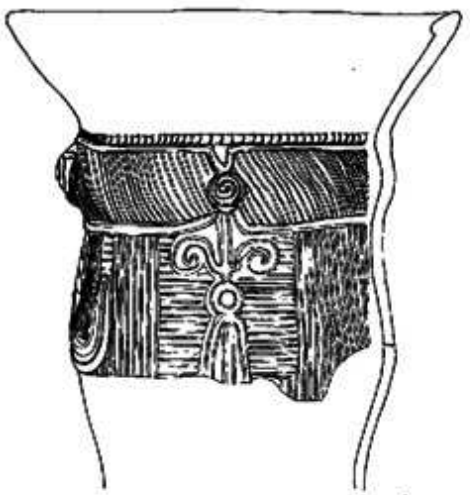
今回の調査の原因である圃場整備事業は、傾斜地を削りまたは埋め立てて平坦にし、工事終了後

は以前の景観を一変させてしまうものである。当然、遺跡はひとたまりもなく壊滅し去ってしまい、これに対応する調査方法は全面調査の実施しか考えられない。特に、平坦地のほ場整備では遺構確認面が深い等の理由で、広範な全面調査の実施から逃れられる場合もあるが、傾斜地・丘陵地では残念ながら全面調査による記録保存しか遺跡を遺す手段はないのが現実である。この点について、今回の調査はどの程度、満足のいくものであったかは、はなはだ疑問である。予算、期日、調査組織、これらがこの前田遺跡を記録保存するということに対して充分であったかと考えると、甚だ心もとないことである。特に国・県の補助事業という性格により年度内報告書刊行の義務があり、勢い、事業の報告という一面にのみとらわれて、本来の記録保存という文化財保護思想が隅に押しやられることに懸念するものである。

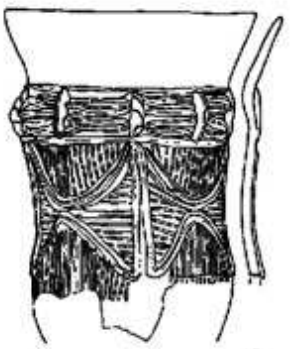
赤木山は地学的にみても、考古学の立場からみても興味ある資料を包蔵しており、それ故に県の重要遺跡に名をつらねている程であるが、ほ場整備をはじめ開発の手が加わろうとしている昨今、最悪の場合でもキチンとした記録保存をしておかねば、将来悔いを残すことになるのではないか。その点関係各位に尚一層のご協力をお願いする次第である。

末筆で失礼ではあるが、今回の調査には地元寿地区土地改良区、寿出張所、公民館、寿史談会の方々にはご理解、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。また作業にご協力いただいた方々、整理作業や報告書作成にご助力いただいた方々にも心より謝意を表したい。

発掘調査という仕事は手作業であり機械化できないものであればある程、人間の手、人間の和が大切であることを痛感するものである。寿地区においてはここ数年発掘調査が続くと思われるが、「寿の歴史を掘り起し、記録する」ことに更にご理解ご協力をお願いしたい。　（神沢昌二郎）

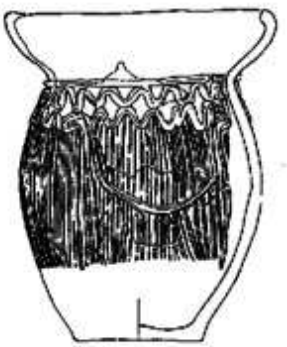


1

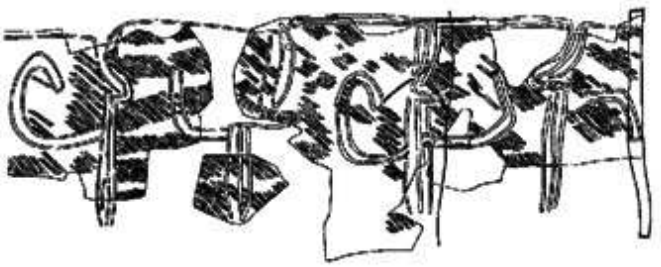


2

3



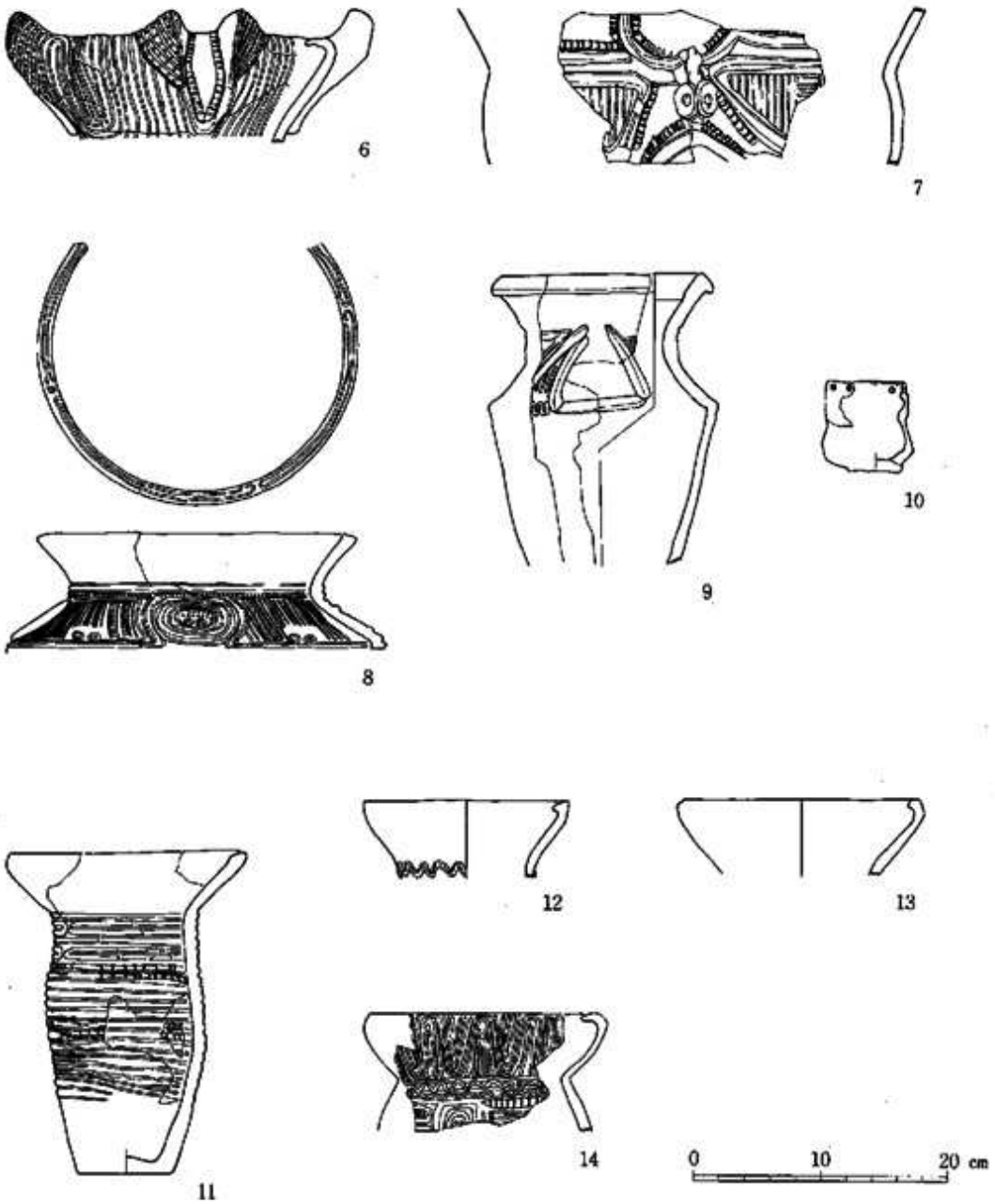
4



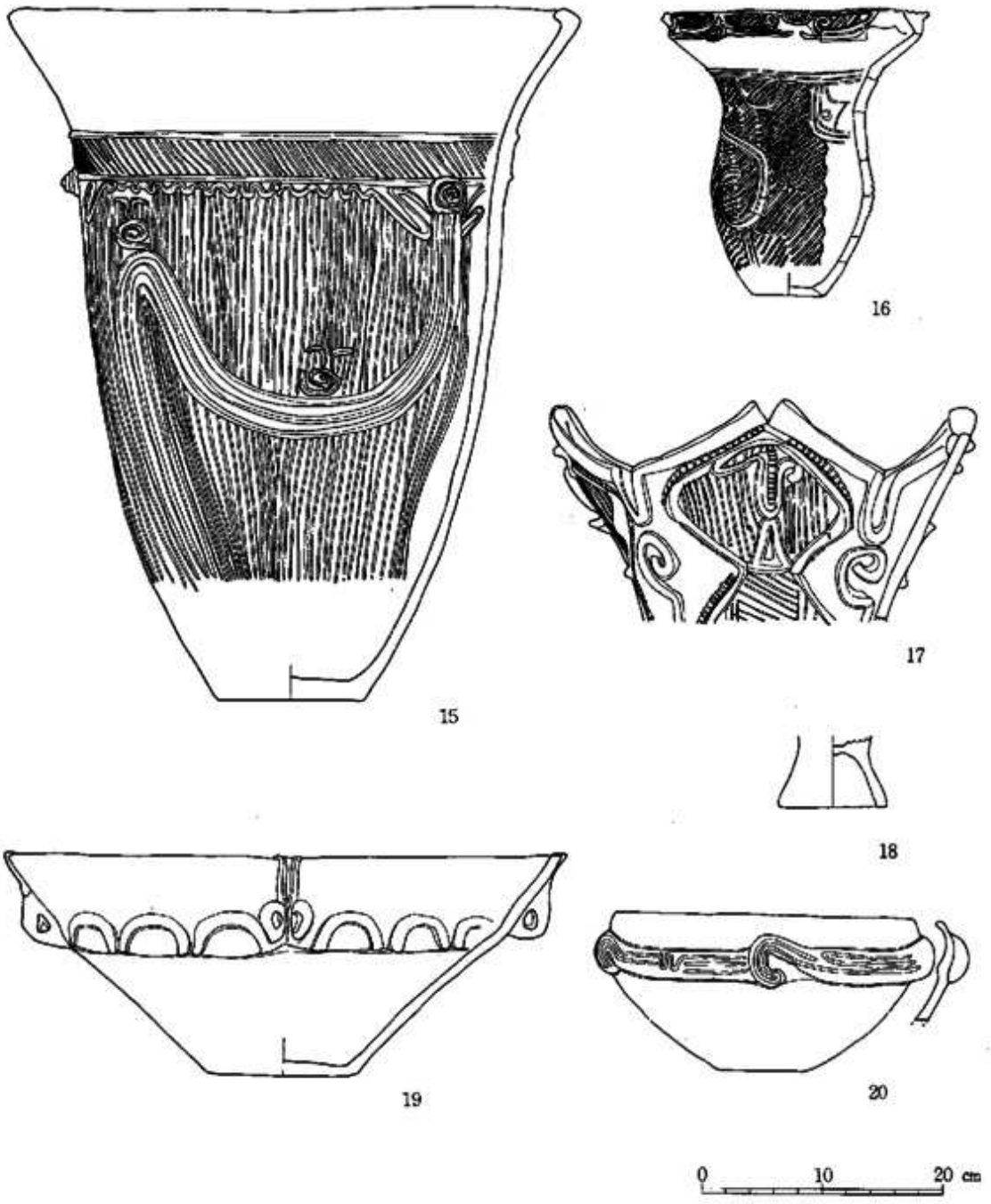
5

0 10 20 cm

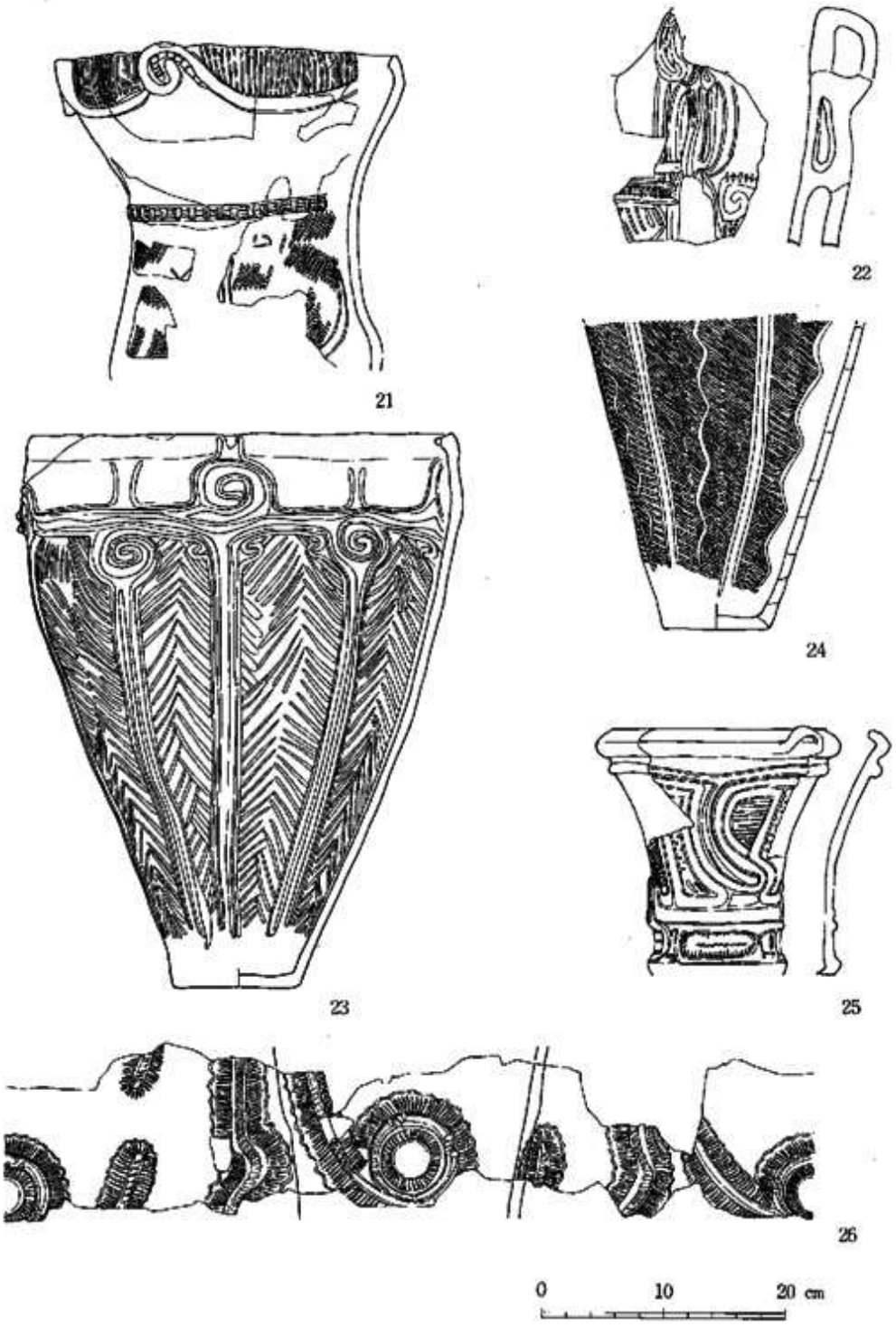
第27図　縄文土器実測図　(1)　第1号住居址



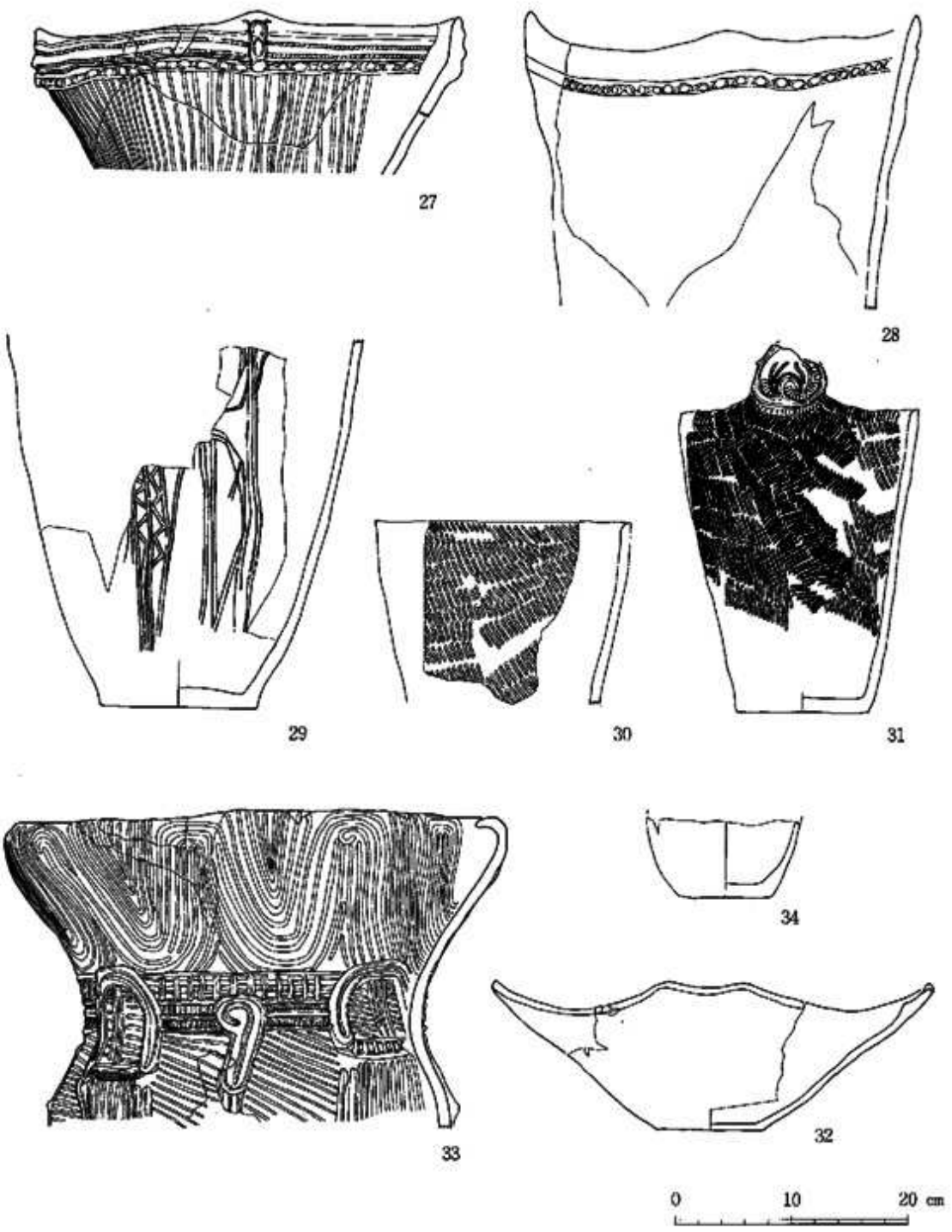
第28図　縄文土器実測図 (2)　第1号住居址：6～10　第2号住居址：11～14



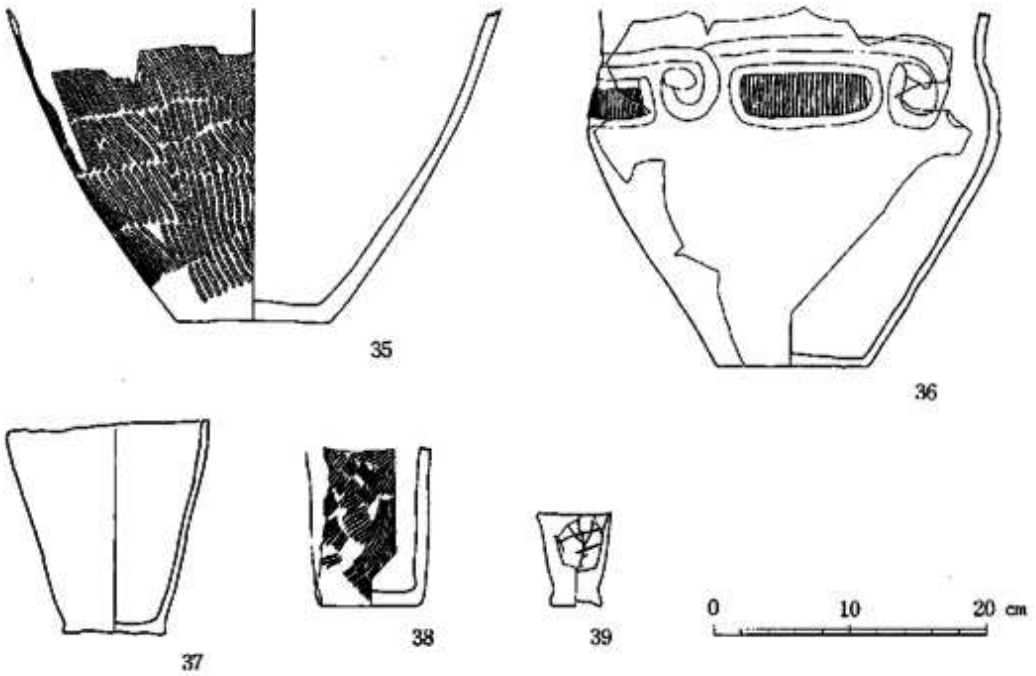
第29図　縄文土器実測図（3） 第2号住居址



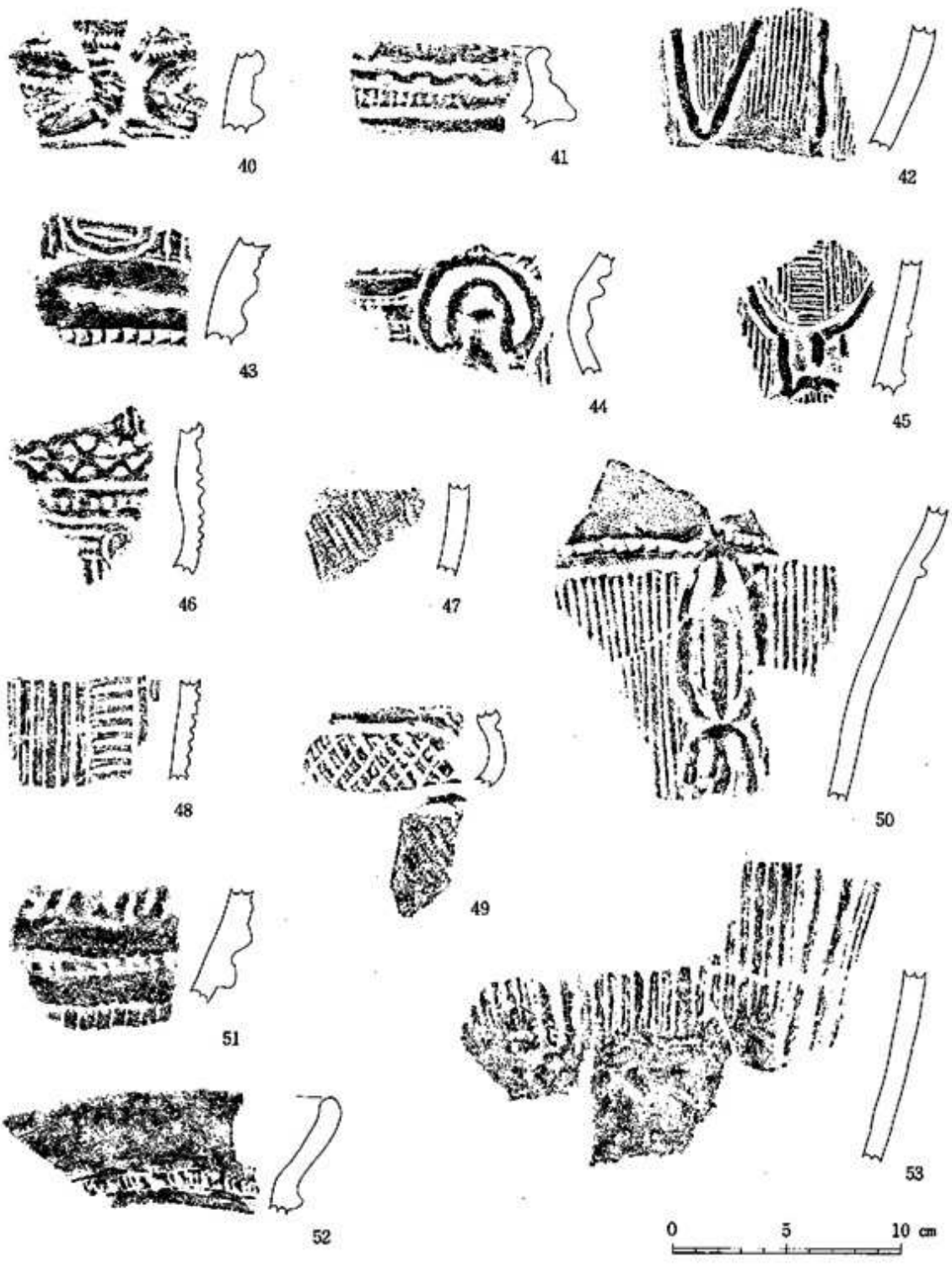
第30図　縄文土器実測図（4）　第3号住居址：21・22，第8号住居址：23・24
第12号住居址：25・26



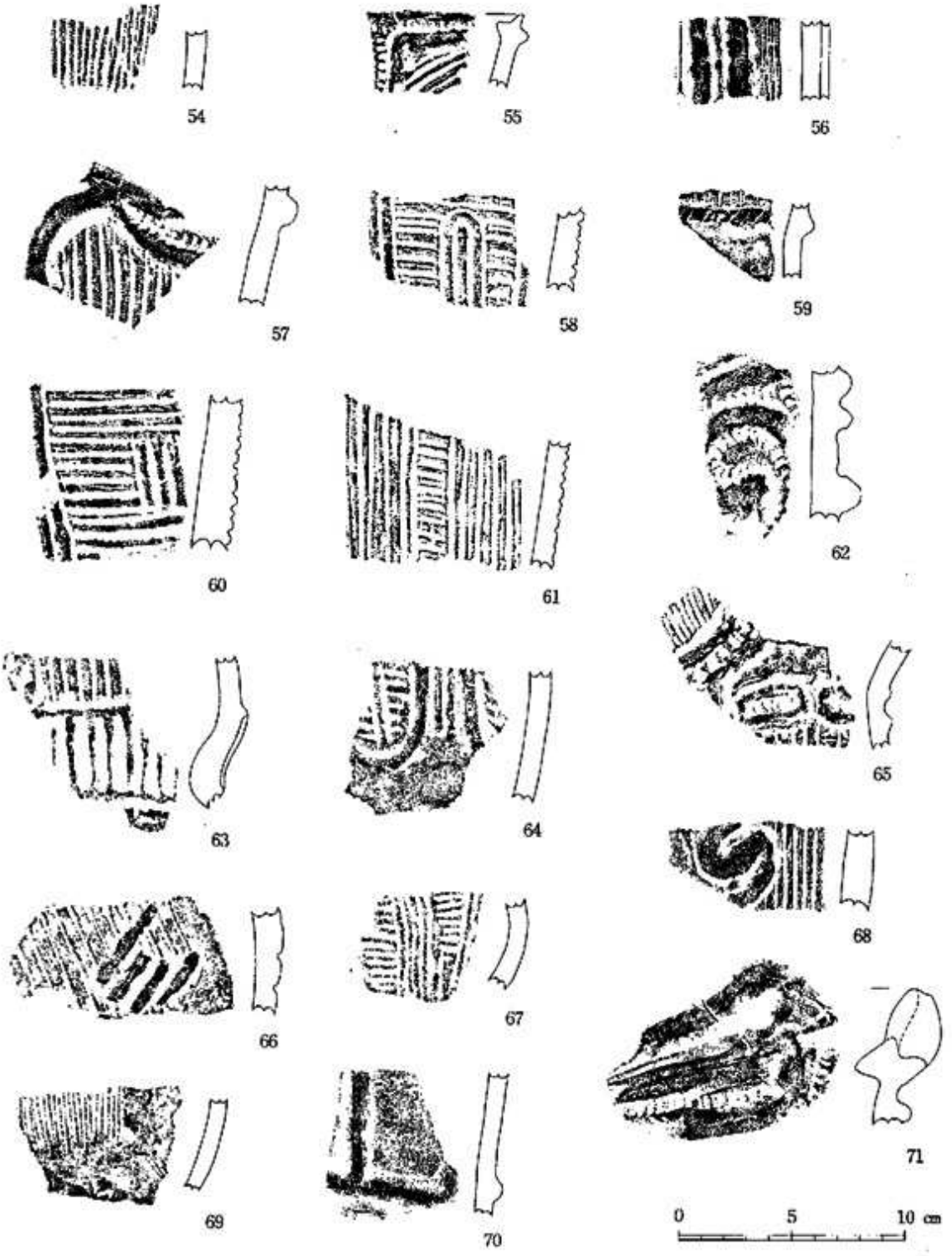
第31図　縄文土器実測図　(5)　土壙24：27～32
第14号生居址：33・34



第32図　縄文土器実測図　(6)　土壙21：35，土壙26：37，土壙50：36
P 61：38，遺構外：39

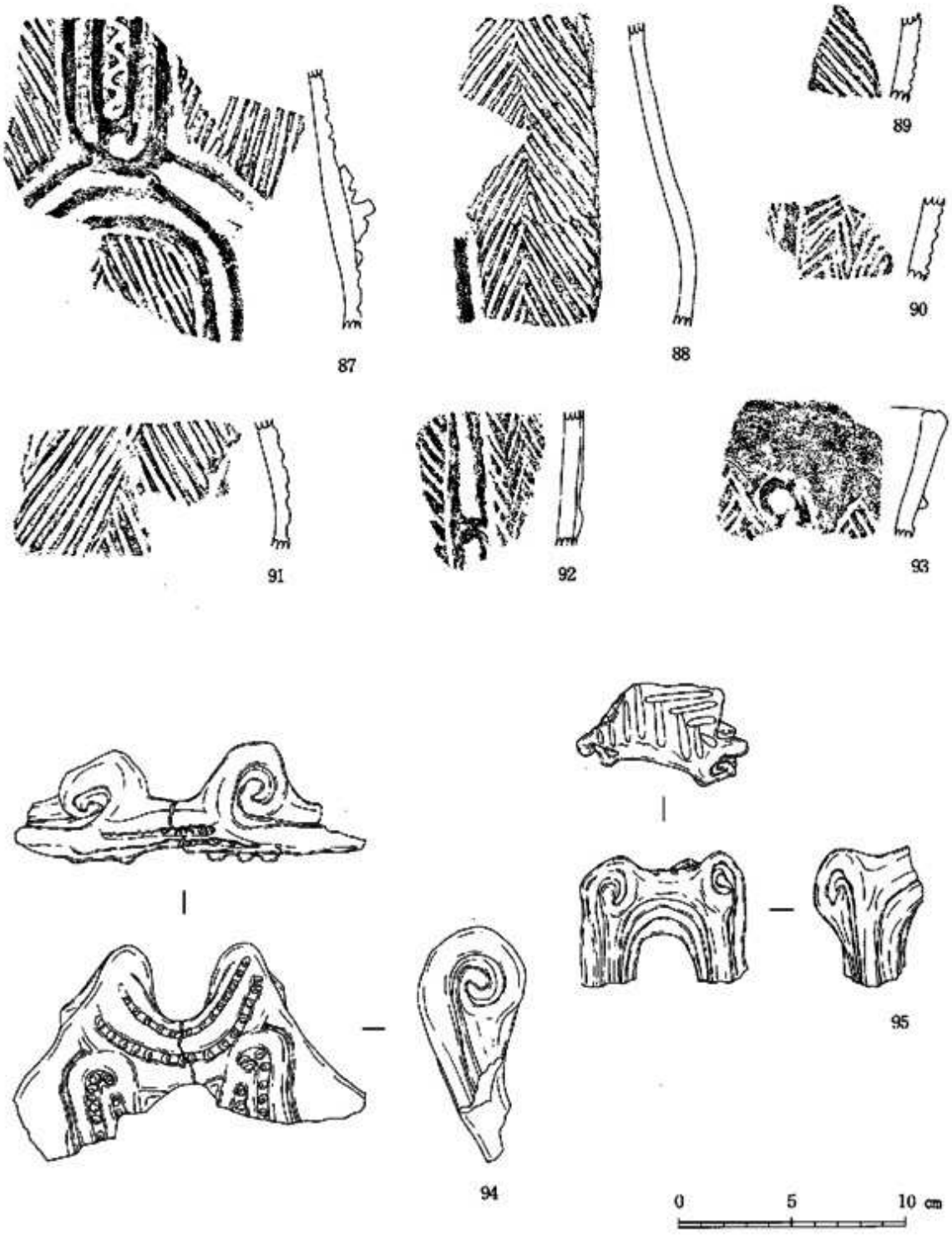


第33図　縄文土器拓影　(1)　第1号住居址

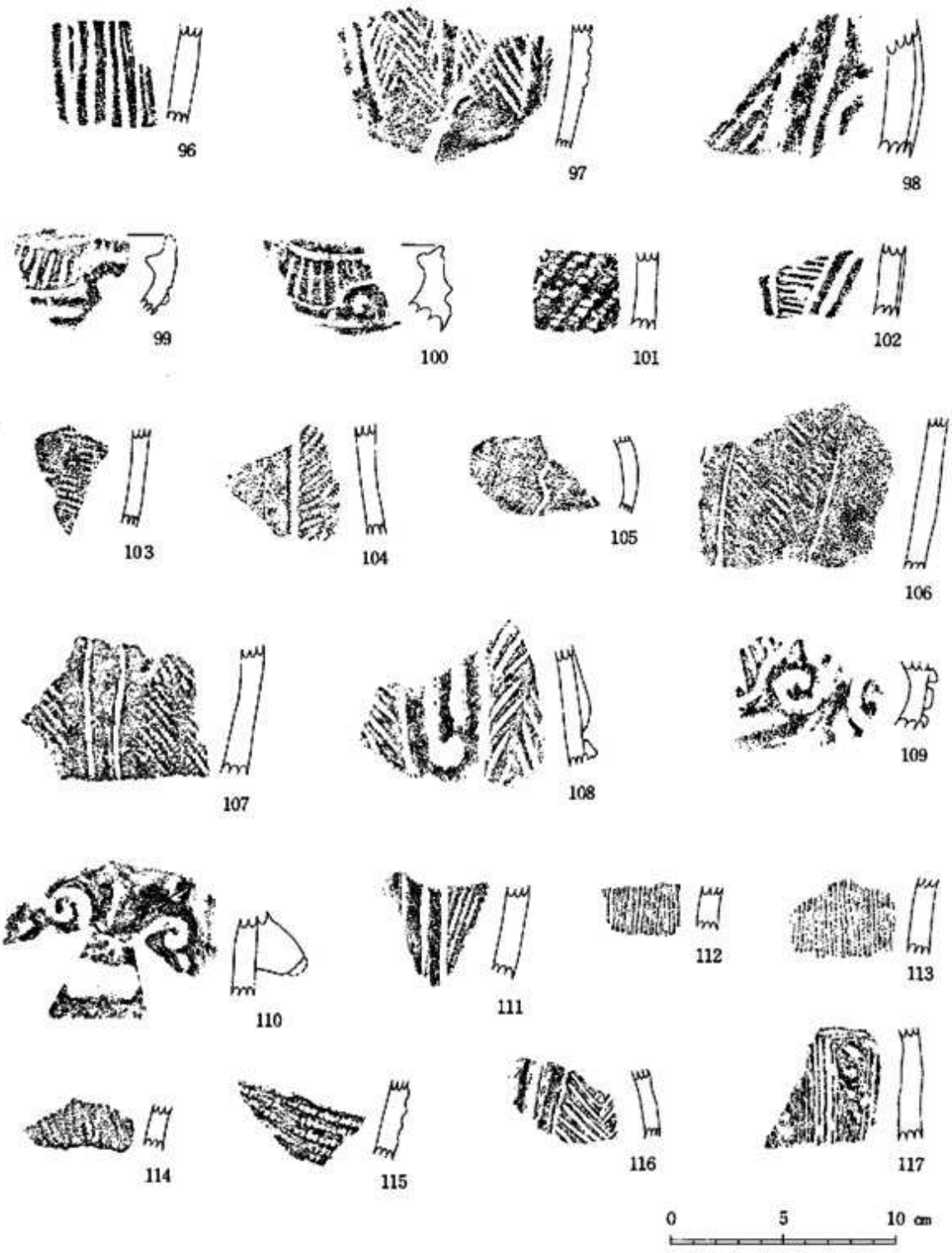


第34図　縄文土器拓影　(2)　第1号住居址

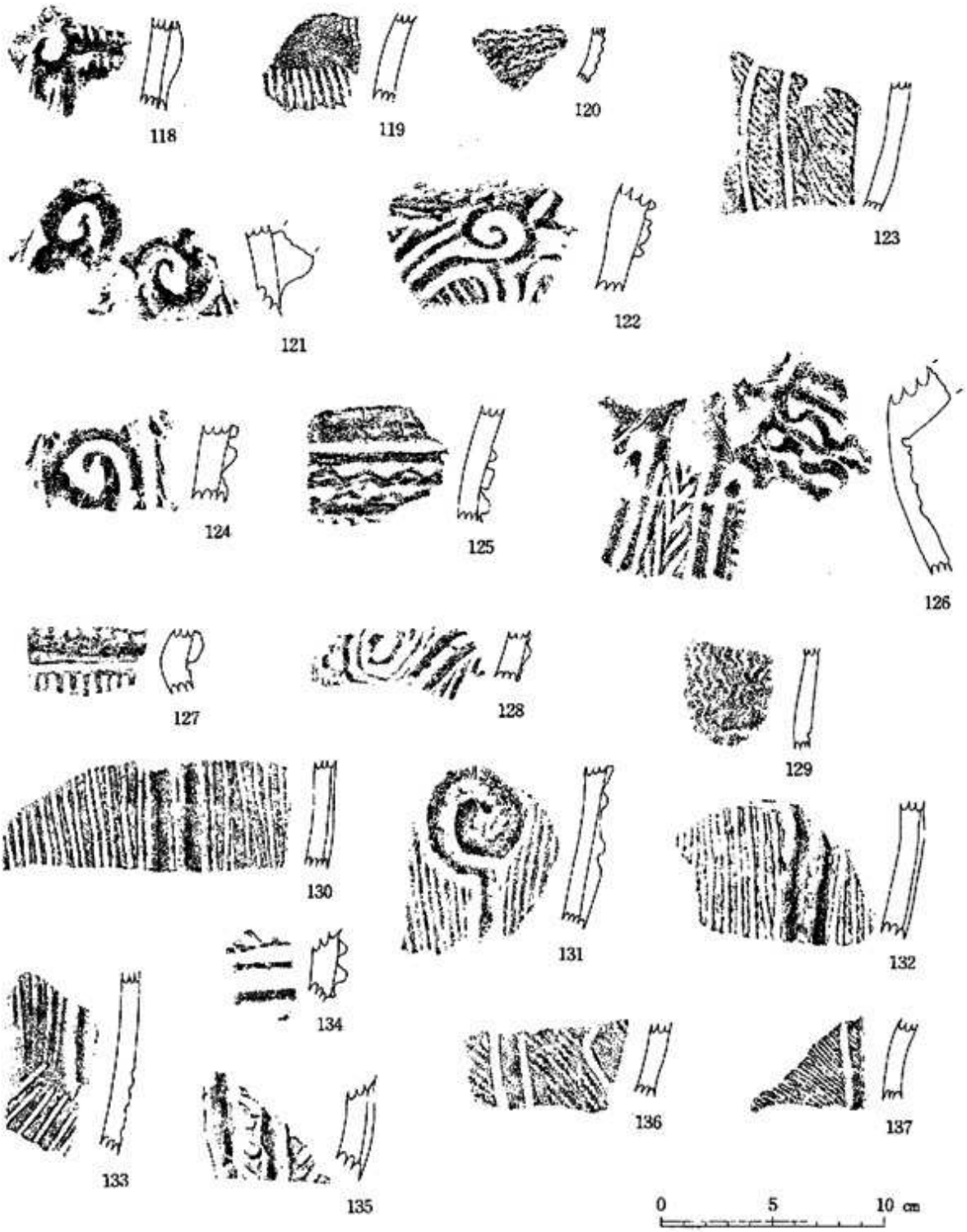
第35図　縄文土器拓影　(3)　第1号住居址



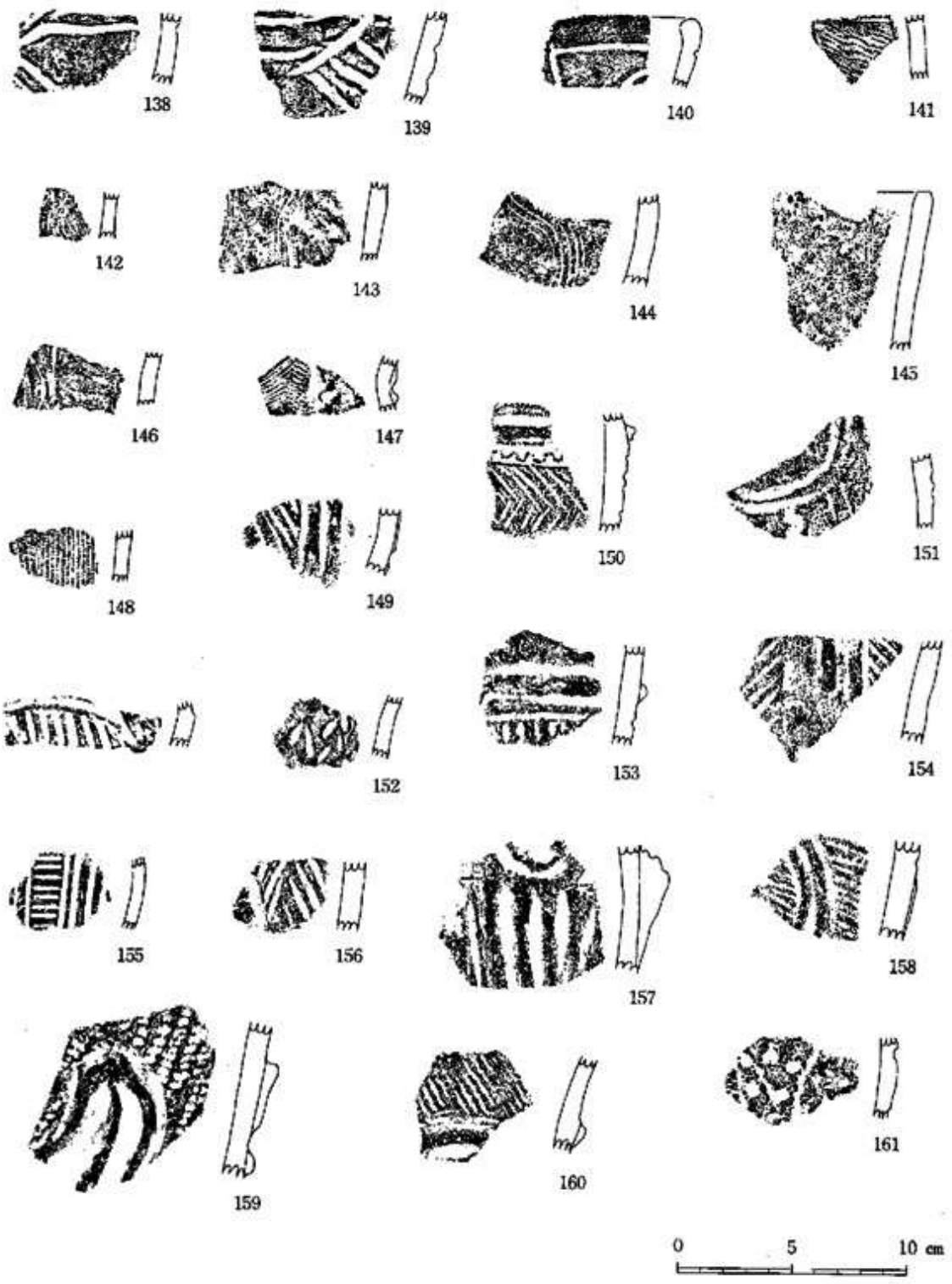
第36図　縄文土器拓影　(4)　第3号住居址



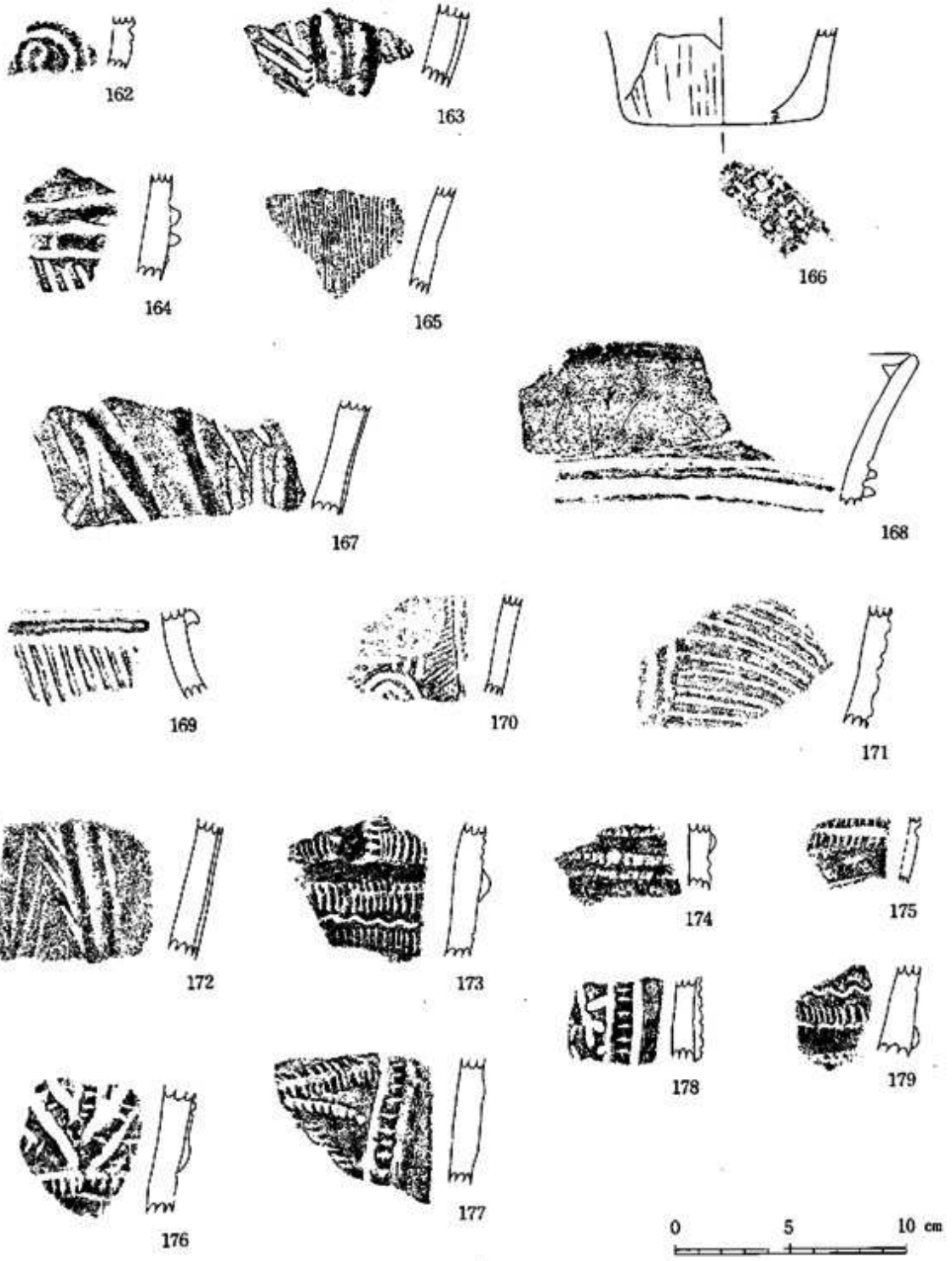
第37図　縄文土器拓影　(5)　第3号住居址



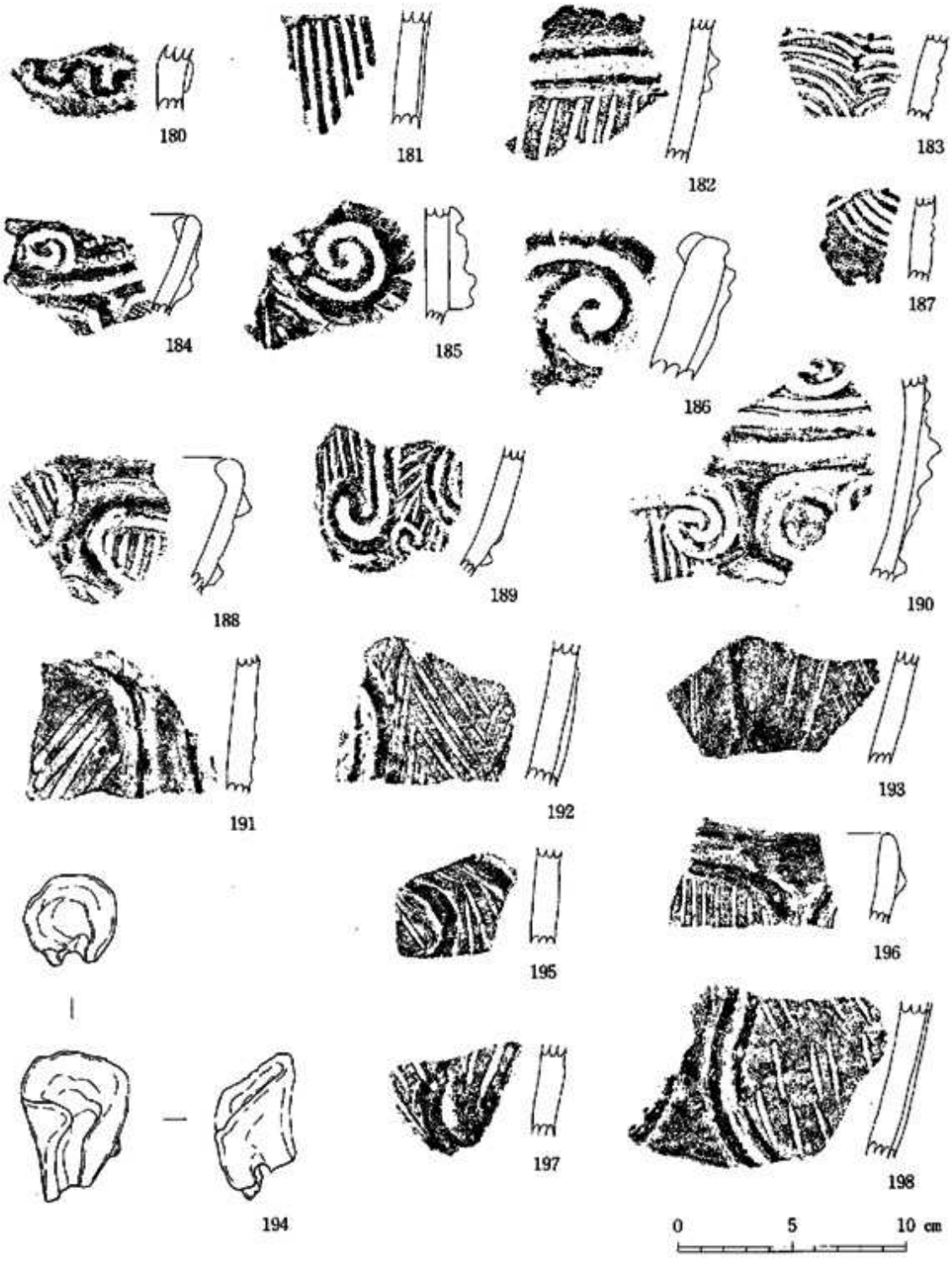
第38図　縄文土器拓影　(6)　第3号住居址：118～126，第5号住居址：127～129，第8号住居址：130～137



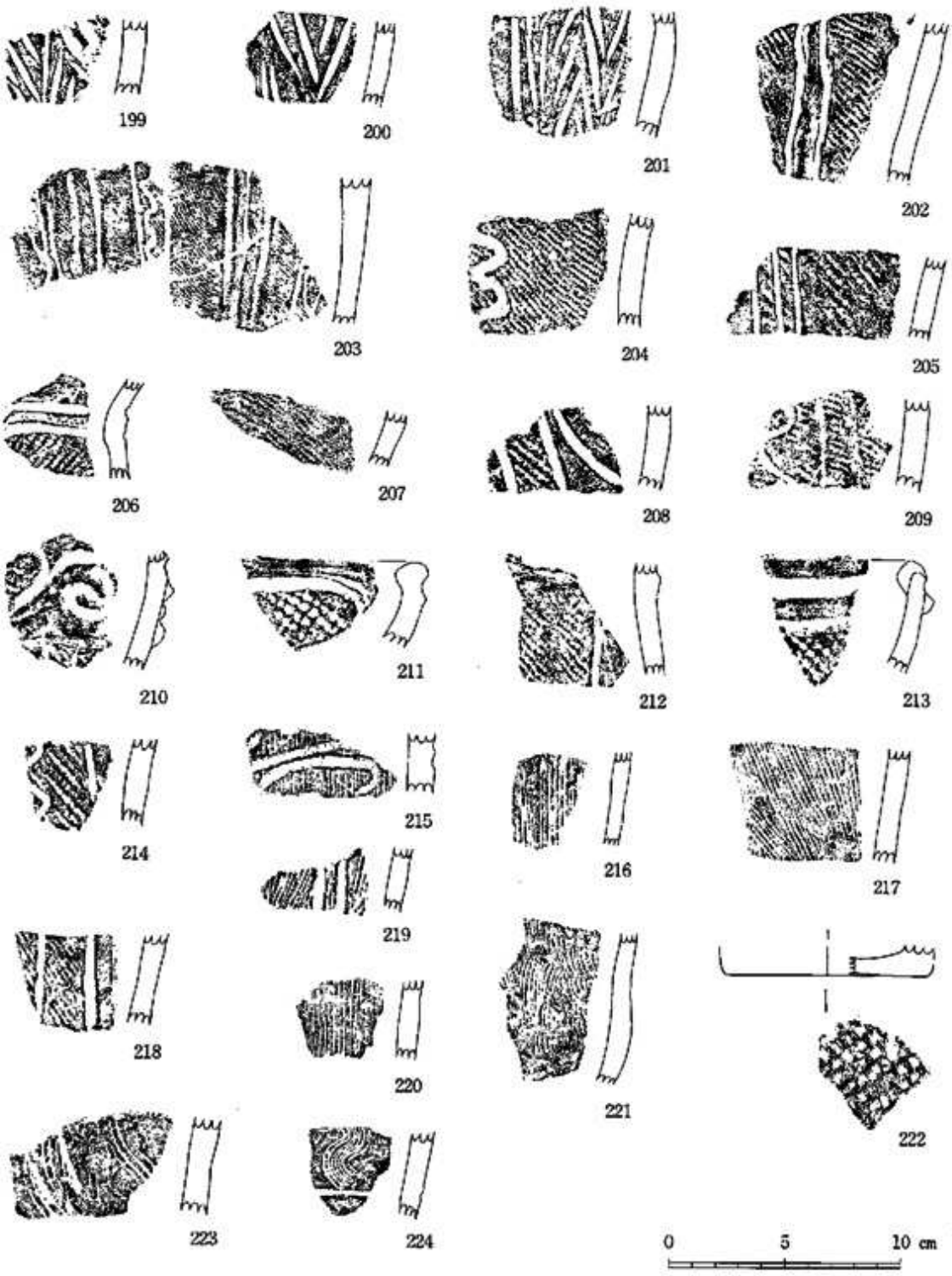
第39図　縄文土器拓影　(7)　第9号住居址



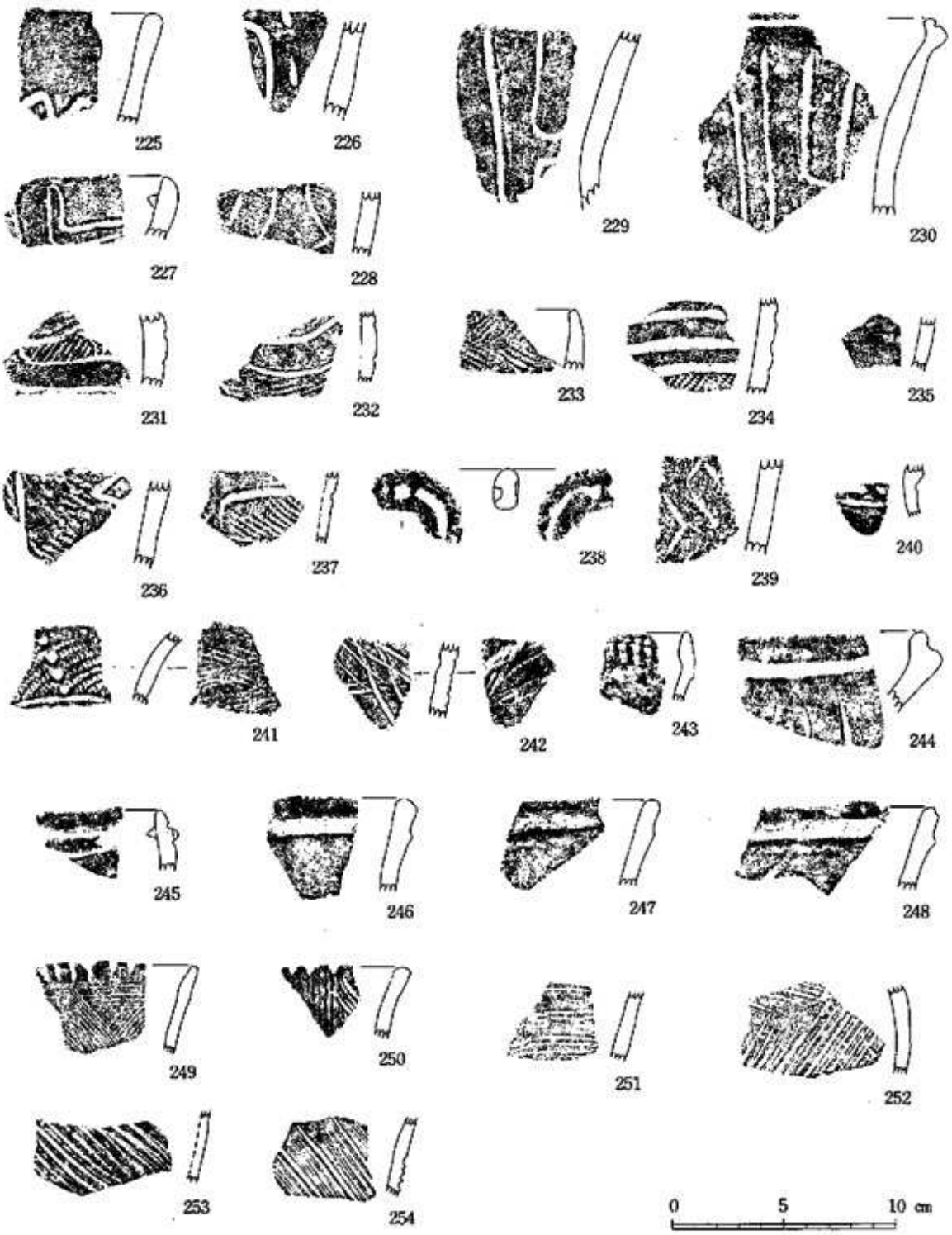
第40図　縄文土器拓影　(8)　第9号住居址：162～168，第10号住居址：169～172，第11号住居址：173～179



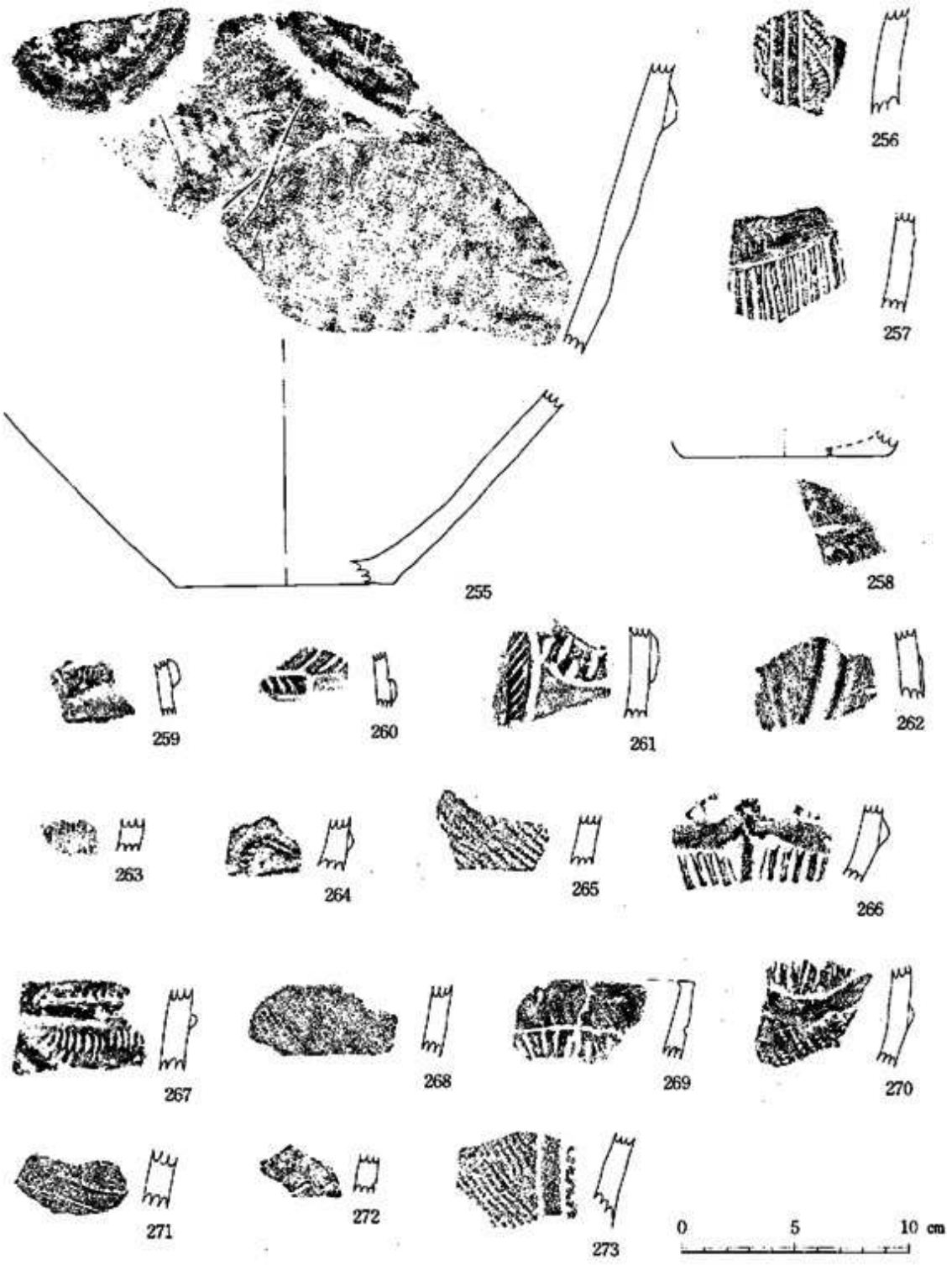
第41図　縄文土器拓影　(9)　第11号住居址



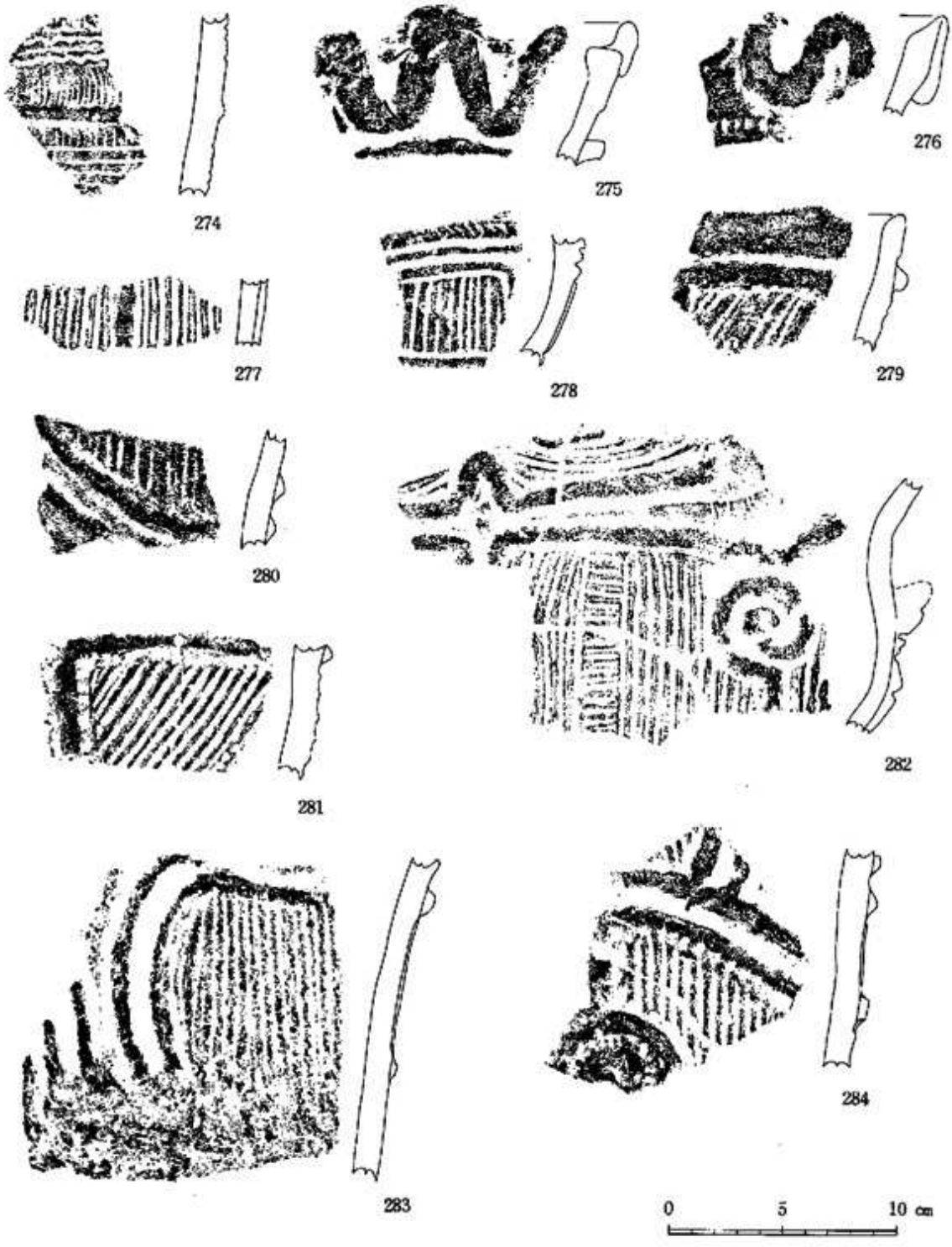
第42図　縄文土器拓影　(10)　第11号住居址



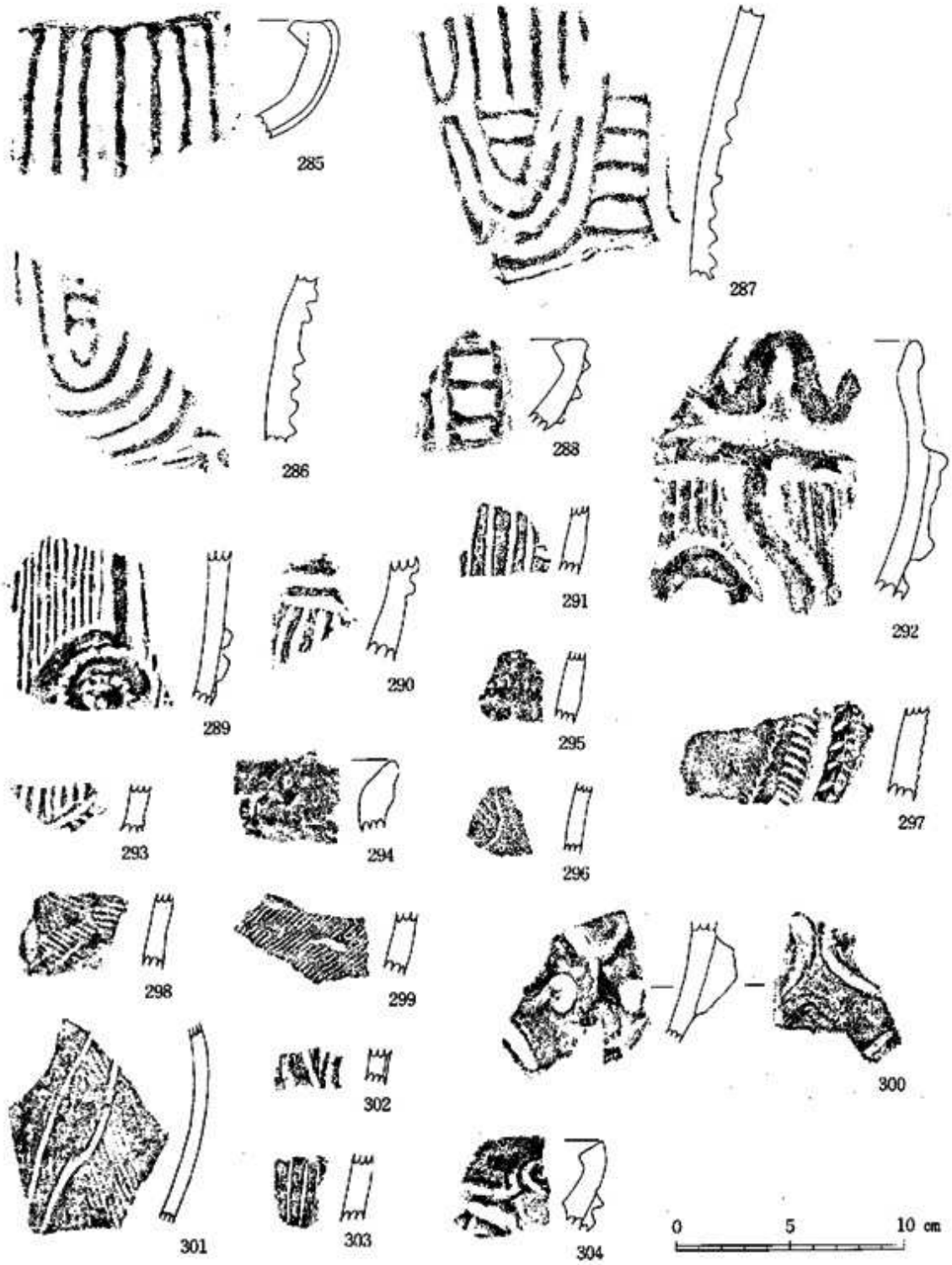
第43図　縄文土器拓影 (1)　第11号住居址



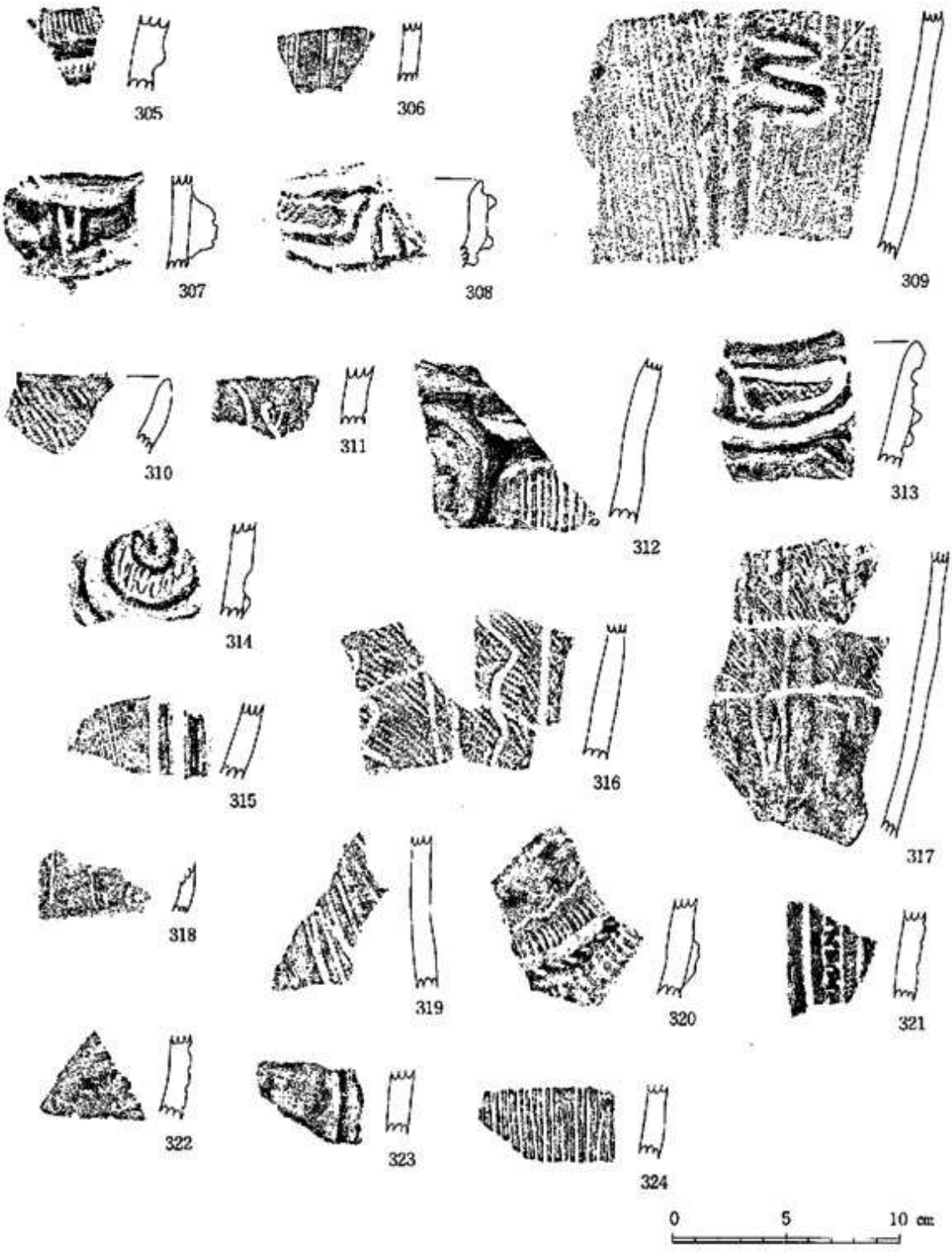
第44図　縄文土器拓影　(12)　土壙1：255～257，土壙14：258～262，土壙20：263～266，土壙26：267～271，土壙8：272，土壙10：273



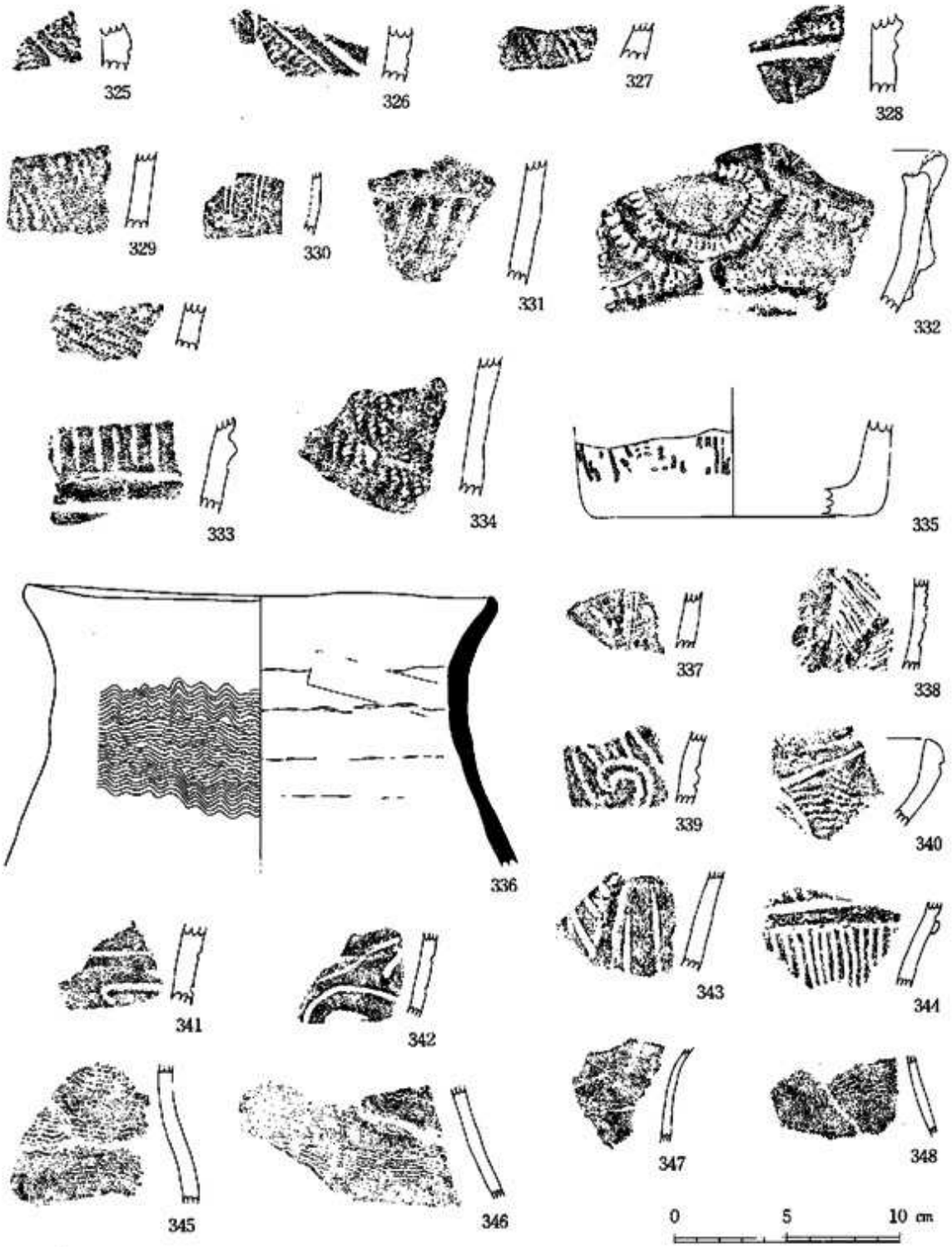
第45図　縄文土器拓影　(13)　土壌21



第46図　縄文土器拓影 (1/4)　十坑21：285～287，土坑28：288・291・292，土坑42：289・290，土坑44：293，土坑31：294～297，土坑37：298～300，土坑47：301～304

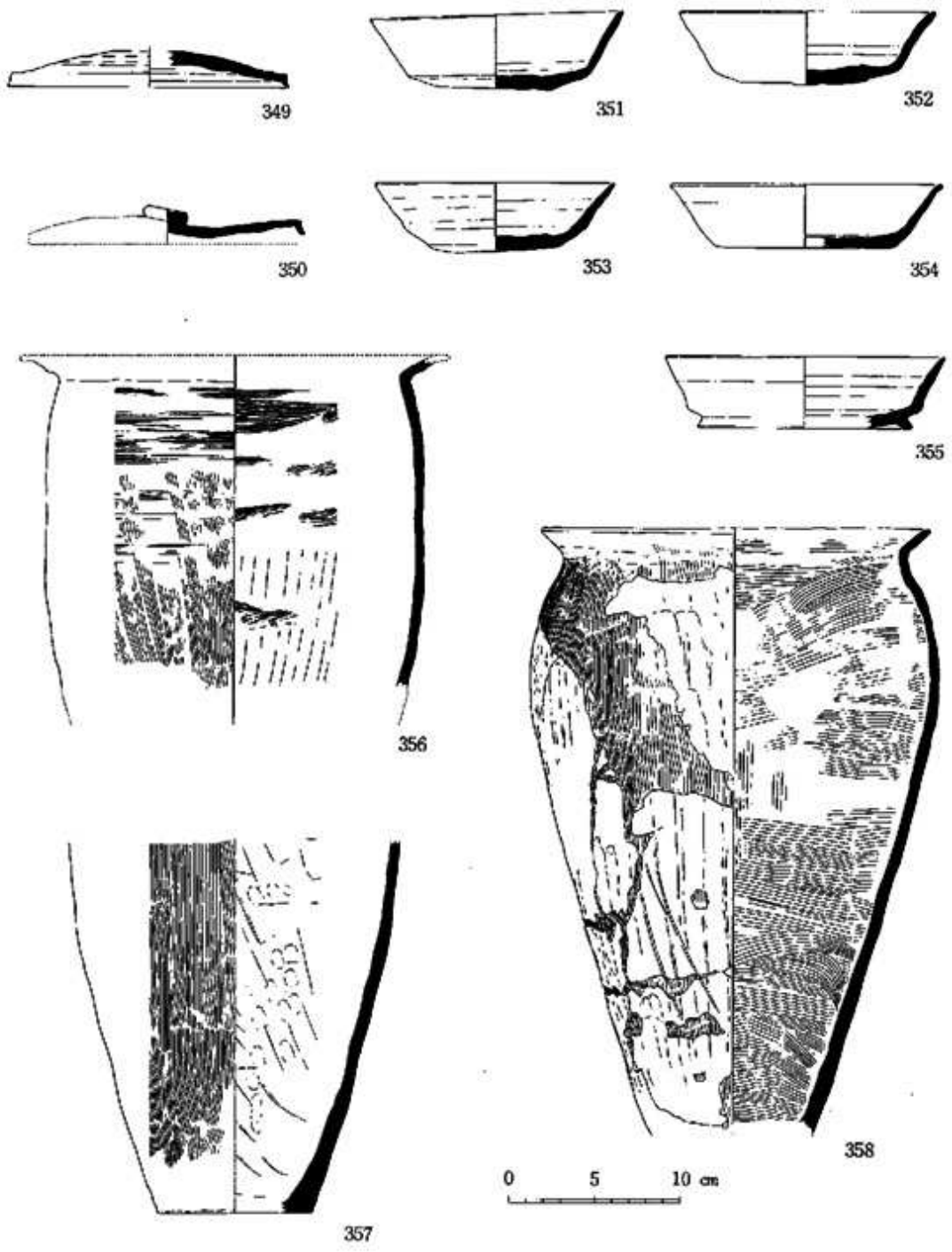


第47図　縄文土器拓影　(15)　上壙38：305～308，土壙45：309，土壙51：310～317，P 69：318，P 64：319，P 67：320，P 70：321～324

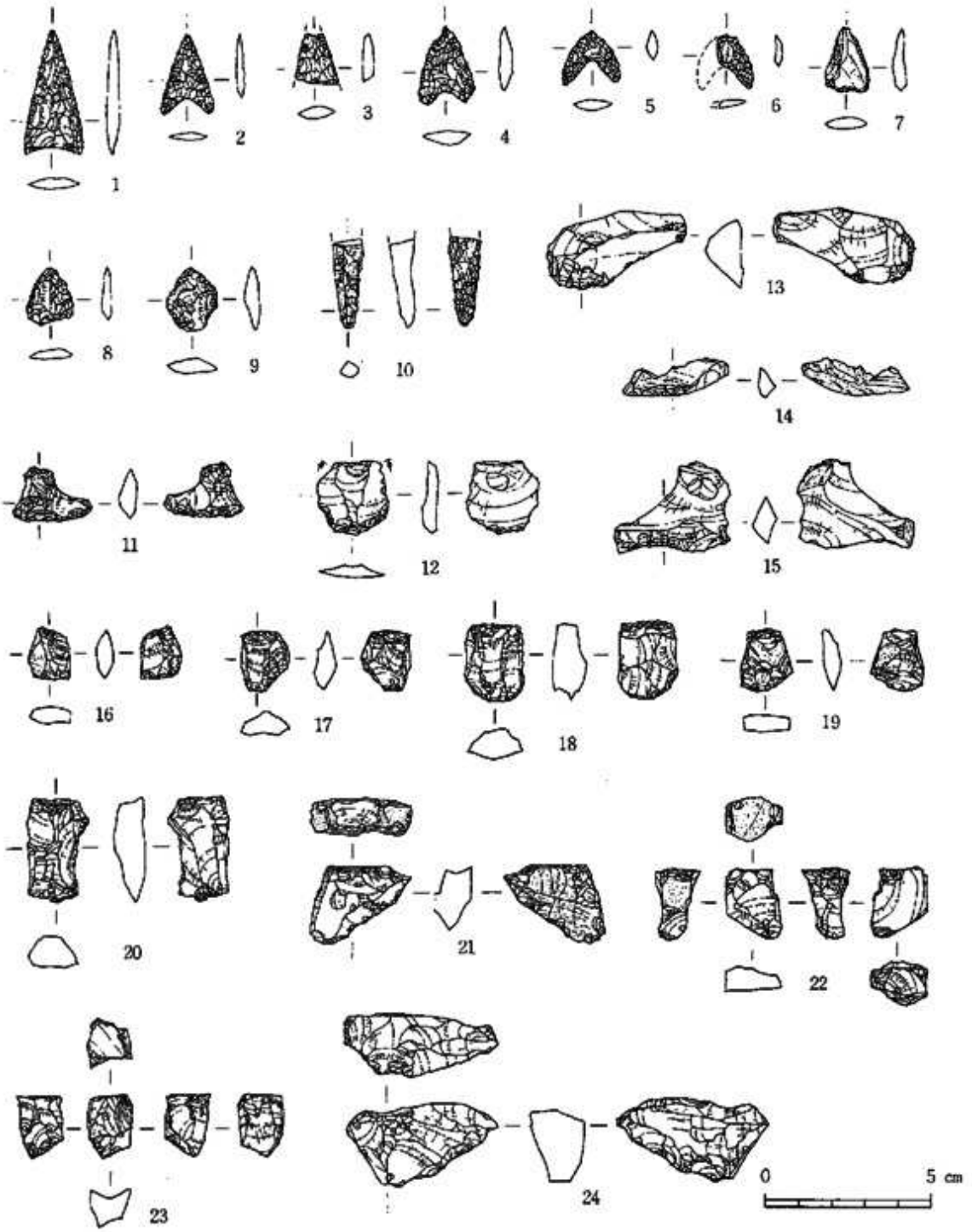


第48図　縄文土器拓影　(16)

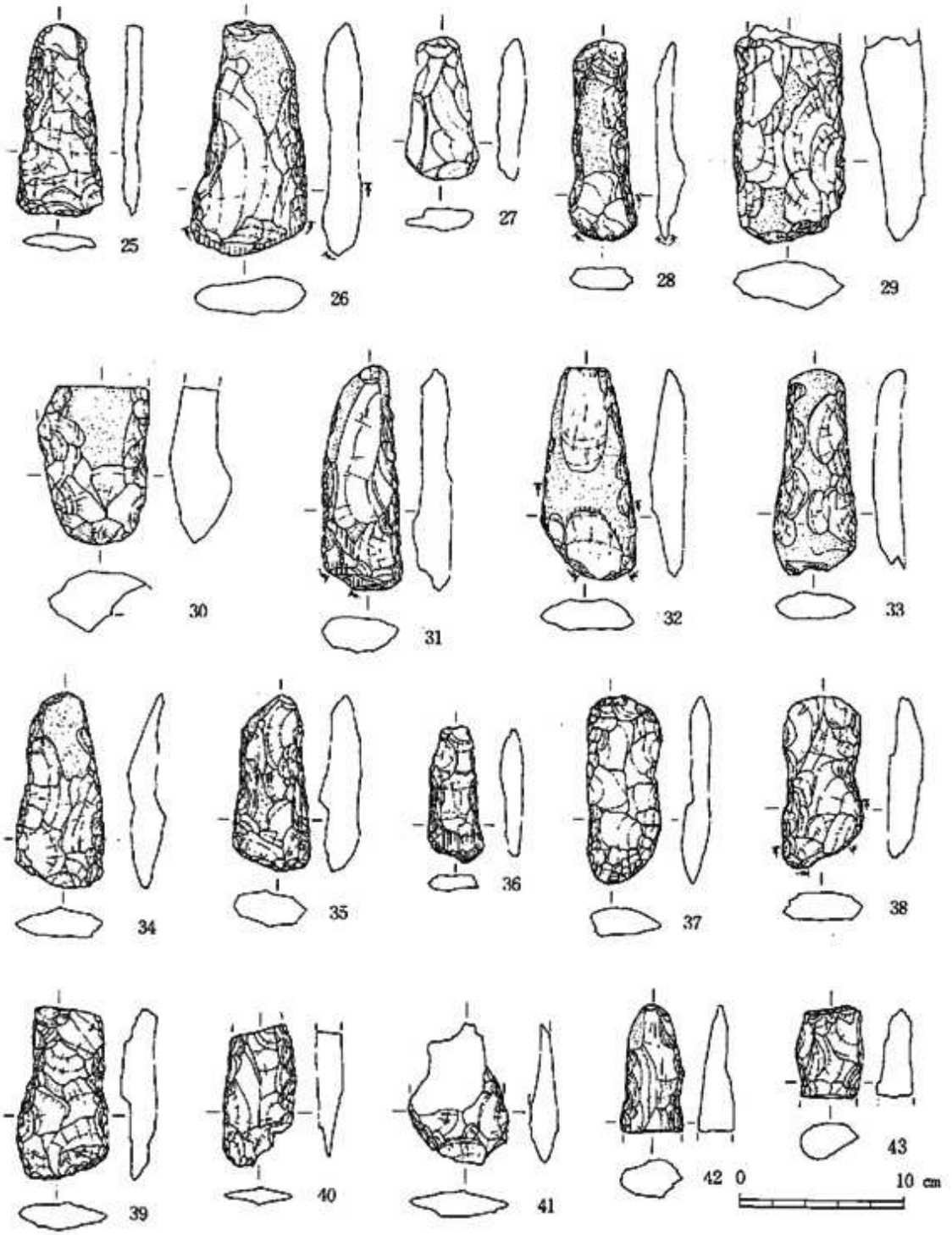
P 72：325·326，P 77：327·328，P 75：329，P 79：330，
P 87：331，P 90：332，P 88：333·334，P 87：335，
第4号住居址：336～348



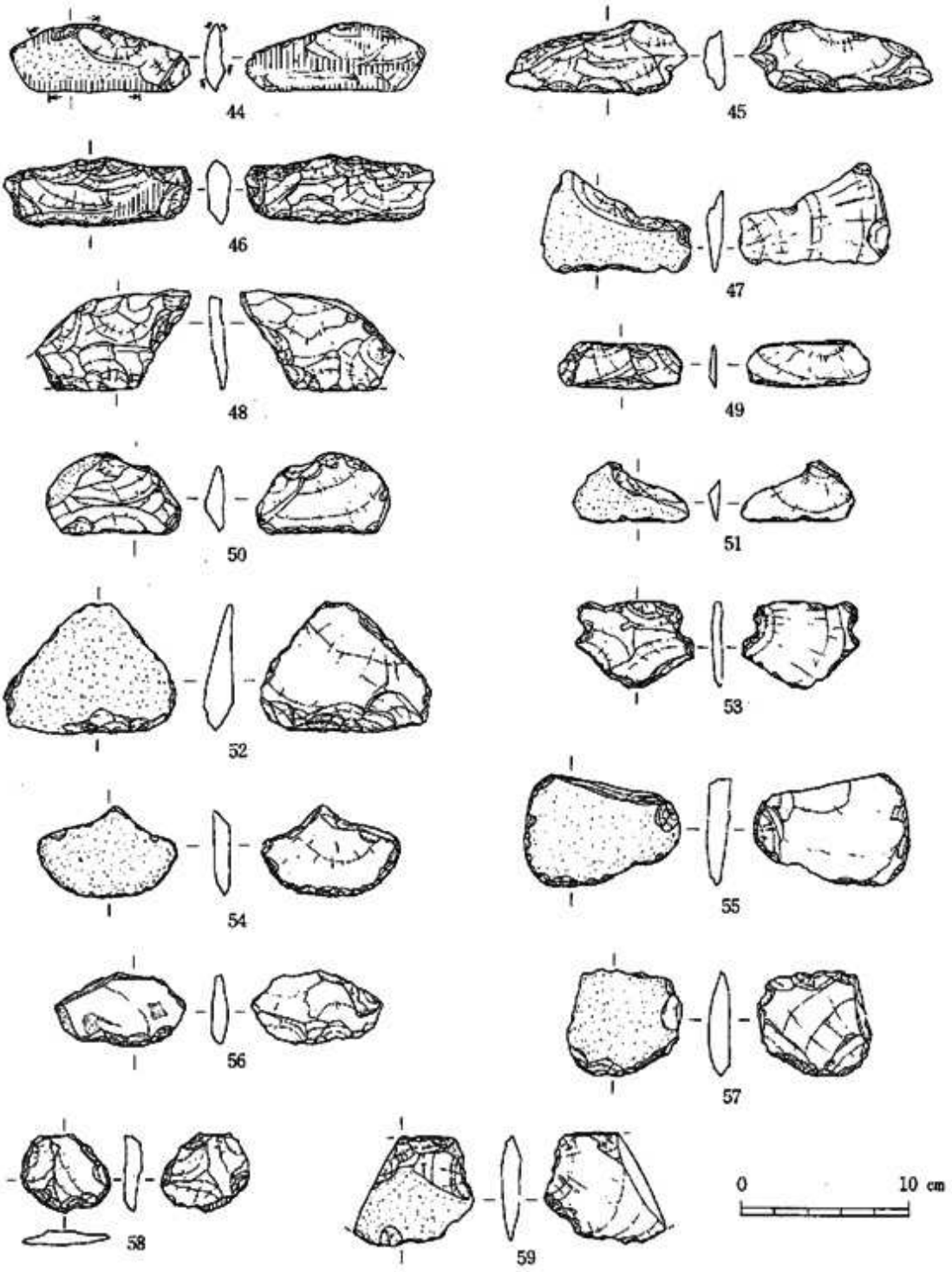
第49図　平安時代土器実測図　第6号住居址



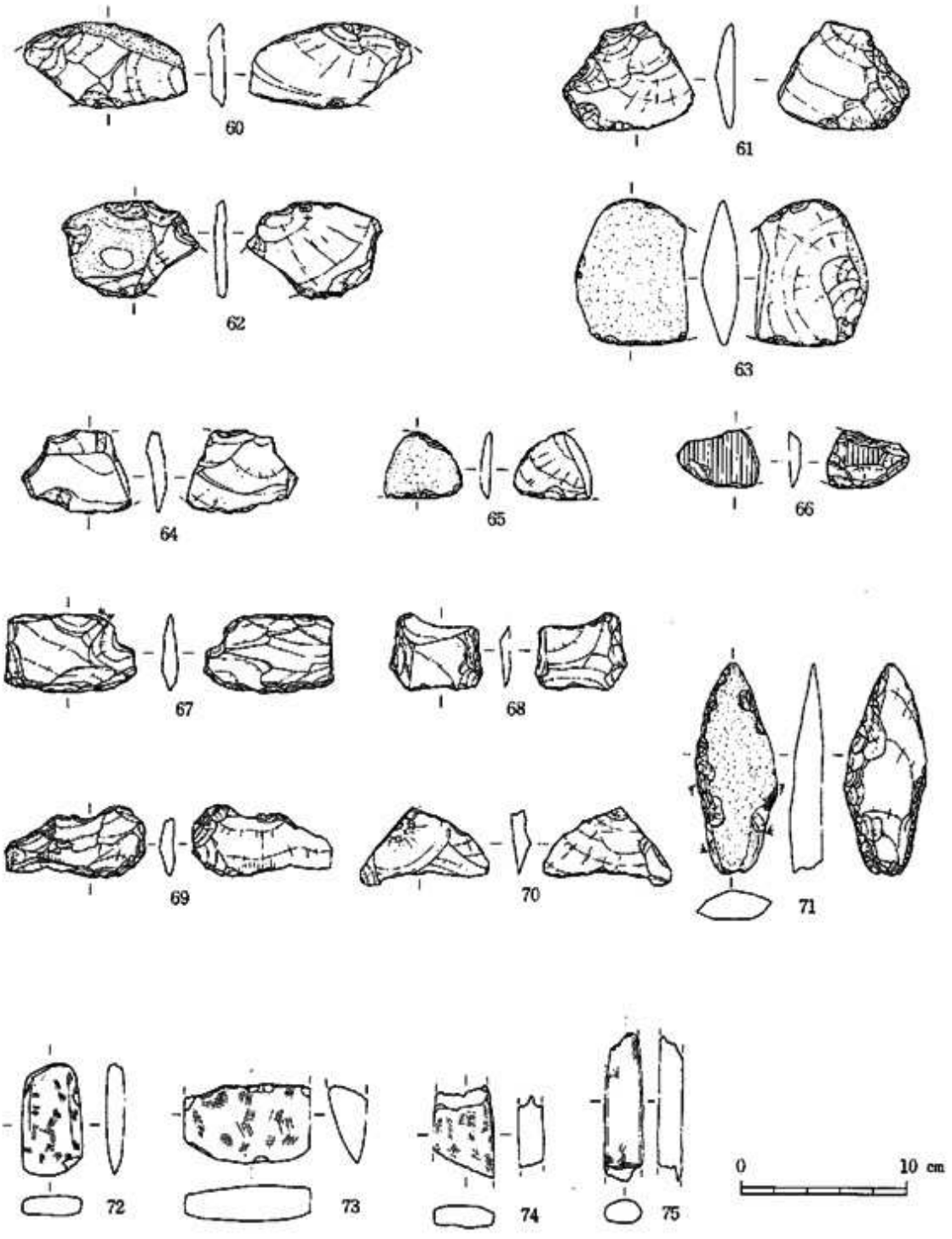
第50図　石器実測図（1）



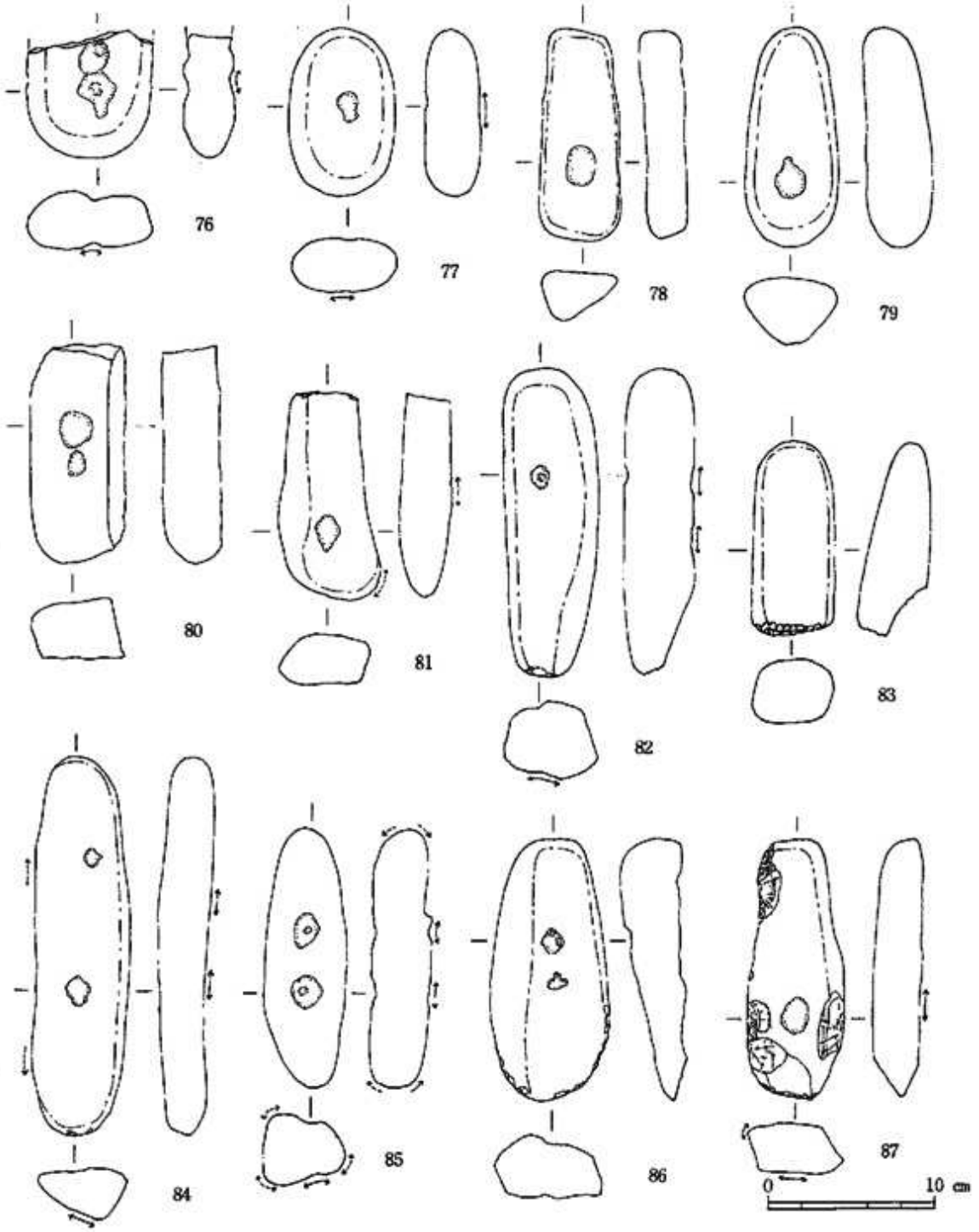
第51図　石器実測図 (2)



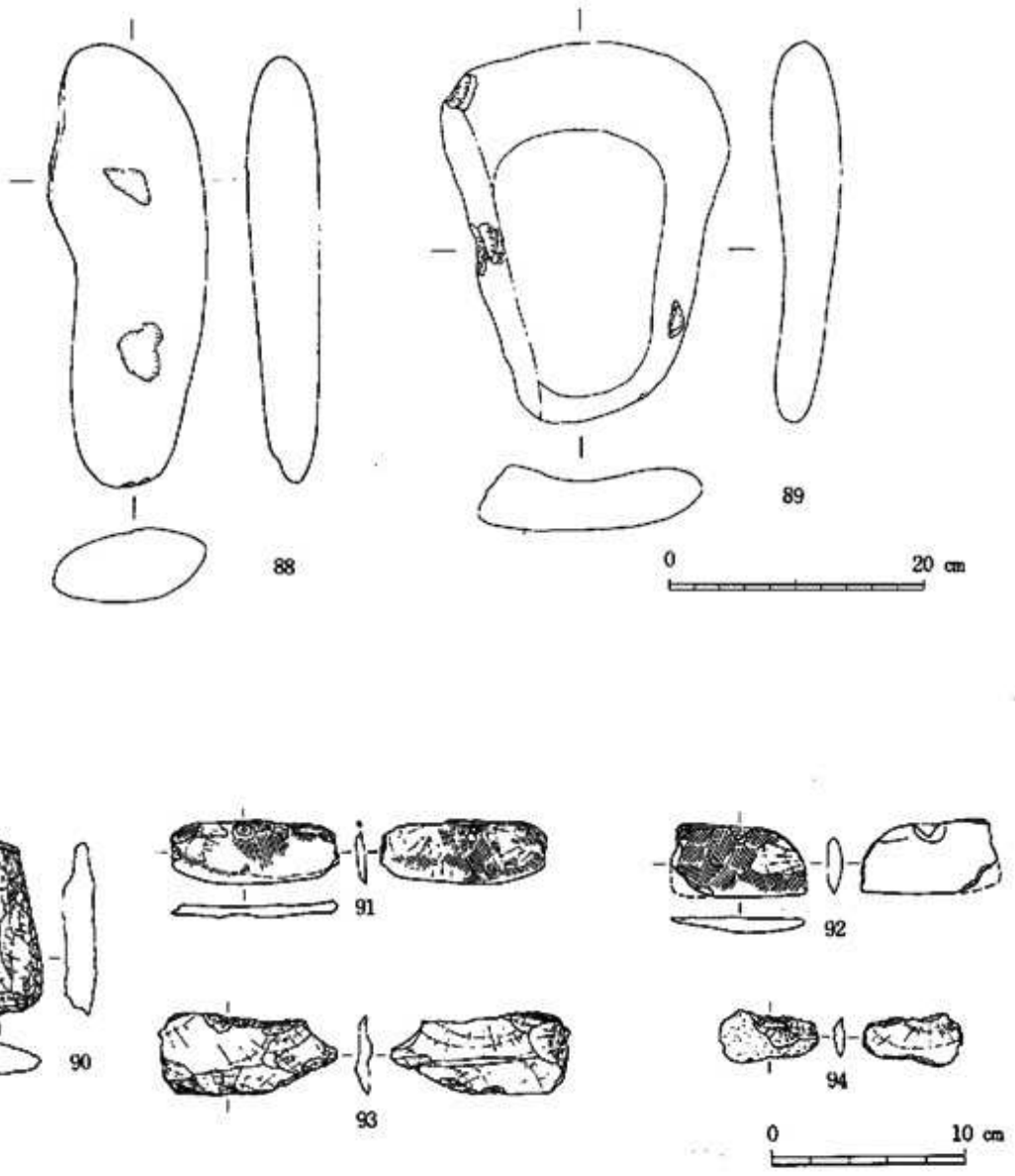
第52図　石器実測図 (3)



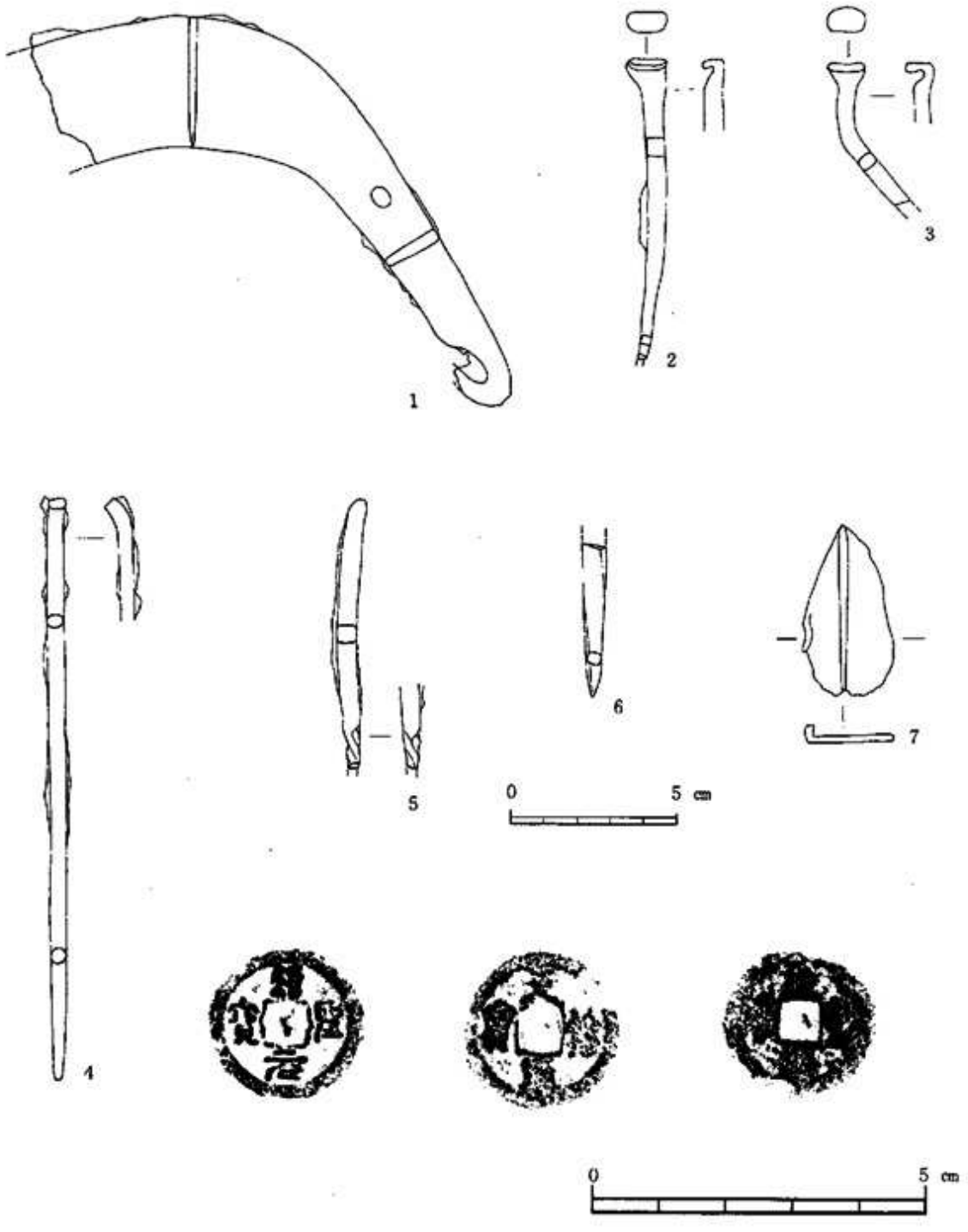
第53図　石器実測図（4）



第54図　石器実測図（5）



第55図　石器実測図 (6)



第56図　鉄器・鉄製品・銭

第1表　土壙一覧表

番号	遺構図	平面形 規模（cm）	断面形 深さ（cm）	覆土の特徴	出土遺物	備考
1		楕円形 80×70	台形 50	砂質，礫混入	255～257	第2号住居址を切る
2		楕円形 60×40	皿形 10			第2号住居址を切る
3	24	方形 110×110	長方形 35	ローム塊多量に混入		土壙4.5を切る
4	24	長方形 100×130	長方形 20	ローム塊多量に混入		土壙3に切られる 北辺にピット3ケ
5	24	円形 110×110	半円形 30	Ⅰ・Ⅱ層の境に集石 ローム塊，焼土混入	古銭8	土壙3に切られる
6	24	楕円形 70×45	台形 20	ローム塊混入		土壙7.10を切る
7	24	楕円形 (80)×40	半円形 20	小礫，ローム塊混入		土壙6に切られ，土壙8を切る
8	24	楕円形 80×45	半円形 25	砂礫質	272	土壙7に切られ，土壙10.11を切る
9	24	楕円形 130×60	半円形 30	少量の礫まじり		土壙3に切られる。土壙10を切る
10	24	(楕円形) (100)×(70)	半円形 20	集石あり，礫まじり	278	土壙8.9に切られ，土壙11を切る
11	24	隅丸長方形 (130)×85	半円形 20	集石あり		土壙8.9.10に切られる
12	23	長方形 160×235	長方形 50	ローム塊多量混入	釘3・鉄鏃4	
13	23	長方形 255×140	長方形 40	ローム塊多量混入		
14	23	隅丸長方形 100×165	長方形 40	砂質	258～262	
15		不整楕円形 110×50	不整形 15			第7号住居址と重複
16	23	角張る楕円形 120×160	長方形 20	ローム塊混入	鏃1	土壙18に切られる
17	22	(45)×75	皿形 15			土壙18に切られる
18	23	方形 120×115	長方形 30	ローム塊混入		
19	21	隅丸方形 60×60	半円形 30	土層に変化あり	石錐87	土壙16に切られる
20	21	円形 95×100	台形 15	大小礫あり 砂質土	263～266	第2号住居址と切り合い不明
21		(円形) (100)×(100)			多量の一括土器 35.274～287	土壙20.27の上部に存在
22	22	不整方形 190×190	長方形 15	砂質	古銭2枚9·10 石器83	中世？ 土壙34.35を切りその覆土中に床をつくる
23	23	不整長方形 170×(250)	長方形 35	礫まじり	鏃？7	
24	21	楕円形 95×80	台形 20	ローム塊・焼土粒あり 粗して砂質	多量の一括土器 27～32	北西隅に小ピット
25	23	長方形 155×90	長方形 20	ローム塊多量に混入		
26	21	角張る楕円形 115×95	不整な台形 55	ローム塊がまじる 粘性あり	上面から一括土器 37.267～271	西側壁上に焼土
27	21	円形？ (80)×(90)	台形 20			第2号住居址と前後関係不明
28	21	不整な楕円形 85×95	台形 30	粗して砂質	288.291.292	床面西に傾く 第2号住居址を切る

番号	遺構図	平面形 規模（cm）	断面形 深さ（cm）	覆土の特徴	出土遺物	備考
29	21	楕円形 45×65	長方形 30	砂質		
30	23	長方形 140×105	台形 10	砂質		
31	23	長方形 220×80	長方形 15	ローム塊多量に混入	294～297	
32	21	円形 100×110	台形 40	上面，上斜に多量の礫		
33		円形 90×(95)	段あり 85	ローム塊，焼土あり		
34	22	長方形 (60)×140	長方形 15	砂質		中世？　一部区域外にかかる 土壙22に切られる後上中に床をはられる 中世？
35	22	長方形 90×120	台形 30	ローム粒まじりの単層		
36		円形 85×80	長方形 10			
37		不整楕円形 90×115	不整，段あり 60	砂，後世人	298～300	
38	21	円形 95×95	台形 40	中層に礫	305～308	西端にピット
39	21	楕円形 85×50	台形 20			
40	21	くびれのある楕円 60×95	台形 15	砂礫質		
41	21	不整楕円 95×160	不整な長方形 30	砂礫質		西側に張り出し
42					289.290	第8号住居址炉址とする
43	22	角張る円形 70×70	長方形 20	大礫あり		
44		楕円形 40×64	一部袋状 64		298	第8号住居址を切る
45	22	不整円形 70×70	台形 60		縄文土器片 309，石皿 89	第8号住居址に貼られる
46	22	楕円形 70×50	台形 (60)	砂質		第8号住居址に貼られる
47	22	楕円形 60×75	段あり 20	大礫あり	301～304	西側にピット
48		不整形 (70)×115	台形 10			不明瞭な遺構
49		不整形 (50)×55	台形 5			不明瞭な遺構
50	22	？ 100×(60)	半円形 50	砂質，焼土あり	土器片多数 86	半分区域外にかかる
51	22	楕円形 80×45	皿形 10	砂礫質	310～317	
52	22	楕円形 85×50	台形 20	砂質		
53	22	楕円形 70×80	台形 20	砂礫質		
54	22	円形 60×55	一部袋状 40	砂礫質		
55	22	隅丸方形 90×85	台形 10	礫まじり		
56	22	隅丸方形 60×70	皿形 10	砂礫質		
57	22	楕円形 70×45	半円形 25	砂質		

第2表　実測土器一覧表

図番号	出土地点	胎土	成形 手法	成形 器形	計測 口径(cm)	計測 底径(cm)	計測 器高(cm)	整形 内面調整	施文 文様帯	施文 単位	施文 文様	焼成 色調	備考
1	1住	赤・灰色微粒中量 黄細粒少量	輪 段不明	深鉢 D_1	33.2	—	(35.2)	ヨコナデ	3段	4	条線（左回りに縦・横の順）→隆線および爪巻貼付け→隆線脇沈線または押引文	褐色	胴～底½欠 Ⅱ期
2	〃	赤・白色微粒中量 金細粒少量	輪 3cm8段以上	〃 〃	18.4	—	(24.4)	ヨコナデ 口縁外面ヨコミガキ	〃	4	縦帯→横位の条線→隆帯脇沈線	暗褐色	胴下半½欠 〃
3	〃	黄・金微粒中量 赤・白色細粒少量	輪 3cm6段以上	〃 C_{or2}	—	7.2	(30.1)	ヨコ・ナナメナデ 底部外面ヘラケズリ	2段以上	4	隆線および「コ」状貼意→隆線脇押引文→条線	赤褐色 内面暗褐色	口縁欠 〃
4	〃	金細粒・黒黄微粒中量	輪 2cm12段	〃 D_2	20.0	9.5	34.0	ヨコナデ ナナメナデ	2段	2	隆線→隆線脇なぞり→条線	暗褐色	完 〃
5	〃	赤・灰色微粒多量 黄細粒少量	輪 2.5cm7段以上	〃 D_4	—	—	(17.2)	ヨコナデ	2段以上	2	縄文（R/L）→沈線→条痕	褐色 内面暗褐色	胴残 〃
6	〃	金・黄細粒中量 黒・赤色微粒少量	輪 2.5cm4段以上	〃 E	28.6	—	(10.6)	〃	〃	4	沈線→突起部縄線貼付→押引文	暗褐色	口縁部残 〃
7	〃	黄細粒多量 灰色粗粒少量	輪 3cm4段以上	〃	—	—	(12.0)	〃	〃	(4)	隆線およびメガネ状突起→隆線脇沈線または押引文	褐色 暗褐色	頸残 〃
8	〃	赤・黒色細粒少量	輪 3cm4段以上	鉢	25.0	—	(9.0)	ヨコナデ 口縁外面ヨコミガキ	3段以上	4	隆線→沈線→刺突 口縁端部沈線	赤褐色	口縁赤色塗彩 胴以下欠 〃
9	〃	灰・赤・黄色細粒多量	輪 3cm8段	壺	17.4	—	(22.8)	ヨコナデ	3段	—	隆線→沈線→隆線脇なぞり	黄褐色 内面黄灰色	底欠 〃
10	〃	赤色微粒中量 金・黄細粒少量	輪 3段	ミニチュア	6.0	4.0	7.0	〃	1段	0		暗褐色	口縁部外方より2ヶ所穿孔 完
11	2住	赤・黄・灰色細粒多量	輪 段不明	深鉢 C_1	19.0	7.5	25.1	ヨコナデ ナナメナデ	2段	0	太沈線により凸起線描出→一部隆起線上に押引文	黄褐色	完 Ⅱ期
12	〃	灰・黒色細粒多量 赤色細粒少量	輪 2cm3段以上	〃 〃	16.2	—	(6.0)	ヨコナデ	2段以上	—	隆線	灰褐色 内面暗灰色	胴以下欠 〃
13	〃	赤色細粒中量 黒・金微粒多量	輪 2cm3段以上	〃 C_2	19.4	—	(6.0)	ヨコナデ，口縁外面 ヨコ・タテミガキ	〃	—		赤褐色	胴以下欠 〃
14	〃	灰・黒色細粒中量 金黒・黄微粒少量	輪 2cm5段以上	〃 D_2	19.2	—	(9.2)	ヨコナデ	〃	—	隆線→隆線貼押引文→沈線	灰褐色	胴以下欠 〃
15	〃	金・黄細粒中量 赤・白色細粒少量	輪 4～5cm12段	〃 C_1	47.2	12.0	57.2	〃	3段	2	隆線および爪巻状突起→条線→爪巻貼付	黄褐色	完 〃
16	〃	金・黄・赤色微粒 灰色細粒中量	輪 3cm8段	〃 D_4	22.0	5.8	23.5	〃	〃	4	爪巻状突起→縄文（R/L）→隆線→沈線	赤褐色 内面暗褐色	完 Ⅱ or Ⅰ期
17	〃	白色・黄細粒中量	輪 4cm4段以上	〃 E	35.1	—	(18.2)	〃	1段	4	隆線→隆線脇押引→隆線区画内沈線	赤褐色	胴下半欠 Ⅱ期
18	〃			台付	—	8.6	(6.6)		—	—			台部残 〃
19	〃	金雲粒多量 黄細粒少量	輪 段不明	浅鉢 A	46.6	6.2	18.0	ヨコナデ 口縁外面ヨコミガキ	2段	4	メガネ状突起→隆線	茶褐色	完 〃

図番号	出土地点	胎土	成形 手法	成形 器形	計測 口径(cm)	計測 残存(cm)	計測 器高(cm)	整形 内面調整	施文 文様帯	施文 単位	施文 文様	焼成 色調	備考	
20	2 住	白・灰・赤色細粒中量	輪 段不明	浅鉢 B	26.4	7.1	13.0	ヨコミガキ ヨコナデ	2 段	4	隆帯→沈線	黄褐色	完	8 期
21	3 住	黒色粗粒少量 黄・白色細粒中量	輪 3.5cm 8 段	深鉢 D_4	28.4	—	(25.6)	ヨコナデ	3 段	4	縄文($\frac{L}{R}$)→隆線→隆線間押引→隆線脇沈線→沈線	褐色	胴下半 $\frac{1}{2}$ 欠	I 期
22	〃	金・黄細粒多量 赤色微粒少量	輪 段不明	〃	—	—	(18.7)	〃	—	—	変手組隆帯→隆線→沈線および刺突	暗褐色	突手部残	〃
23	8 住	白・灰色細粒少量	輪 段不明	〃 P	34.1	18.4	45.2	〃	2 段	4	隆線→貝殻文→隆線脇沈線	灰褐色	完	II 期
24	〃	灰・黒色細粒・黄微粒中量	輪 段不明	〃 D_4	—	8.6	(25.7)	ナナメナデ	2段以上	7	縄文($\frac{L}{R}$)→沈線→沈線間磨消	黒褐色	口縁欠	〃
25	12 住	黄・白細粒多量 黒色細粒少量	輪 3cm 7 段	〃 A_2	19.8	(9.8)	(28.2)	ヨコナデ	3 段	—	隆線→半截竹管により隆起線描出→隆線および隆起線上刺突→区画内沈線	赤褐色	完	V 期
26	〃	黄色細粒多量 赤色細粒少量	輪 段不明	〃 A_1	—	—	(13.5)	〃	1段以上	2	隆線→隆線上刺突→沈線→隆線・沈線間連続爪形文	赤褐色	胴残	〃
27	24土坑	金・長細粒中量	輪 4cm 3 段以上	〃 B	37.0	—	(13.8)	〃	2段以上	4	隆線→隆線上指頭痕→沈線および押引沈線	褐色 暗褐色	胴以下欠	新期
28	〃	黄色細粒中量 長微粒少量	輪 段不明	〃 A_1	33.8	—	(29.4)	ヨコナデ 外面ヨコミガキ ↓ タテナデ	2 段	0	隆線→隆線上指頭痕	暗褐色 茶褐色	胴下半欠	〃
29	〃	黄・長・金細粒中量 黄色粗粒少量	輪 段不明	〃 B	—	18.6	(31.0)	ヨコナデ タテナデ	1段以上	—	沈線	茶褐色 褐色	口縁～胴上欠	〃
30	〃	白色細粒少量 黄・長微粒少量	輪 段不明	〃 A_1	22.8	—	(15.6)	ヨコナデ	1 段	1	縄文($\frac{R}{L}$)	暗褐色	胴下半欠	〃
31	〃	黄・黒色細粒中量 金微粒少量	輪 段不明	〃 A_1	20.8	11.2	26.0	〃	〃	1	縄文(L)→($\frac{R}{L}$)	暗褐色 赤褐色	完	〃
32	〃	黄・金細粒多量	輪 段不明	浅鉢	38.4	9.2	12.7	ヨコナデ 胴外面ナナメナデ	0	4		赤褐色 内面黄灰色	完	〃
33	14 住	金・黄細粒多量	輪 段不明	深鉢 D_3	43.2	—	(26.0)	ヨコナデ	3 段	4	直弧沈線→隆線(懸垂・区画・懸垂)→隆線間縦沈線→区画内沈線および条線	暗褐色	胴下半欠	I 期
34	〃	黄色細粒少量 黒色細粒多量	輪 3cm 2 段以上	〃	—	7.8	(6.4)	不明	—	—		褐色 内面黒色	胴下半残	
35	21土坑	灰色細粒多量 黄細粒少量	輪 4cm 7 段以上	鉢	—	11.2	(23.0)	ヨコナデ	1段以上	1	縄文($\frac{R}{L}$)	灰褐色	口縁欠	II 期
36	50土坑	黄細粒中量 金微粒多量	輪 段不明	〃	—	11.2	(26.6)	ヨコナデ ナナメナデ	1段以上	—	太沈線→区画内沈線	褐色	〃	〃
37	26土坑	灰色微粒少量	輪 段不明	深鉢 A_1	14.4	7.5	15.4	ヨコミガキ ナナメナデ	0	0		灰褐色	完	後期
38	61ピット	灰・黒色細粒多量 赤色微粒中量	輪 1.5cm 6 段以上	〃	—	7.4	(11.4)	不明	1段以上	1	縄文(L)	褐色	口縁欠	
39	遺構外	灰色細粒中量 白色細粒少量	手	ミニチュア	5.2	3.8	6.8	〃	1 段	1	細沈線	黄灰色	完	

第3表　石器一覧表

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	欠損状況	備考
1	2住 No.3	石錐	3.8	1.7	0.8	2.28	チャート		製図状録
2	9住 No.1	〃	2.4	1.5	0.2	0.57	黒曜石		
3	1住 No.30	〃	(1.6)	(1.8)	0.35	0.80	チャート	頭・調節部	製図状録
4	2住 No.2	〃	2.3	1.5	0.35	1.14	黒曜石		
5	11住 No.1	〃	1.55	1.7	0.35	0.56	〃		
6	8住 フク土	〃	1.6	(0.95)	0.15	0.31	〃	半身	
7	2住 No.6	〃	1.95	1.8	0.3	0.85	〃		
8	排土中	〃	1.75	1.35	0.25	0.68	〃		
9	竪穴1	〃	2.2	1.5	0.4	1.13	〃		
10	2住	石錐	(2.7)	0.95	0.75	1.56	〃	つまみ部?	
11	11住 No.2	スクレイパー	2.3	1.55	0.5	1.48	〃		小型石匙
12	5住 フ	〃	2.25	2.15	0.4	2.17	〃		
13	P67	〃	2.3	4.2	1.25	8.96	〃		
14	4住 P2	〃	1.15	3.2	0.65	1.59	〃		
15	2住 フ	〃	2.7	3.4	0.65	5.38	〃		
16	11住 フ	楔形石器	1.6	1.2	0.5	1.14	〃		
17	11住 フ	〃	1.8	1.5	0.75	1.91	〃		
18	4住 フ	〃	2.35	1.75	1.0	4.66	〃		
19	2住 No.5	〃	1.9	1.55	0.5	1.90	〃		
20	5住 フ	〃	3.15	1.8	0.9	4.88	〃		
21	11住 フ	石核	2.35	3.05	1.0	6.82	〃		
22	11住 フ	〃	2.1	1.7	1.05	4.05	〃		
23	2住 フ	〃	1.9	1.3	1.0	3.33	〃		
24	2住 フ	〃	2.55	4.55	1.65	16.42	〃		
25	1住 No.31	打製石斧	11.6	5.2	1.0	81	粘板岩		
26	1住 No.7	〃	14.1	6.9	2.1	340	〃		刃部使用痕あり
27	11住 フク上	〃	8.7	4.4	1.5	67.8	粘板岩(砂質)		
28	竪穴1	〃	12.1	4.0	1.6	90	粘板岩		刃端部使用痕あり
29	1住 No.3	〃	(12.4)	8.9	3.6	380	〃	頭部	
30	6住 フ	〃	(9.7)	(7.7)	3.7	268	砂岩	頭～胴部	
31	2住 No.10	〃	13.5	4.9	2.2	185	粘板岩		刃部使用痕有り
32	11住 フ	〃	12.9	5.7	2.1	185	粘板岩(砂質)		刃端部使用痕有り
33	P93	〃	12.0	5.0	1.5	147	〃(〃)		
34	竪穴1	〃	11.9	5.3	1.8	126	〃(〃)		
35	1住 No.3	〃	15.7	4.4	2.3	146	〃(〃)		
36	土23	〃	8.3	3.4	1.3	43	〃(〃)		刃部使用痕有り
37	11住 No.3	〃	11.4	4.5	1.6	108	粘板岩		
38	11住 No.5	〃	10.4	4.9	1.9	133	〃		刃端部使用痕有り

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	欠損状況	備考
39	竪穴 2	打製石斧	10.4	5.5	2.0	141	粘板岩		
40	11住 〃	〃	(8.7)	4.4	1.6	67	粘板岩(砂質)	頭部	
41	1住 P7	〃	(8.5)	(6.1)	(1.7)	71	〃 (〃)	頭~刃部	
42	排土中	〃	(7.7)	3.7	2.1	69	〃 (〃)	刃部	
43	3住 炉	〃	(5.6)	(4.1)	(2.2)	56	〃 (〃)	刃~刃部	
44	十 壙 30	横刃形石器	10.6	4.0	1.7	69	〃 (〃)		刃・背部使用痕多し
45	2住 No.7	〃	4.3	10.6	1.1	54	〃 (〃)		
46	竪穴 1	〃	4.1	11.0	1.4	77.7	〃 (〃)		使用痕あり
47	P93	〃	10	8.9	0.8	50	粘板岩		
48	1住 〃	〃	(9.2)	6.0	1.0	61	粘板岩(砂質)	刃端	
49	竪穴 2	〃	2.7	7.2	0.4	11.8	〃 (〃)		背部磨耗
50	11 住	〃	7.9	4.9	1.3	61	〃 (〃)		
51	1住 〃	〃	6.7	3.6	0.6	14	〃 (〃)		
52	1住 〃	〃	10.1	7.7	1.6	115	〃 (〃)		
53	3住 No.8	〃	6.9	5.2	0.7	31	〃 (〃)		挟入あり
54	2住 No.21	〃	8.2	5.4	1.0	59	砂岩		
55	1住 〃	〃	9.3	6.6	1.5	116	〃		打製石斧か
56	3住 No.6	〃	7.7	4.4	1.0	38	〃		
57	6住 東	〃	6.8	6.2	1.2	71	粘板岩		
58	1住 P8	〃	5.2	4.7	0.8	25	粘板岩(砂質)		刃部使用痕有り
59	3住 炉内	〃	(7.2)	6.5	1.0	53	砂岩	刃・背半	
60	1住 No.6	〃	(9.8)	5.2	1.0	59	粘板岩(砂質)	刃端部	
61	P71	〃	7.9	6.6	1.2	59	粘板岩		
62	P94	〃	(8.6)	5.9	0.6	37	粘板岩(砂質)	刃端部	
63	1住 〃	〃	(6.7)	8.7	2.4	158	砂岩	刃~身半	
64	竪穴 1	〃	(6.5)	4.9	1.0	36	粘板岩(砂質)	〃	
65	2住 7	〃	(4.7)	(4.0)	(0.5)	15	粘板岩	〃	
66	11 住	〃	(3.4)	(4.9)	(0.6)	18.7	粘板岩(砂質)	〃	器面全体使用痕有り
67	6住 No.8	〃	(7.8)	4.7	1.0	50	粘板岩(千枚質)		刃・背部の区別難
68	P26	〃	5.5	4.6	0.8	22	粘板岩(砂質)		
69	5住 P5	〃	8.4	4.8	0.9	84	〃		
70	1住 〃	〃	7.7	4.7	0.9	28	砂岩		
71	1住 No.4	石錐	12.7	4.7	1.9	189.4	緑色凝灰岩		
72	竪穴 1	磨製石斧	6.7	3.6	1.0	51.3	蛇紋岩		定角式石斧
73	2住 No.1	〃	(4.8)	(7.7)	(2.1)	125.9	〃	頭~刃部	〃
74	1住 No.8	〃	(5.6)	3.6	(1.8)	46.2	〃	頭・刃部	〃
75	7住 フク	石剣	(8.9)	2.3	(1.5)	49.6	砂岩	鏃・先端部	
76	6 住	凹石	(7.7)	7.5	3.4	254	安山岩	半欠	磨石
77	P93	〃	10.2	6.4	8.4	885	砂岩		

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	欠損状況	備考
78	1住 P3	凹石	12.8	4.9	3.1	282	砂岩		
79	1住 No.29	〃	13.8	5.6	3.8	385	〃		
80	土 30	〃	(13.2)	5.8	3.6	510	〃		
81	1 生	〃	12.6	3.2	3.2	345	〃		
82	8住 2	〃	13.7	5.8	4.5	800	緑色凝灰岩		
83	土壙 22	敲打器	(11.8)	4.3	3.9	340	石英閃緑岩		
84	竪穴 1	〃	22.9	5.9	3.4	665	緑色凝灰岩		
85	竪穴 1	〃	15.7	5.0	4.7	440	砂岩		
86	1住 No.4	〃	15.9	7.2	4.0	520	安山岩		
87	土壙 19	〃	19.6	5.8	2.9	400	粘板岩(砂質)		
88	8住 No.8	凹石	34.8	12.4	5.4	3220	硬砂岩		
89	土壙15 No.8	石錘	29.9	23.5	5.3	4790	〃		
90	4生 No.3	打製石斧	6.1	4.7	1.6	83	粘板岩(砂質)		
91	4住 No.2	石鏃 丁	3.7	3.2	0.6	26	緑色凝灰岩		
92	4住 No.1	〃	6.9	3.9	0.7	24	粘板岩(砂質)		
93	4住 No.4	横刃型石器	9.3	4.2	0.7	36	粘板岩		
94	4住 ソ	〃	5.1	2.7	0.5	8	粘板岩(砂質)		

第4表　鉄製品一覧表

No.	出土地点	製品名	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		備考
1	土壙 16	鏃	20.5	4.0	0.2	67.5		刃部欠損
2	5住 ヲ	釘	9.1	0.5	0.5	12.0		幹部先端欠損
3	土壙 12	〃	5.6	0.5	0.4	5.8		幹部先端欠損
4	〃	不明鉄	18.5	0.5	0.4	16.5		
5	竪穴 1	錐(?)	8.1	0.6	0.5	10.2		先端ドリル部欠損
6	17 住	釘(?)	4.5	0.8	0.6	4.0		上部欠損
7	土壙 23	鏃(?)	5.2	2.7	0.2	12.4		
8	土壙 5	銭	2.4		0.1	2.8	初鋳元寶	表と裏の鋳型がずれている 周縁部一部欠損 ほぼ完存 (1094～)
9	土壙 22	〃	2.4		0.1	2.1	元豊通寶	周縁部欠損 (1078～) かなり磨滅している
10	〃	〃	2.4		0.1	2.4	天禧通寶	1/8欠損 磨滅が著しい(1017～1021)

図　版

1．調査地近景（南西から。自動車のある周辺）

2．調査地近景（北隣接地から）

第1図版　調査地近景

1．調査地全景（北から）

2．調 査 地（南半部）

第2図版　調査地全景

1．第1号住居址

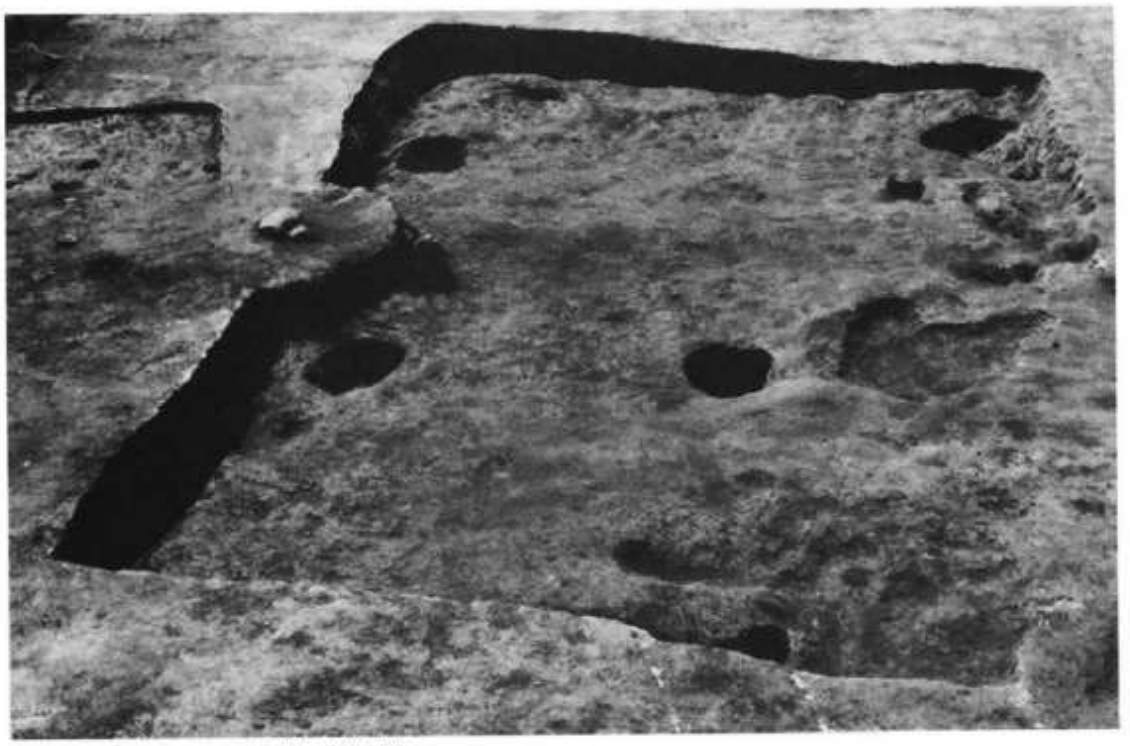
2．第2号住居址

第3図版　第1・2号住居址

1．第4号住居址（手前）、第5号住居址

2．第5号住居址

第4図版　第4・5号住居址



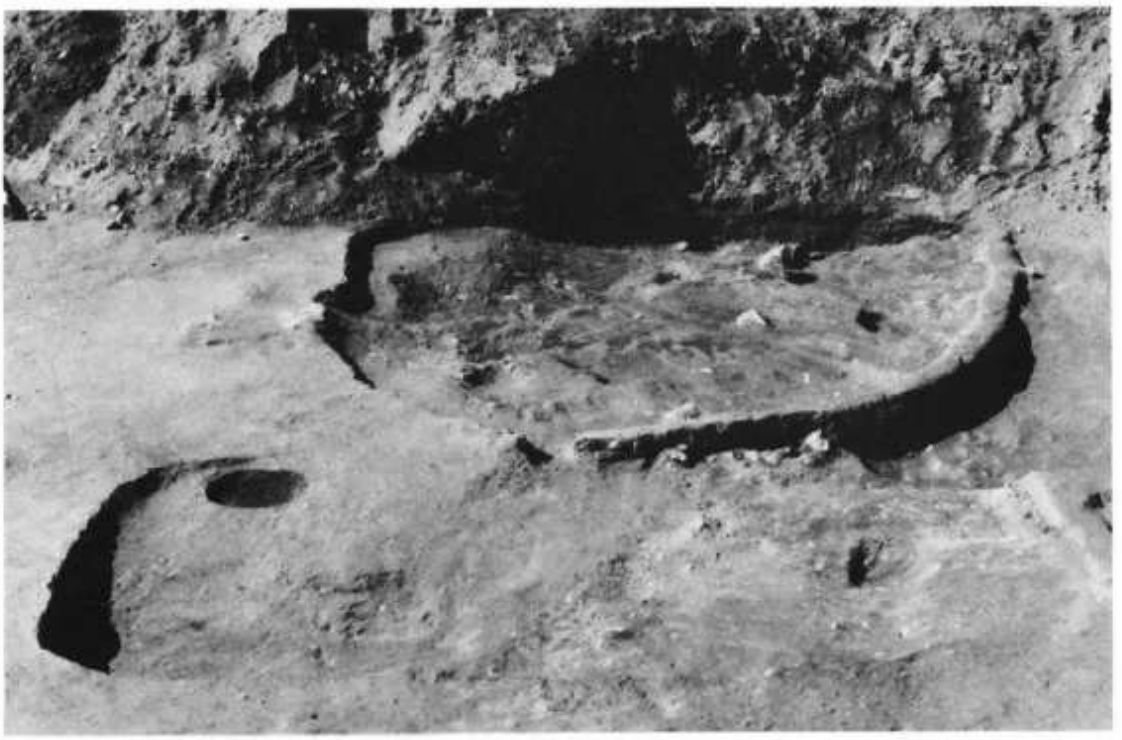
1．第6号住居址

2．第7号住居址

第5図版　第6・7号住居址

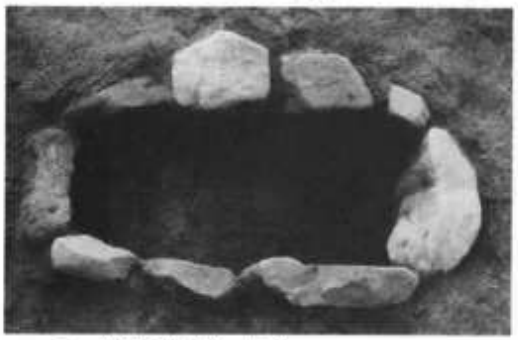
第8号住居址

第6図版　第8号住居址



第11号住居址と竪穴状遺構１（手前）

第７図版　第11号住居址と竪穴状遺構１

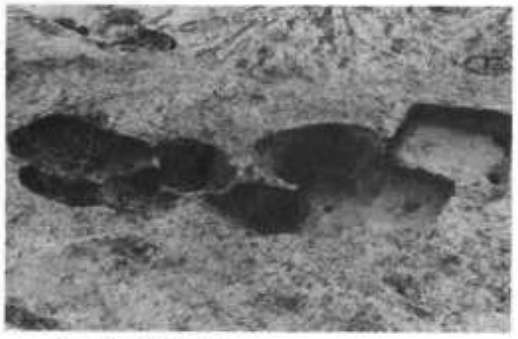


1．第1号住居址　炉址

2．第2号住居址　炉址

3．第4号住居址　炉址（土器：336）

4．第12号住居址　炉址（土器：25）



5．土　壙 3～11

6．土　壙 32(上面)

7．土　壙 32(断面)

8．集　石

第8図版　遺構細部

1．土　壙 24(遺物出土状態、土器:27～32)

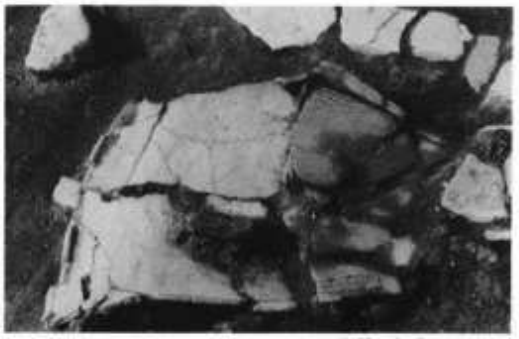
2．第８号住居址　埋甕（右:23・左:24）

3．第14号住居址　埋甕（33）

4．第１号住居址土器出土状態（２）

5．第２号住居址　土器出土状態（20）

6．第２号住居址　土器出土状態（16）

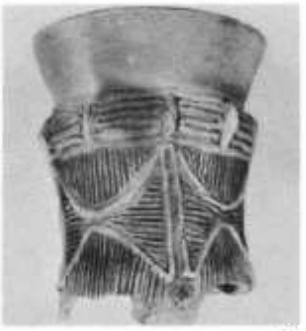


7．第２号住居址　土器出土状態（15）

8．調査スナップ（第２号住居址の掘り下げ）

第９図版　遺物出土状態

1


2

10

4

3

5

6

17

15

20

19

第10図版　出土土器

11

16

12

21

24

23

14

25

33

26

第11図版　出土土器

31

29

28

32

27

37

38

35

36

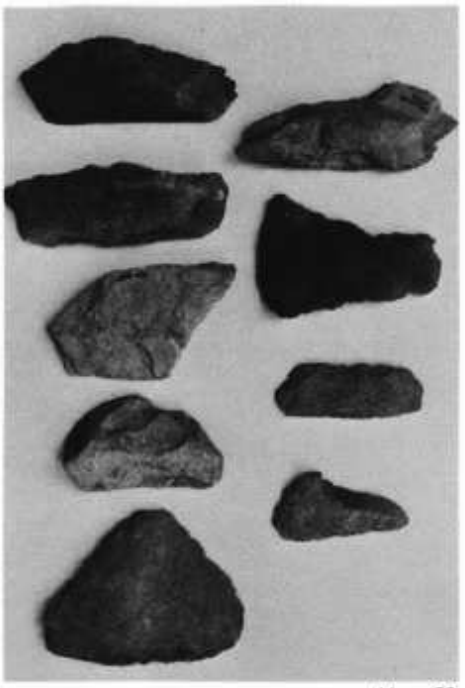
336

358

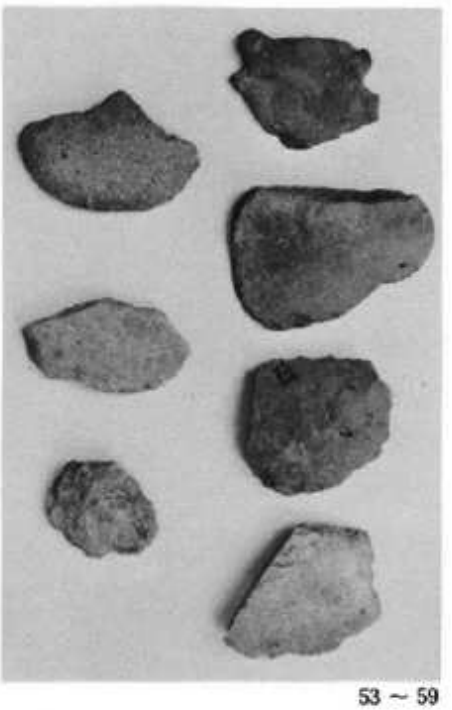
第12図版　出土土器

25 ～ 33

34 ～ 43

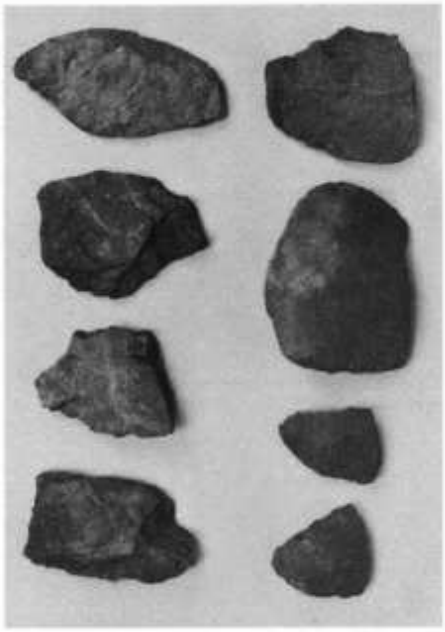


44 ～ 52



53 ～ 59

第13図版　出土石器



60 ～ 67

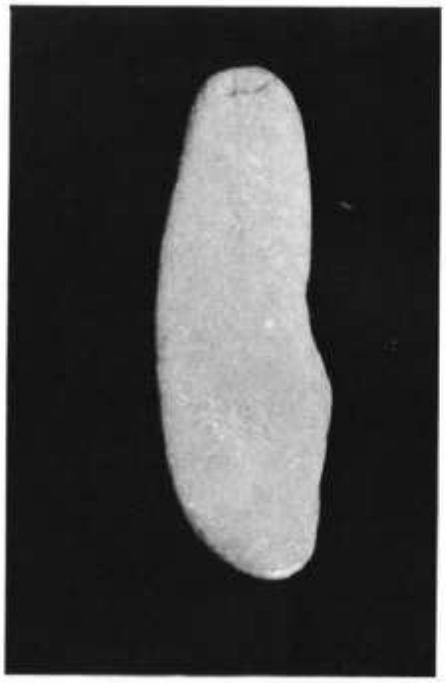
1 ～ 24

76 ～ 87

68 ～ 75

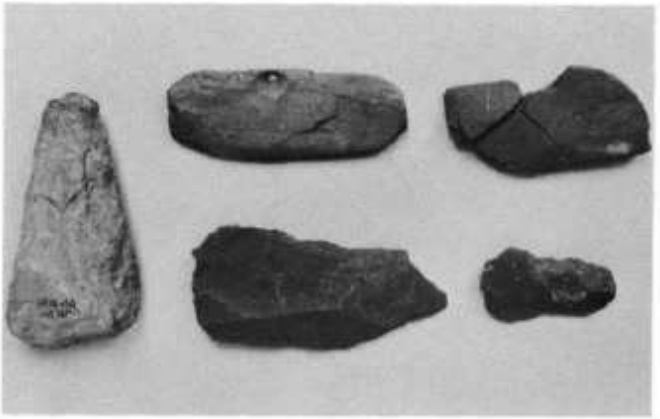
第14図版　出土石器

89



88

1 ～ 7



90 ～ 94

第15図版　出土石器・鉄製品

松本市文化財調査報告No.30

―松本市前田木下遺跡緊急発掘調査報告書―

昭和59年3月20日　印刷
昭和59年3月31日　発行

発行　長野県中信土地改良事務所
　　松本市教育委員会
印刷　電算印刷株式会社